

一般国道
10号線 行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集

津留遺跡

福岡県行橋市大字津留所在遺跡の調査

1991

福岡県教育委員会

津留遺跡

福岡県行橋市大字津留所在遺跡の調査



(1) 津留遺跡Ⅰ区全景



(2) 津留遺跡Ⅱ区全景



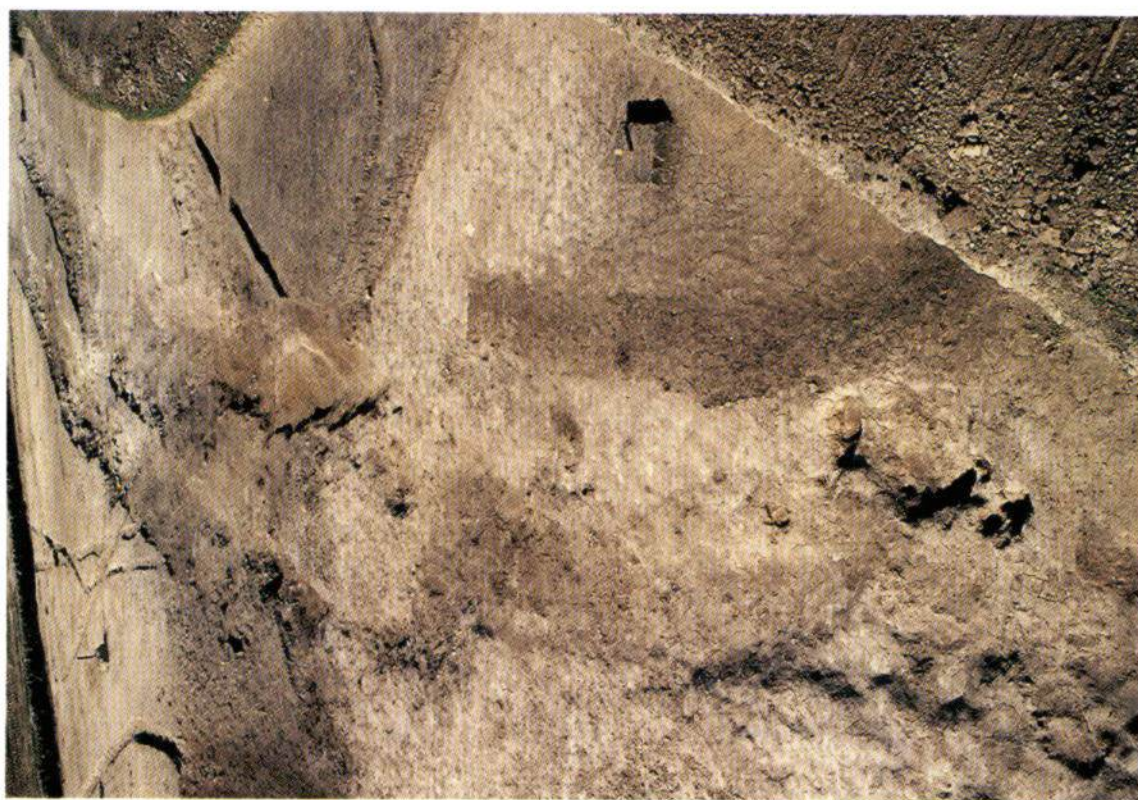
(1) 津留遺跡出土遺物 鏡片 (裏・表)



(2) 津留遺跡Ⅱ区 鏡片出土状態



(1) 津留遺跡Ⅱ区溝 4・5 遺構全景 (遺物出土状態)



(2) 津留遺跡Ⅱ区溝 4・5 遺構全景 (取り上げ後)

序

一般国道10号線行橋バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和62年度と本年度の2ヶ年に2ヶ所の発掘調査を実施しております。

この報告書は、昭和62年秋に発掘調査を行なった行橋市大字津留地区の遺跡について成果をまとめたものです。

本書を、学問研究に、教育の場に、広く活用いただければ幸甚です。

なお、発掘調査にあたり、御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に深く感謝いたします。

平成3年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

- 1 この報告は、1987年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道10号線行橋バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査の記録である。
- 2 本書は、行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第1集となる。
- 3 土器の実測は、福岡衣具子、若松三枝子、鬼木つや子、佐藤みゆきの協力を受け、土器の一部と、玉等と石器と鉄器の実測については副島邦弘が行い、挿図・製図・図版作成は児玉真一、豊福弥生、原カヨ子・森山シズ子と副島が、遺物の復原作業は岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館で実施した。
- 4 遺物写真については、九州歴史資料館の石丸洋が、遺構の写真は、調査担当の副島・小池史哲が撮影した。
- 5 鉄製品の保存科学処理は、九州歴史資料館横田義章がたった。
- 6 本書の執筆・編集は副島が担当した。

本文目次

序

	頁
I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織と関係者	2
II. 位置と環境	5
III. 発掘調査の記録	7
1. 発掘調査の概要	7
2. 津留Ⅰ区の生活遺構と遺物	7
3. 津留Ⅱ区の生活遺構と遺物	28
IV. おわりに	71
1. 鏡片について	71
2. 土器について	78
3. 総括	80

図 版 目 次

- 冠首口絵 1 (1) 津留遺跡 I 区全景
(2) 津留遺跡 II 区全景
2 (1) 津留遺跡 出土遺物 鏡片（裏・表）
(2) 津留遺跡 II 区鏡片の出土状態
3 (1) 津留遺跡 II 区溝 4・5 遺構全景（遺物出土状態）
(2) 津留遺跡 II 区溝 4・5 遺構全景（取り上げ後）

- 図 版 1 津留遺跡全景（北から）
図 版 2 (1) 津留遺跡俯瞰（北から）
(2) 津留遺跡 I 区全景（上から）
図 版 3 津留遺跡 I 区近景（南から）
図 版 4 津留遺跡 I 区土壌状態（左）上から（右）俯瞰
図 版 5 津留遺跡 I 区溝 1 全景（東から）
図 版 6 津留遺跡 I 区溝 2 全景（南から）
図 版 7 (1) 津留遺跡溝 2 遺物出土状態
(2) 津留遺跡溝 2 遺物出土状態（上）南から（下）壺出土状態
図 版 8 (1) 津留遺跡 I 区 3 号土壌
(2) 津留遺跡 I 区（上） 2 号土壌 （下） 5 号土壌
図 版 9 (1) 津留遺跡 I 区 6 号土壌
(2) 津留遺跡 I 区 9 号土壌
図 版 10 津留遺跡 II 区調査区全景俯瞰
図 版 11 津留遺跡 II 区調査区全景（上から）
図 版 12 (1) 津留遺跡 II 区北側全景（東から）
(2) 津留遺跡 II 区南側全景（東から）
図 版 13 (1) 津留遺跡 II 区 10 区全景（西から）
(2) 津留遺跡 II 区 10 区近景（西から）
図 版 14 津留遺跡 II 区住居跡付近近景
図 版 15 津留遺跡 II 区住居跡全景（東から）
図 版 16 (1) 津留遺跡 II 区住居跡遺物出土状態
(2) 津留遺跡 II 区住居跡遺物取上げ後

- 図版 17 (1) 津留遺跡Ⅱ区1号貯蔵穴全景（北から）
(2) 津留遺跡Ⅱ区2号貯蔵穴付近全景（北から）
- 図版 18 (1)津留遺跡Ⅱ区溝全景（東から）
(2)津留遺跡Ⅱ区溝近景（東から）
- 図版 19 津留遺跡Ⅱ区溝4全景（遺物出土状態）南から
- 図版 20 (1) 津留遺跡Ⅱ区溝全景（南から）
(2) 津留遺跡Ⅱ区溝近景（南から）
- 図版 21 (1) 津留遺跡Ⅱ区10区溝3 遺物出土状態（北から）
(2) 津留遺跡Ⅱ区10区溝4 遺物出土状態（北から）
- 図版 22 (1) 上 津留遺跡Ⅱ区10区溝4 遺物出土状態
(2) 下 津留遺跡Ⅱ区溝5 鏡片出土状態
- 図版 23 津留遺跡Ⅰ区出土遺物①
- 図版 24 津留遺跡Ⅰ区出土遺物②
- 図版 25 津留遺跡Ⅰ区出土遺物③
- 図版 26 津留遺跡Ⅰ区出土遺物④
- 図版 27 津留遺跡Ⅱ区出土遺物⑤
- 図版 28 津留遺跡Ⅱ区出土遺物⑥
- 図版 29 津留遺跡Ⅱ区出土遺物⑦
- 図版 30 津留遺跡Ⅱ区出土遺物⑧
- 図版 31 津留遺跡Ⅱ区出土遺物⑨
- 図版 32 津留遺跡Ⅱ区出土遺物⑩
- 図版 33 津留遺跡Ⅱ区出土遺物⑪
- 図版 34 津留遺跡Ⅱ区出土遺物⑫

挿 図 目 次

	頁
第 1 図 津留遺跡周辺地形図 (1/2000)	4
第 2 図 津留遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)	6
第 3 図 I 区遺構配置図 (1/500)	8
第 4 図 1 号溝配置図 (1/100・1/200)	9
第 5 図 溝 1 出土遺物実測図 (1/2)	9
第 6 図 溝 2 断面土層図 (1/40)	10
第 7 図 2 号溝配置図 (1/100)	折込み
第 8 図 I 区溝 2 上層出土遺物実測図 (壺) (1/4)	11
第 9 図 I 区溝 2 上層出土遺物実測図 (甕) (1/4)	13
第 10 図 I 区溝 2 上層出土遺物実測図 (高杯・鉢・その他) (1/4)	14
第 11 図 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (壺) ① (1/4)	15
第 12 図 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (壺) ② (1/4)	16
第 13 図 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (甕) ① (1/4)	17
第 14 図 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (甕) ② (1/4)	18
第 15 図 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (高杯・鉢・その他) (1/4)	19
第 16 図 I 区溝 2 出土遺物実測図 (石器) (1/2)	20
第 17 図 1 号土塋実測図 (1/20)	21
第 18 図 1 号土塋出土遺物実測図 (1/4)	21
第 19 図 2 号土塋実測図 (1/20)	22
第 20 図 2 号土塋出土遺物実測図 (1/4)	22
第 21 図 3 号土塋実測図 (1/30)	22
第 22 図 4 号土塋実測図 (1/30)	23
第 23 図 4 号土塋出土遺物実測図 (1/4)	23
第 24 図 5 号土塋実測図 (1/30)	23
第 25 図 6 号土塋実測図 (1/20)	24
第 26 図 7 号土塋実測図 (1/20)	25
第 27 図 8 号土塋実測図 (1/20)	25
第 28 図 10 号土塋実測図 (1/20)	25
第 29 図 11 号土塋実測図 (1/20)	26
第 30 図 12 号土塋実測図 (1/20)	26

	頁
第 31 図 II 区遺構配置図① (1/500)	折込み
第 32 図 住居跡付近実測図② (1/200)	27
第 33 図 住居跡実測図 (1/60)	28
第 34 図 1 号住居跡覆土中出土遺構物実測図 (1/4)	29
第 35 図 1 号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	29
第 36 図 1 号住 P-4 出土遺物 (石器) (1/2)	29
第 37 図 鉄製品実測図 (2/3)	30
第 38 図 1 号貯蔵穴実測図 (1/40)	31
第 39 図 pit 内出土遺物実測図 (1/4)	31
第 40 図 2 号貯蔵穴実測図 (1/20)	32
第 41 図 pit 内出土遺物実測図 (石) (1/2)	32
第 42 図 表土層出土遺物実測図 (1/4)	33
第 43 図 溝実測図 (1/200)	折込み
第 44 図 溝断面土層図 (1/40)	35
第 45 図 溝 1, 出土遺物実測図 (1/4)	36
第 46 図 溝 2, 出土遺物実測図 (壺) (1/4)	37
第 47 図 溝 2, 出土遺物実測図 (甕) ① (1/4)	38
第 48 図 溝 2, 出土遺物実測図 (甕) ② (1/4)	39
第 49 図 溝 2, 出土遺物実測図 (高杯) (1/4)	40
第 50 図 溝 2, 出土遺物実測図 (1/4)	40
第 51 図 溝 2, 出土遺物実測図 (石器) (1/2)	41
第 52 図 溝 3, 出土遺物実測図 (1/4)	42
第 53 図 溝 4・5, 出土遺構実測図	折込み
第 54 図 溝 4, 覆土中出土遺物実測図 (壺) (1/4)	43
第 55 図 溝 4, 覆土中出土遺物実測図 (甕) (1/4)	44
第 56 図 溝 4, 覆土中出土遺物実測図 (高杯) (1/4)	45
第 57 図 溝 4, 出土遺物実測図 (壺) ① (1/4)	46
第 58 図 溝 4, 出土遺物実測図 (壺) ② (1/4)	47
第 59 図 溝 4, 出土遺物実測図 (甕) ① (1/4)	48
第 60 図 溝 4, 出土遺物実測図 (甕) ② (1/4)	50
第 61 図 溝 4, 出土遺物実測図 (高杯) (1/4)	51
第 62 図 溝 4, 出土遺物実測図 (器台・支脚・鉢・手捏等) (1/4)	52
第 63 図 溝 4, 出土粘土塊実測図 (1/4)	52

	頁
第 64 図 溝 2・4・5, 出土遺物実測図 (1/2, 1/4)	53
第 65 図 溝 4, 出土遺物実測図 (石器) (1/2)	54
第 66 図 溝 4, 出土遺物実測図 (石器) (1/2)	55
第 67 図 溝 4, 出土遺物実測図 (玉) (2/3)	55
第 68 図 溝 4・5, 特殊遺物実測図 (1/4)	56
第 69 図 溝 5, 覆土中出土遺物実測図 (壺) (1/4)	57
第 70 図 溝 5, 覆土中出土遺物実測図 (壺) (1/4)	58
第 71 図 溝 5, 出土遺物実測図 (石器) (1/2)	59
第 72 図 溝 5, 出土遺物実測図 (壺) ① (1/4)	60
第 73 図 溝 5, 出土遺物実測図 (壺) ② (1/4)	62
第 74 図 溝 5, 出土遺物実測図 (甕) ① (1/4)	64
第 75 図 溝 5, 出土遺物実測図 (甕) ② (1/4)	65
第 76 図 溝 5, 出土遺物実測図 (高杯・鉢・手捏・器台他) (1/4)	66
第 77 図 溝 5, 出土遺物実測図 (鏡) (実大)	67
第 78 図 溝 4・5, 出土遺物実測図 (石器) (1/2)	68
第 79 図 溝 6, 出土遺物実測図 (1/4)	69
第 80 図 溝 e, 出土遺物実測図 (2/3)	69
第 81 図 表採資料実測図 (2/3)	69
第 82 図 行橋平野鏡出土分布図 (1/50,000)	72
第 83 図 行橋平野出土鏡式一覧① (1/3)	74
第 84 図 行橋平野出土鏡式一覧② (1/2)	76

付 図 目 次

付図 1. 津留遺跡発掘区地形測量図 (1/300)

付図 2. 津留遺跡 I 区 2 号溝実測図 (1/30・1/60)

I. は じ め に

1. 調査に至る経過

国道10号線は、北九州市を起点とし、東九州の主要な都市を経て鹿児島市に至る延長約450kmの大動脈である。

北九州市より大分市に至る区間は、今後一層の需要と発展が予想される地域でもある。近年行橋市から豊前市にかけて、北九州市のベッドタウンとして脚光をあび、人口の増加の著しい地区で、国道の交通量も増加の一途をたどり、現在飽和状態に達している。

こうした中で、国道10号線の交通混雑を解消し、地域の健全な発展に寄与するため、北大道路の一環として全延長約5.4kmの行橋バイパスが計画された。

事業化は昭和48年度に計画され、昭和59年工事着手となった。昭和59年9月（建九北調933号）で、行橋バイパス路線内の埋蔵文化財の分布調査の依頼が出され、橋梁の下部工事については、工事着工されても支障がありませんという回答が出されている（59教文第631号）。

路線の橋脚部分以外の埋蔵文化財について、昭和60年7月に再度回答を出している。金屋地区には文献上から埋蔵文化財が所在する可能性がありますので、試掘調査が必要である由を回答し、他については、そのつど協議方を依頼していた（60教文1110号）。

昭和61年5月に福岡県教育委員会文化課は発掘調査事務所を、椎田バイパスを中心に、北が行橋バイパス、南が豊前バイパスと北大道路に関係する発掘調査が進行するために、椎田町に県文化課椎田事務所を設置させて、発掘調査の円滑化をはかった。

秋には、椎田バイパスの第1地点辻垣について、用地買収が終了にともない試掘調査を行ない遺跡の確認がなされ、昭和62年度当初からの発掘調査となった。

一方、行橋バイパスは順調に橋梁の下部工事も終了し、一部農業用の仮設道路が付けられ、用地買収のコンクリート杭も埋設されていた。行橋市大字津留地区もその一つであった。本線工事の盛土部分の工事は、昭和62年11月の工事発注という予定で進行していったが、椎田バイパスの辻垣とは狭谷をはさんだ対岸であり、地形的にも同一であるため、遺跡の有無の分布調査を実施してみると、土師器や石器も採集でき、その上に土側溝には黒い落ち込みがみられたことから、6月末に試掘調査を実施して、遺構の存在を確認した。このことを受けて、建設省との協議にはいり、梅雨明けと同時に、全面調査を実施することとし、新たに行橋バイパス分の予算を計上することとなり、工事発注が11月からということで、早急に調査にはいることとなった。発掘調査は昭和62年7月25日から昭和62年10月31日迄の約3ヵ月間を充てた。

2. 調査の組織と関係者

昭和62年度の津留遺跡の調査と平成2年度金屋遺跡の発掘調査及び整理報告をするにあたっての組織と関係者は、下記の通りである。

〔建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所〕

所 長	高橋松男（前任）	森 久
副所長	竹中幸生（前任）	九谷秀明
建設専門官	古賀秀登（前任）	田中睦憲
工務課課長	衛藤恒利（前任）	溝上利毅
工務係長	諏訪憲二（前任）	浅田敏光
設計係長	西嶋正男	
調査課課長	久良木裕（前任）	松崎安則
調査係長	犬束昌生（前任）	田中敏則（前任） 荒瀬美和
建設技官	池田稔浩（前任）	井上敏彦
建設監督官	児玉孝夫（前任）	田中常美

〔福岡県教育委員会〕

総括 教育長	竹井宏（前任）	御手洗康		
教育次長	大鶴英雄（前任）	洲上雄幸		
指導第二部部長	大平岩男（前任）	月森清三郎		
指導文化課課長	葉石勲（前任）	六本木聖久		
参事	森本精造			
課長補佐	平 聖峰（前任）	安野義勝		
技術補佐	宮小路賀宏（前任）	石松好雄		
参事補佐	柳田康雄	井上裕弘	浜田信也	副島邦弘
調査 文化課調査班（総括）兼務	柳田康雄			
	技術主査	副島邦弘（現参事補佐）		
	主任技師	小池史哲	（現教育庁福岡教育事務所） 技術主査	
	主任技師	緒方 泉	（現教育庁京筑教育事務所） 主任技師	
	主任技師	飛野博文		
	技師	小川泰樹		
庶務 文化課参事補佐兼管理係長	加藤俊一（前任）	池原脩二		

なお、昭和62年の発掘調査の担当は、副島邦弘、小池史哲の両名があたった。調査補助員として舌間悟（現若宮町教委員会）の協力を受けた。調査の準備段階で、津留区区长、馬場区区长及び行橋市教育委員会の協力・援助を受けた。

調査及整理中には一川淳江・川本義継・宮本工・浜島三司・高橋章・長嶺正秀・渡辺正気・小田富士雄氏から指導助言を受けた。

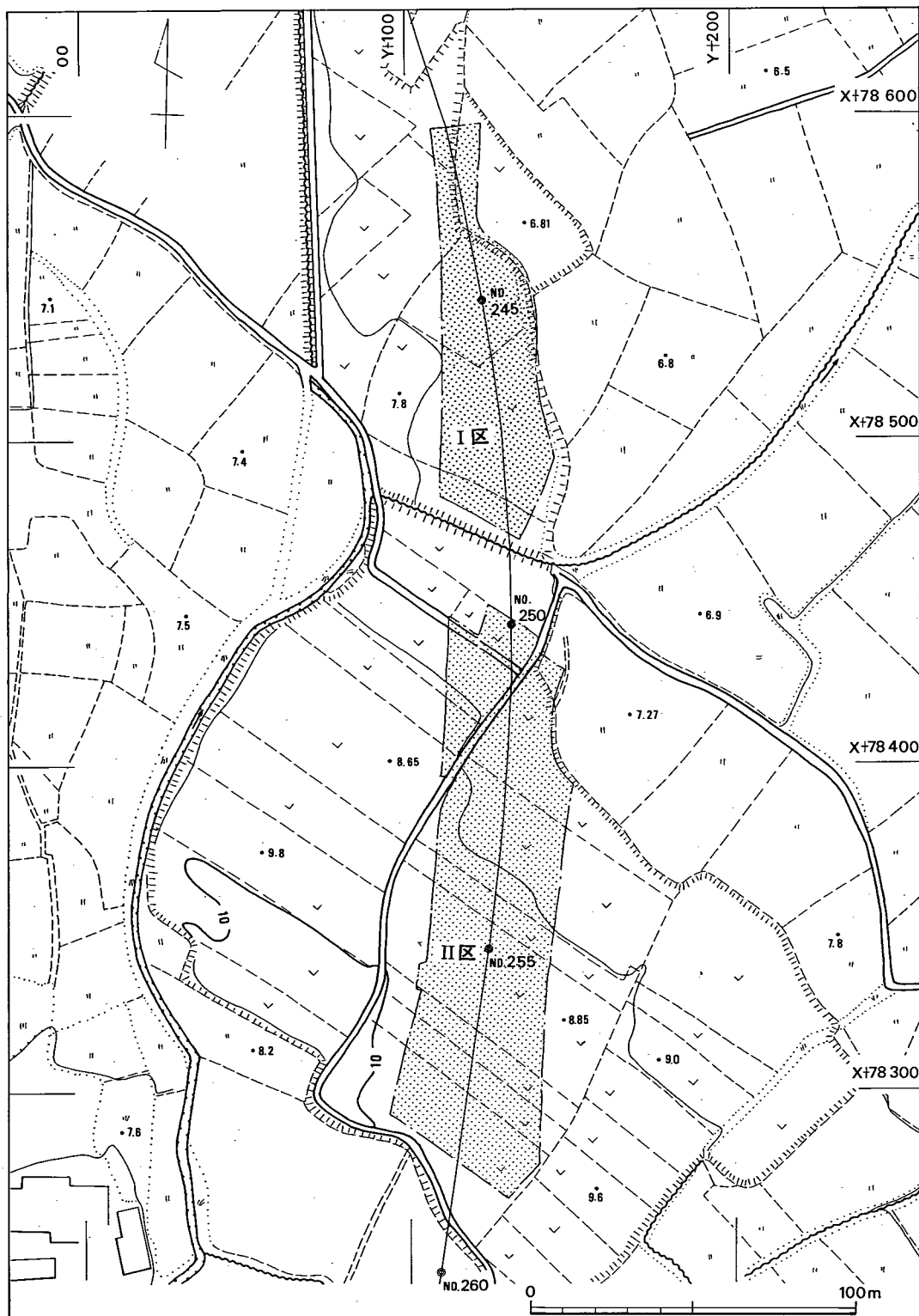
発掘作業には、下記の人々から協力を受けた。

則行憲一郎・植村利道・世良雅昭・宮田章・広門常生・松本一政・宮崎真澄・浅富守・里山一二三・國永忠士・森門良則、犬塚カヲル・田原フジ子・田村弘子・鎌田ツル代・森仲美・中村裕子・松下敏子・本島マチエ・溝辺慶子・泉恭子・原田美紀子・山本喜美子・荒上敬子・宮下温子・城戸由恵・五所絹代・奥キミエ・國永郭子・國永美沙枝・則松由美子・則松代志枝・國永敏枝・図師キヌエ・森脇勢津子・宮岡艶子・城戸数枝・福谷久子・横山康子・馬場清子

整理報告書作成の折には、岩瀬正信・豊福弥生・原カヨ子・福岡衣具子・若松三枝子・佐藤みゆき・鬼木つや子・森山シズ子諸氏協力を受けた。記して感謝の意を表す。

一般国道10号線行橋バイパス関係埋蔵文化財一覧表

地点名	遺 跡 名	遺跡の概要	対称面積(㎡)	発掘面積(㎡)	備 考
No.2	津 留	散 布 地	15,000	13,000㎡	昭和62年度
No.1	金 屋	中 世 集 落	5,000㎡	4,700㎡	平成1年試掘 調査予定 平成2年4月



第 1 図 津留遺跡周辺地形図 (1/2000)

アミメは発掘調査区

Ⅱ. 位置と環境

行橋市を中心とする京都平野は、北から長峽川・今川・祓川の3本の河川によって、つくられた沖積平野である。

当該遺跡は行橋市大字津留字足尾・安蔵にあたる。祓川の下流右岸の平野部に位置し、河口から2km上った地点である。

古くは鶴とも書いたもので、『日本地名大辞典』によると、昔は入海で、「鶴の湊に着岸し（応永戦覧記）」「上代今井津の湊に着岸せしが、海上涸れて陸となり、津留の湊に着岸せしと聞ゆ」（地理総鑑）など見え、「湊」があった。地名の由来には「豊前遠鏡」によると「古代は海水、及びかつ上つ方国府の盛なりし時は、湊もありして、鶴と云し名の残れるにて、応永軍記其外物にも鶴湊とあるも其故なるべし、かく其鶴と云事、また蓑島の俗伝には此島形鶴の翼延したるに以たる故といへれど、そは受けがたく、実の鶴にて此島の以前は多く群居る故の名なるべし」という。水辺に近い地名がこの付近に残っている。下流の真菰^{まこも}がそれである。

遺跡は標高10m前後で、弥生時代終末から古墳時代初頭が中心である。上流の辻垣・徳永の祓川の右岸の丘陵地に沿って、多くの遺跡が存在している。左岸の平野部にあるため現在水田面であるため、右岸が左岸に比して丘陵地となり高い。

当該遺跡の同時期は辻垣畠田・長通・ヲサマル等や徳永川の上遺跡が名高い。周辺部の丘陵には、古墳群や横穴墓群がつくられ、豊津には豊前国府や国分寺・国分尼寺がつくられ、豊前国の中心がこの祓川流域で、河口から5km上流に位置する。

この河口が、当時の港であった津留や今井の湊となる。今井には市が立ち、中世期には、郡内唯一の積出し港として、瀬戸内海を通して京と通じていた。

万葉集にはこの付近をこう詠んでいる。

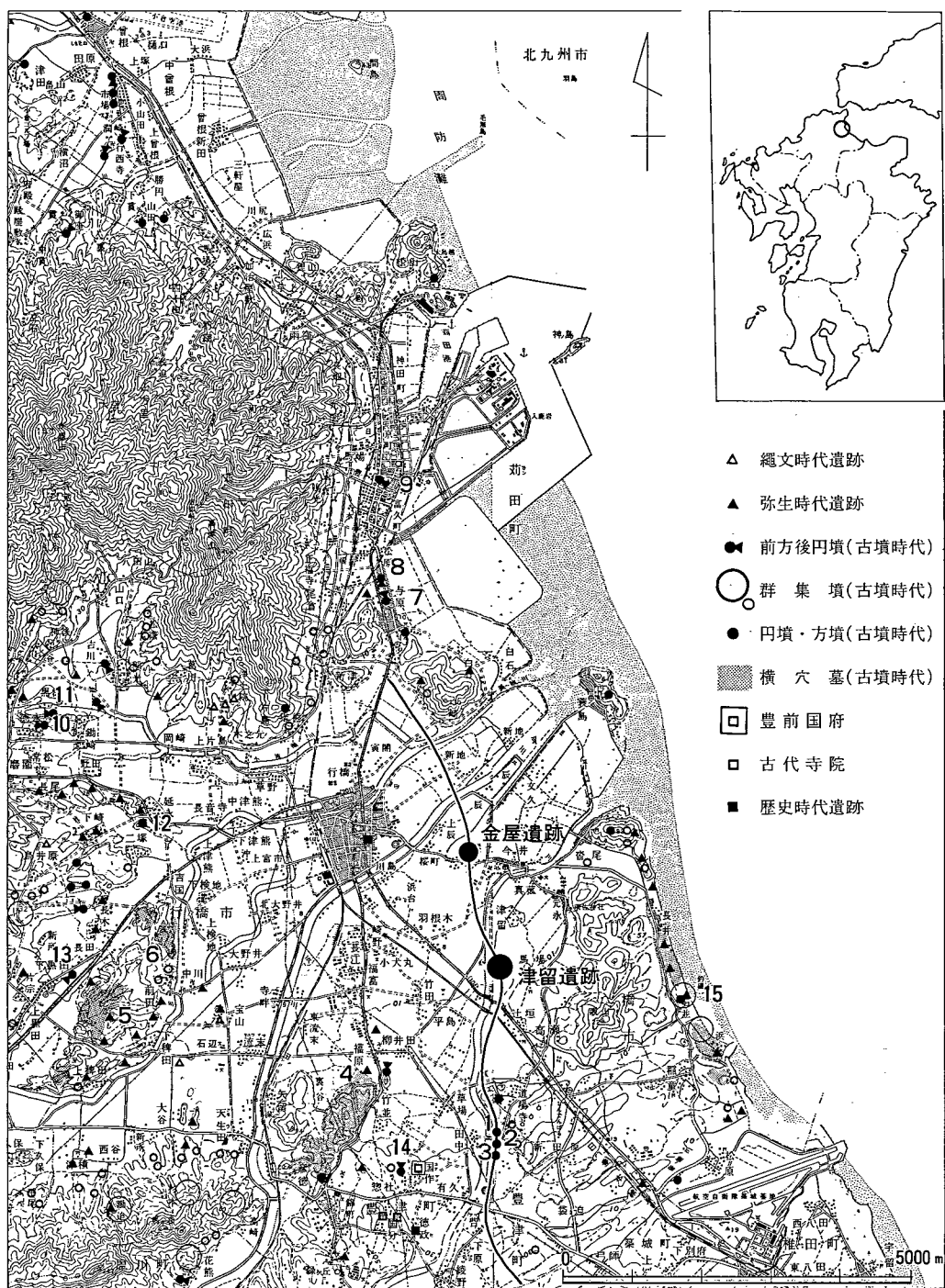
豊国の企救のいけなる ひしのうれを

採^{つむ}とや妹が み袖ぬれけむ (3876)

市が立った今井の市とその横の金屋には鋳物を生業としていた鋳物師大工の集落があり、梵鐘等を製作していたものと言われている。

周防灘を望む標高70mの兵庫山山頂に杳尾城があって、これは征西將軍宮懐良親王とともに下向した北畠顯吉が海上防備のために築城したといわれるが、遺構等は確認されていない。同海岸沿いの蓑島にも古城跡があって、室町期中頃に藤原邦吉が在城し、瀬戸内の水軍を支配していたと言われている。

古代から中世末まで、綿々としてこの地が栄えていたことが理解される。周辺の遺跡は第2図を参照されたい。時代ごとに分類している。



第 2 図 津留遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)

- | | | |
|------------|------------|-------------|
| 1. 徳永居屋敷遺跡 | 6. 前田山遺跡 | 11. 大丸古墳 |
| 2. 徳永鋤先遺跡 | 7. 御所山古墳 | 12. ビワノクワ古墳 |
| 3. 徳永川の上遺跡 | 8. 番塚古墳 | 13. 庄屋塚古墳 |
| 4. 竹並遺跡 | 9. 石塚山古墳 | 14. 惣社八幡古墳 |
| 5. 下稗田遺跡 | 10. 徳永丸山古墳 | 15. 石並古墳 |

Ⅲ. 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要 (第1図, 図版1)

当該遺跡は、ほぼ中央部に幅1.5mの水路が東西方向にはいり、これに並行して2m農道がついている。水路を境にして南側が1m高くなっている。

北側と南側はこの水路で字名が相違する。北側をⅠ区として、地籍は大字津留字足尾で、南側は、大字津留字安蔵でⅡ区と称した。

またⅡ区の北側には東西方向へ斜めに農道が横切っているため、この地区をⅡ区の10区とした。

津留Ⅰ区から検出された遺構は

溝	2	(中世溝1 弥生時代終末から古墳時代初頭期溝1)
土 墳	12	(近代土墳5 死牛馬を埋めるもの 近世土墳5 その他土墳2)
柱 穴	若干	

津留Ⅱ区(10区含めて)からは

溝	6	(弥生時代終末から古墳時代初頭のもの 溝 ₁ ～溝 ₆)
住居跡	1	(弥生時代末期)
貯蔵穴	4	(弥生時代末期)
小 溝	7	(歴史時代のもの 溝a～溝f)
柱穴群		

このⅠ区・Ⅱ区を含めて津留遺跡は、弥生終末期から古墳時代初頭の生活面で、生活遺構の各種を検出した。

以下、項を新ためてⅠ区から説明を付す。

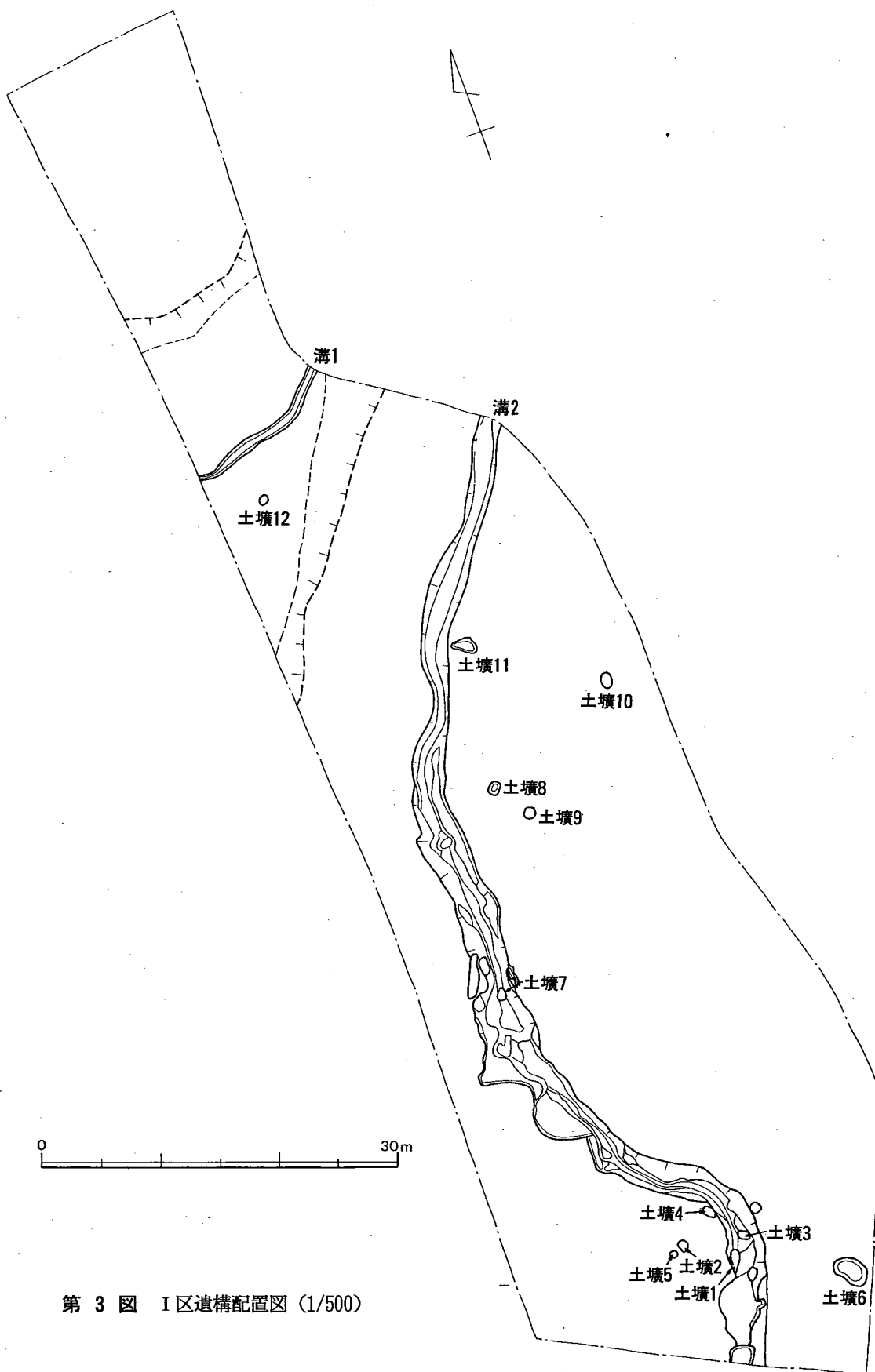
2. 津留Ⅰ区の生活遺構と遺物 (第3図, 図版3～9)

津留Ⅰ区から検出された遺構は第3図の様に、溝2・土墳12である。

(1) 溝 (第4図, 図版5)

溝1 (第4図)

発掘区の北側にあって、東西方向に全長5m、幅0.2～0.5mで深さ0.3～0.4mで、断面U字形を呈する溝状遺構で、この溝から出土した遺物は、黑色土器の高台部分と高台付碗土師器



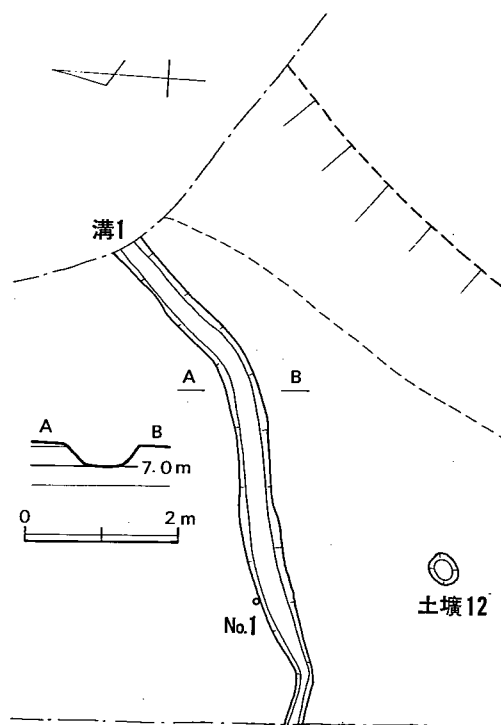
第 3 図 I 区遺構配置図 (1/500)

が溝の肩の部分から出土している。時期的には、歴史時代の10世紀後半の所産であり、遺構もこの時期である。

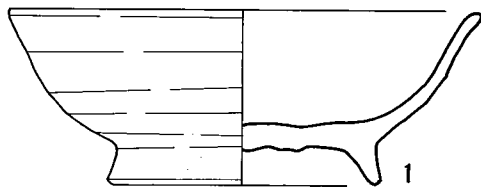
出土遺物（第5図, 図版23）

①は溝中央部の肩付近から出土したもので、土師器の高台付の椀で、口唇部は肥厚で、内側に内傾して内底にいたっている。高台は後に貼付けている。口径12.4cm、器高4.6cmで器面の調整は表裏ともナデ仕上げで、色調は黄褐色を呈し、焼成は良である。編年的には、大宰府I-2C類で、10世紀後半頃に比定される。

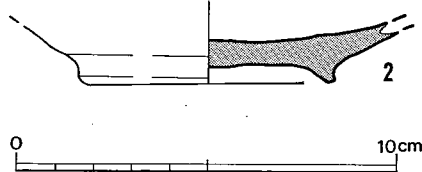
②は溝の覆土から出土したもので、高台部分の破片で、黒色土器である。胎土に細粒砂を含み、色調は黒色で、内底は黄褐色を呈していたもので、高台は貼付けてあるものである。器面の調整はナデ仕上げである。



第4図 1号溝配置図 (1/100, 1/200)



第5図 溝1出土遺物実測図 (1/2)

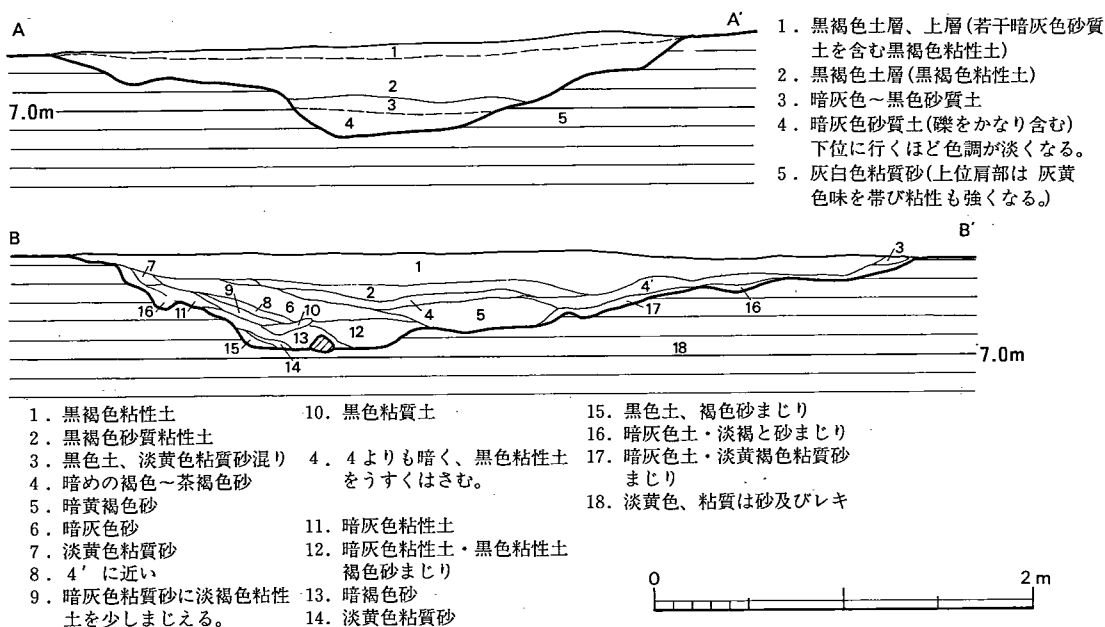


溝2（第7図, 図版6・7）

発掘区の南側の中央部から南北方向へS字状に蛇行しながら、北東端へ流れていた溝状遺構で、全長55m、最大幅1.6m、最狭幅0.5mであり、底面や覆土には、あるいは溝肩に古式土師器やミニチュア土器等の一括遺物がみられ、ほぼ2分類できる。すなわち、上層のものと、下層のものに大別される。

時期的には、ほぼ弥生終末から古墳時代初頭ころの溝であった。

断面図をまとめると第6図のようになる。中央部のA-A'の断面図は、付図の溝2の遺構実測図に示めた北側のもので、底面はU字溝であった。層からみると若干の溜りがあったもので、作り直しが行なわれていないものである。溝底より遺物の出土がみられる。



第 6 図 溝 2 断面土層図 (1/40)

B-B'の断面図は、付図の南側で、一番広がった部分に入れたものである。溝2の掘られた初期の頃は狭いもので、底面幅は0.7mで、断面がU字形を呈するものであったのを、掘り直されて、開削され拡げられており、断面はだらだらと播鉢状に落ちている。この掘り直された溝のものが一応のメルクマールになる。

時期的には遺物の古式土師器から弥生終末から庄内併行期で古墳時代の初頭所産である。

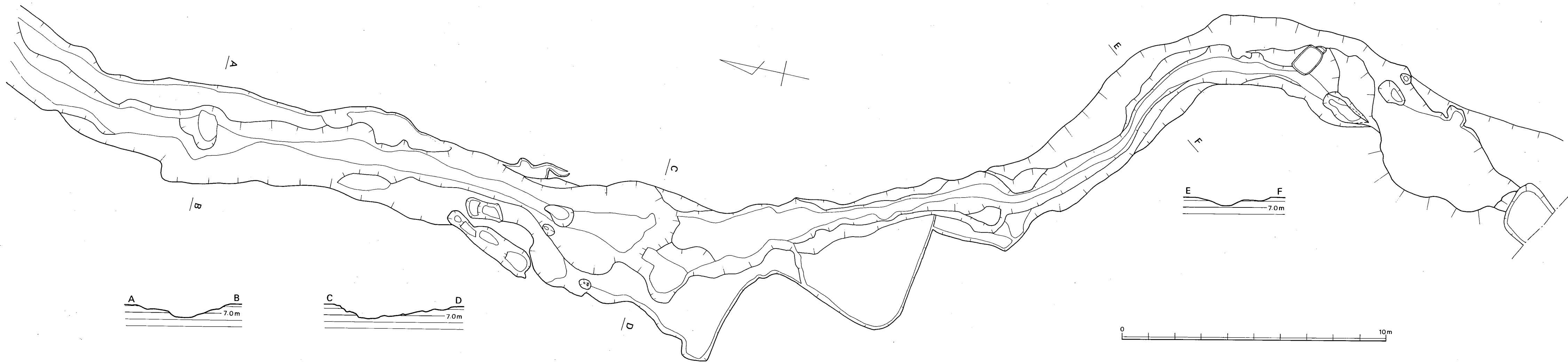
出土遺物 (第8～16図, 図版23～25)

付図2の様に出土状況が理解できであろう溝底及び肩の部分で遺物が出土している一括資料として押えることができる。中央部分については掘り直されているために大別されると思われる。これをもとにして上層と下層で分けた。

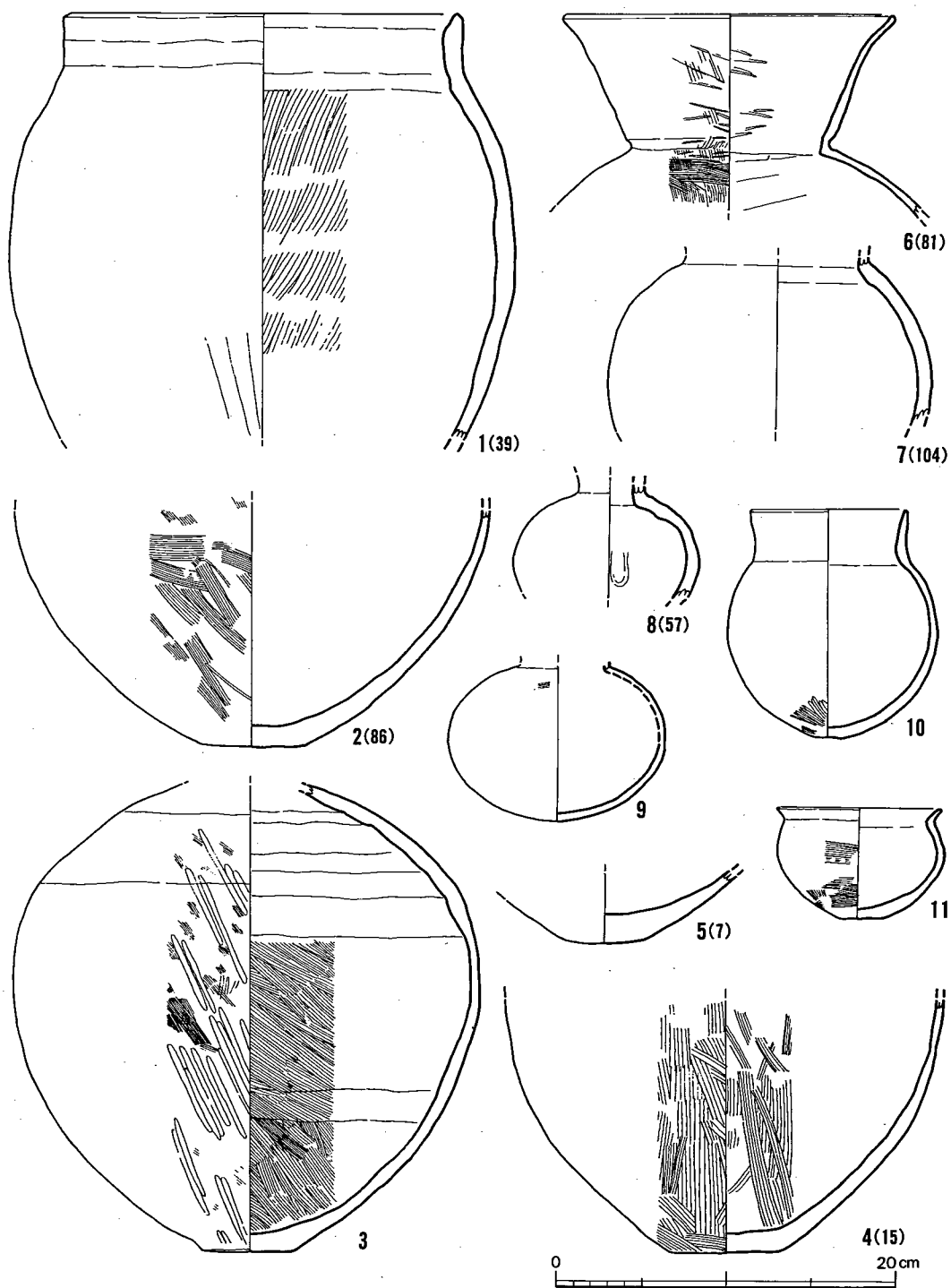
上層 (第8～10図, 図版24)

出土遺物の器種は壺・甕・高杯・鉢・手捏等である。

壺 (①～⑩) ①は直口の壺で在地系のもので、内面の頸部以下ハケメで、胴部下半はナデ、外面は胴部下半ヘラケズリが残り、他はナデ仕上である。口径23.8cm, ②～⑤は底部で、③は平底で、他は平底に近い丸底である。大型のもので底径が5～7cm内外である。⑥～⑨までは長頸壺で、⑦～⑨は球形状の胴部破片、⑧は口径9.8cmで、内面は頸部以下はヘラケズリ、外面には口頸部にヨコナデで、頸部以下ハケメである。⑩は口が直行する小形もので丸底を呈し、



第 7 图 2号溝配置図 (1/100)



第 8 图 I 区沟 2 上層出土遺物実測図 (壺) (1/4)

底部は外面ヘラミガキで他内外ナデ、口径9.2cm、⑪は小形丸底の壺で、外面にハケメが残っている。

甕（⑫～⑲）⑫～⑭は口縁が「く」の字に外反しながら内面に稜を有するもので、⑫はほぼ完形のもので、口径14.8cm、器高19cmを計測する。内面はヘラケズリで、外面をタタキをナデ消している部分もあるが全体にススが付着して黒味を帯びている。⑬・⑭は口縁部破片である。⑮・⑯は口頸部で前者より長く、胴部最大径がほぼ中央部にあつて、胴部下半は球体状になすもので、底部は丸底である。両者とも内面調整は頸部以下ヘラケズリで、外面はハケメで⑯は後にナデ仕上げである。⑰は球形のカタの部分で、内面はヘラケズリ、外面は竹管の様なものを押してその後ハケメで消している。⑱は口縁部が外反し、内面の稜はみられず丸くなっている。胴部は球体状をなして、内面の調整はヘラケズリ、口縁部付近はハケメ、頸部はナデで、外面はハケメで口縁部はハケメをナデ消している。⑲は口縁内部は直立しながら外側に開き、カタの部分に稜をもつもので、その以下はヘラケズリである。外面はナデ仕上げで一部にススの付着が見られる。⑳は胴部破片で、内面ヘラケズリ、外面タタキ後にハケメである。㉑・㉒・㉓は口縁部破片で、内面の稜ははっきりしていないものである。㉑は内外面とも風化が著しく調整不明である復原口径16.3cm。㉒は口縁部が異常に外反している。内外面とも風化著しく調整不明瞭。復原口径21.2cm。㉓は口縁部は短かく内面はヘラケズリで、外面はハケメをナデ消しているが一部にハケメが残る。

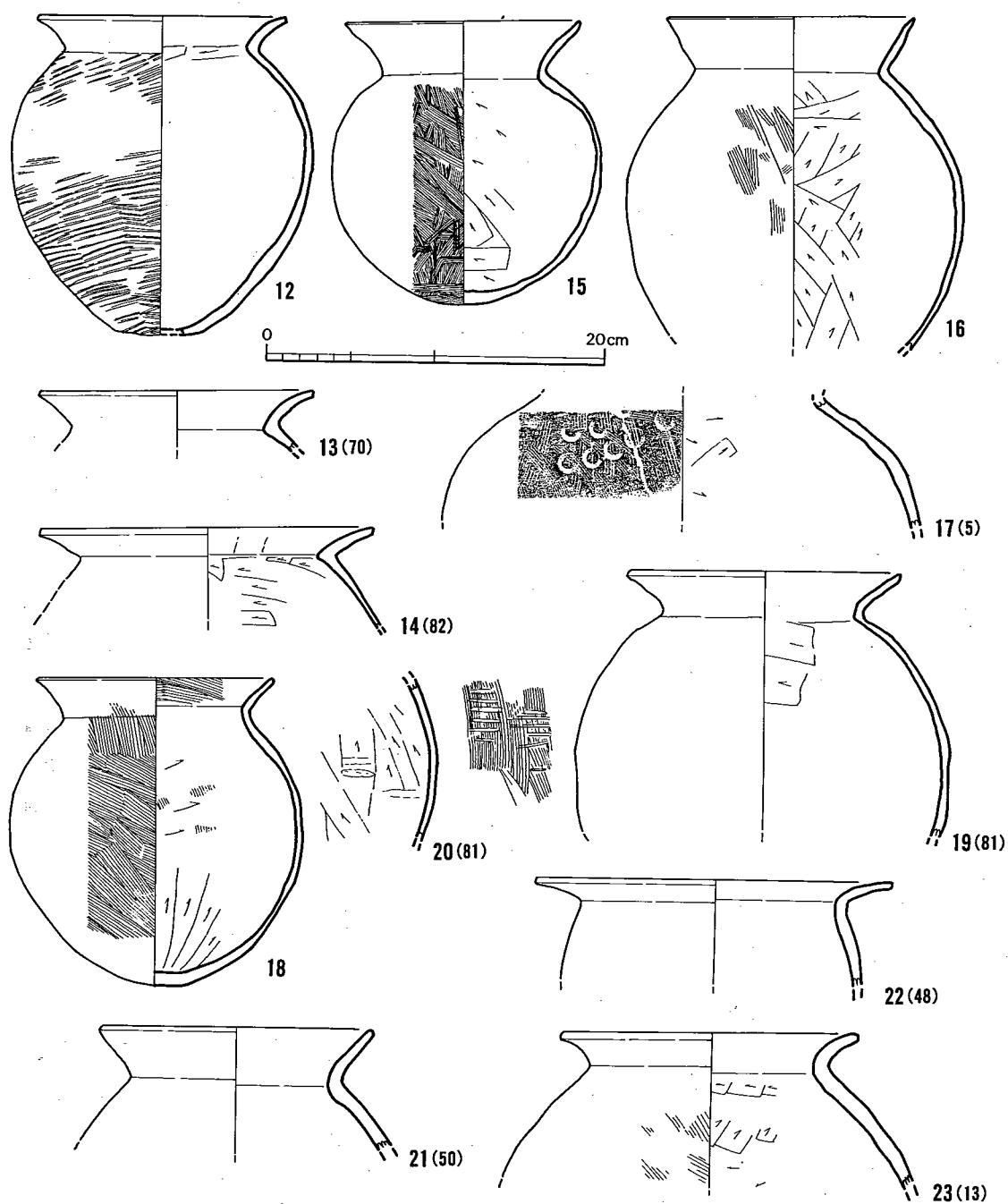
高杯（㉔～㉙）㉔～㉖まで口縁部破片である。㉔・㉕は杯部に一段、段を有するものである。㉖は直立するもの、㉗は段を有しながら大きく外側に開くもので、口径22cm。㉘～㉙は脚部破片である。㉘は柱状部がエンタシス状になるもので、裾部に4つの孔を持っている。ヘラにてミガイテイル、柱状内面はヨコナデである。㉙は大型のものの脚部で口縁部が大きく外反する。㉚は小型のものの杯部。㉛・㉜も小型のもので、柱状がエンタシス状になるものである。㉝は杯部と脚部接合部で、裾部が大きく開くものである。小型のもの。㉞も小型のものの脚部である。

鉢（㉟～㊱）中型のものが㉟、㉡～㉣は小型のもので、㉤・㉥は台付鉢の破片、㉦は筒形のもので一応この器種に入れた。㉧の内面の調整はハケメを口縁部に以下ヘラケズリで底部にいたる。㉨は、内外面ヘラミガキで、底部に黒斑があり、㉩～㉪は手捏のものである。㉫は小さな台が付いているもの。㉬は中型の鉢に付く台である。㉭は口縁部は直口するもので、指痕の押えが残り、以下はヘラケズリで平底をなすものである。

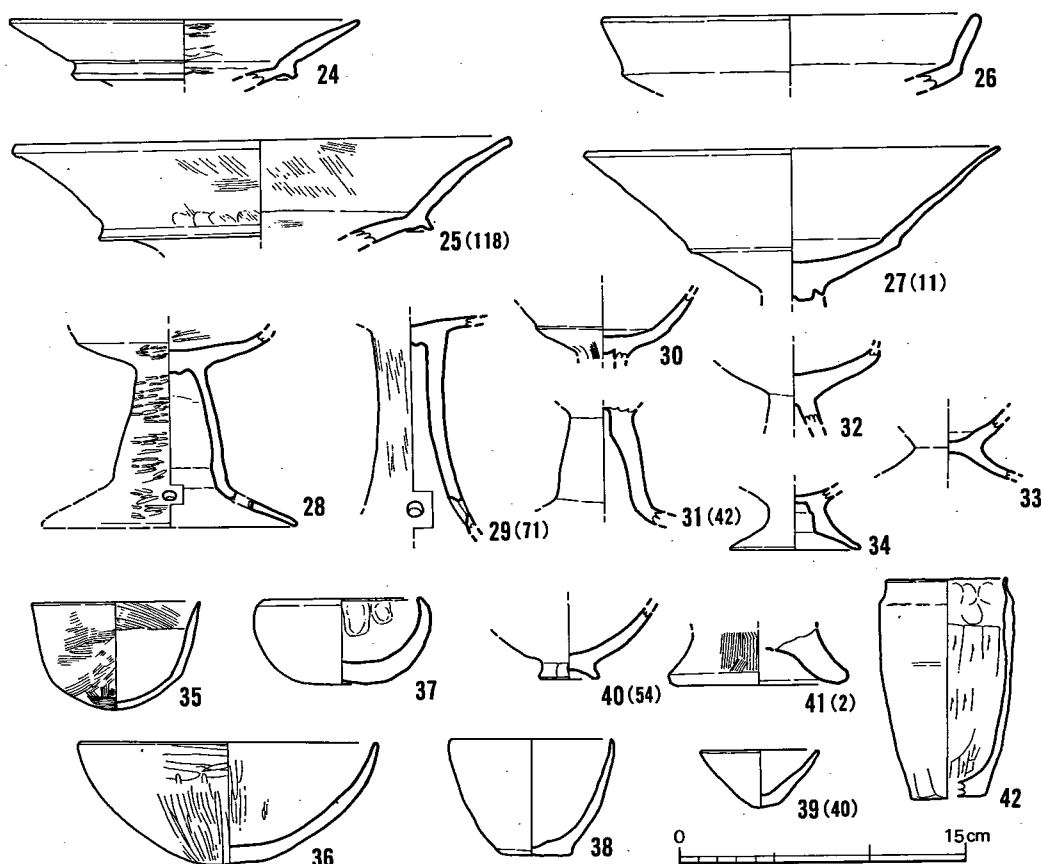
下層（第11～16図、図版25）

溝2の下層は溝底の遺物を中心にまとめてみた。壺・甕・高杯・鉢・石器の順で述べてみる。

壺（①～⑤）①～⑤は複合口縁のもので、②・③・④は内傾して外弯するものである。いわゆる豊前系のもので⑤は畿内系のものでの特徴である。①は口縁部が内傾し、口唇端部は平坦面をもち頸部が短く直下に三角凸帯をもち球体胴をもち最大径に「コ」の字状の凸帯をもって下

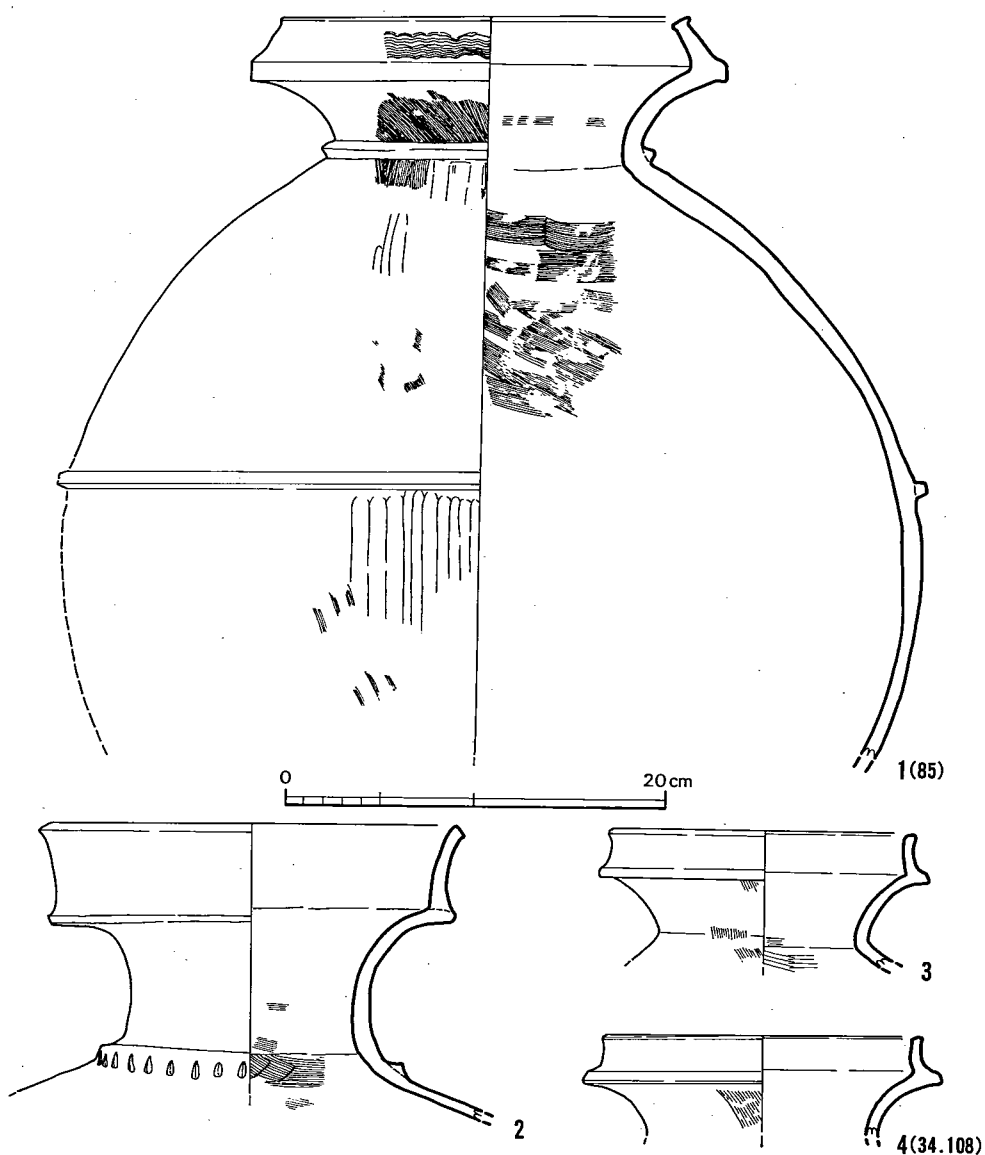


第 9 图 I 区沟 2 上層出土遺物实测图 (甕) (1/4)



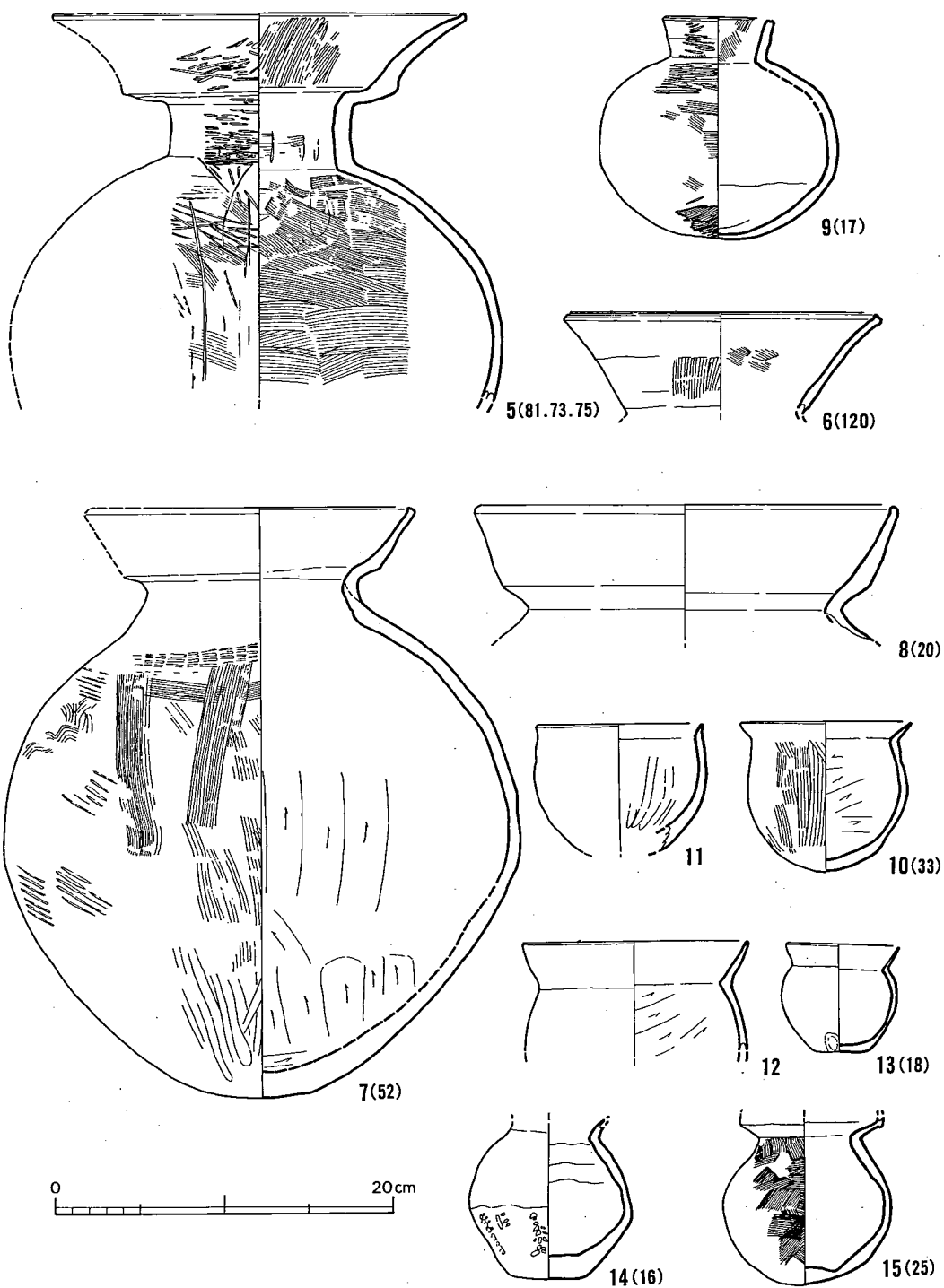
第 10 図 I 区溝 2 上層出土遺物実測図（高杯・鉢・その他）(1/4)

半にいたっている。内面外面は細いハケを主要な施文具として使用し、外面の口縁には櫛描波状文、頸部以下ハケ、胴部はハケをヘラミガキしている。②・③・④は口縁がほぼ直立する様で②は頸部直下に三角凸帯をもち刺突文を施文している。②は復原径21.6cm, ③は15.2cm, ④は16.8cmを計測する。⑤は復原口径24.5cmで、口縁部は大きく外反し、頸部は直に落ちて球体胴部に接合する。胎土に細、小砂を含み、色調は茶褐色である。器面の調整は口縁内面はヘラでタテ方向にミガキ、頸部はハケメ後にケズリが残り、胴部内面はハケメのヨコ方向である、接合部は指痕が残りその上からハケメで調整している。外面は口縁から胴部までヘラミガキを入れている。⑥は長頸壺の口縁部破片で、器面の調整はハケを使用している。⑦・⑧は山陰系の土器である。口縁部と頸部接合点には一段、段がついて頸部は内傾しながら球体胴にいたる最大径は胴部中央にある。胎土には細・小砂、角閃石を含み、色調は黄褐色で、胴部下半は黒味を帯びている。器面の調整は、胴部内面はヘラケズリで口縁部から頸部、胴部上面はナデている。外面は頸部下半には原体の押引きとヘラのミガキで、基本的には球体の胴部全体はタタキ

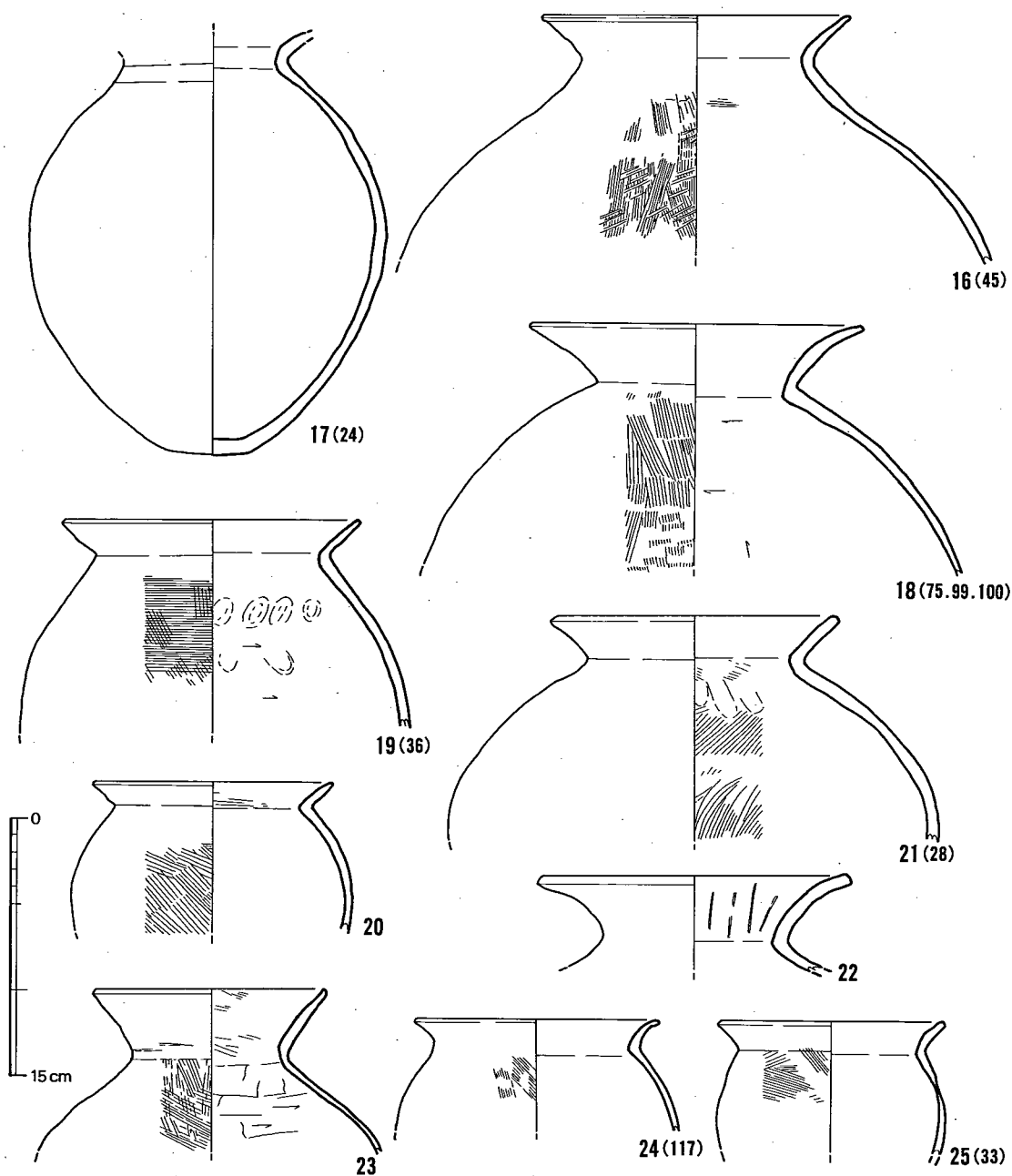


第 11 図 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (壺) ① (1/4)

でそれをハケで消して、一部にミガキがかかっている。復原口縁が19cmで口縁部破片と胴部破片が合体したものである。底部は丸底で原体でスリ上げている。⑧は口縁部破片、⑦とは同一個体のものか、若干疑問で、口唇端部と径と口縁部の長さが相違する。復原口径22.6cmである。⑨は直口壺で、丸底を呈しているもので、胎土に砂粒を含み、角閃石と雲母を少量含むもので、色調は黄褐色で底部付近は黒斑あり、器面の調整は胴部内面ナデで、口はハケメである、外面

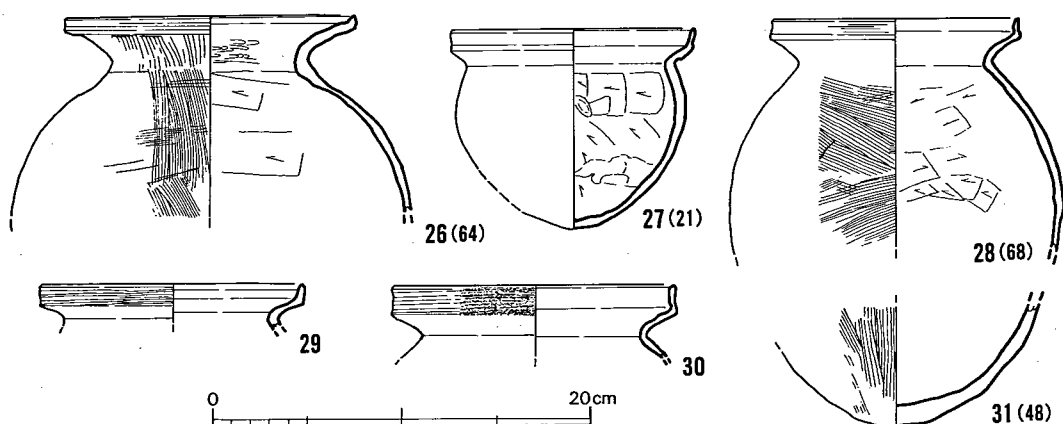


第 12 图 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (壺) ② (1/4)



第 13 図 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (甕) ① (1/4)

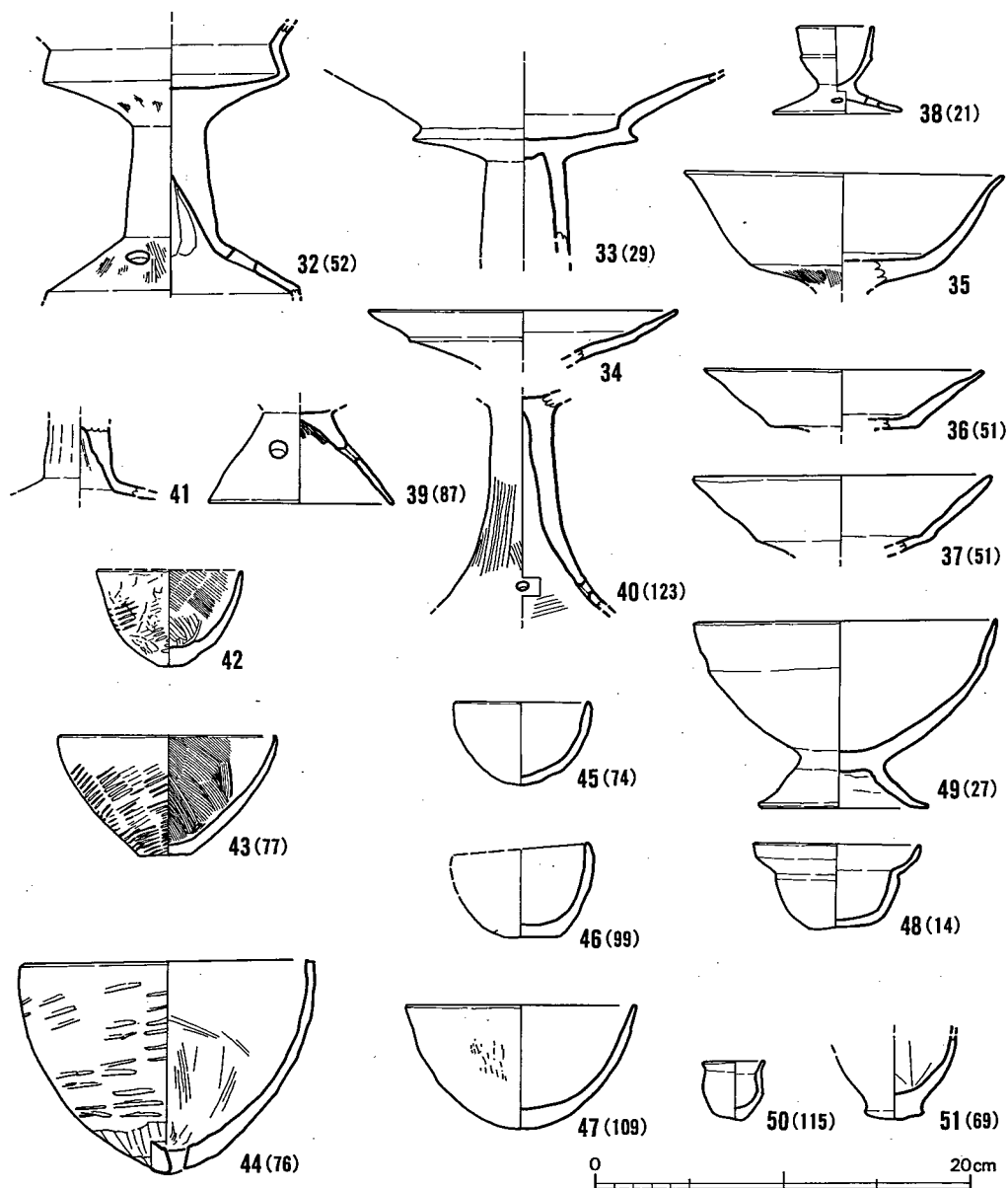
はヘラにてミガキ，部分的にハケメが残っている。口径6.4cmで器高が13.0cm，胴部最大径が14.2cmである。⑩は短頸壺，⑪は直口小型壺である。⑫・⑬は小型丸底の口縁部破片，⑭・⑮は手捏土器で，⑭には原体が残り底部は平底である。⑮は直立した複合口縁で頸部が短かく，



第 14 図 I 区溝 2 下層出土遺物実測図 (甕) ② (1/4)

すぐに球体胴部となって、丸底である。器面の調整はハケメで底はナデて、ハケメを消している。

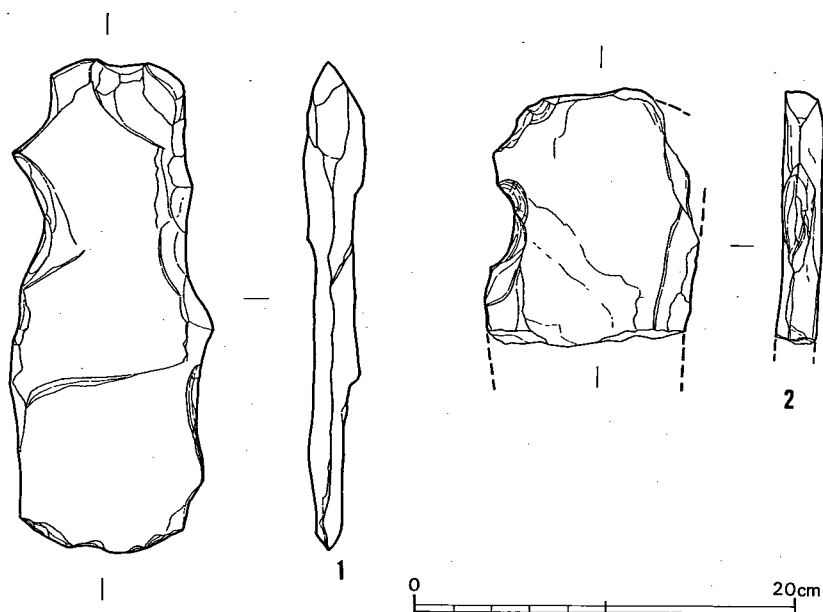
甕 (①⑥～③①) ①⑥・①⑧・②③は「く」の字状の口縁部破片で、器形的には①⑦の様な形をとる。①⑥・①⑧・②①は大型のもので、①⑦・①⑨・②②・②③は中型のものである。口縁部は外反し、肥厚な口縁である。①⑥は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面調整は内面ナデとハケメで、外面は頸部下半はタタキ後ハケにてスリ消している。カタには黒斑がある。復原口径18cmで、口は狭まい。①⑦は長胴のもので丸底に近い平底のもので、胎土に角閃石含み、色調は黄褐色で、最大胴径は20.9cmである。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部は肥厚になる。①⑧・②③の器面の調整は、内面はヘラケズリで、口縁部はハケメ、外面はハケメと口縁部はナデている。復原口径は前者が19.4cm、後者が13.8cmである。①⑨は口縁部は肥厚で器面調整は内面はヘラケズリ、外面はタタキの後でハケを施している。②②は口縁部は短くなるもので、器面の内外の調整はハケメとナデである。口縁部はハケメをナデ消している一部にハケメが残る。②①は復原径は16.8cmで、胎土に細粒砂を含み色調は黄褐色で、器面の調整は内面がハケメで外面はナデである。②②は口縁部破片で、「く」の字状に外反し、内面には工具痕が残っている。復原口径17.6cmである。②④・②⑤・②⑥は口縁部破片で、②④・②⑤は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はハケメとナデ仕上げ、復原口径は前者が14.1cm、後者が13.3cmである。②⑥は口縁端部をつまみ上げているもので、胎土に細砂粒・赤褐色粒を多く含み、角閃石も見ゆ、色調は淡い黄褐色で、焼成は良好である。器面の調整は内面はヘラケズリで、口縁部付近にはヘラでミガキが見える。外面はタタキを後でハケで消しているため一部にタタキが残っている口縁部までハケメが施されている。口径15.7cmで、器壁は薄い。②⑦～③①までは、口縁部が直立するいわゆる瀬戸内系のものである。③①は底部破片で丸底気味のものである。②⑦～③①は「く」の字状に外反するものを口縁端を立ち上らせたもので、このたち上がった端面に凹線的な技法の細線をもつもの(②⑧・②⑨・③①)もある。内面の調整はヘラケズリで、外面にはハケメを施こしている。②⑦



第 15 図 1 区溝 2 下層出土遺物実測図 (高杯・鉢・その他) (1/4)

は小型のもので、丸底をなしている。口径は12.85cmで胎土に角閃石を含んで焼成は良好である。

高杯 (32~41) 32~33は接合部破片, 34~37は杯部破片, 39~41は脚部の破片である。32は柱状部と杯部の一部が残し、裾部には穿孔3個で、一段直立して裾となるものでこれも外来系である。33も柱状部上面の破片で杯部が一段稜をもって柱状部にいたるわけで、エンタシスの柱状になる38は小型の完形で、裾部が大きく広がっている。36・37は定型化される小型の高杯



第 16 図 I 区溝 2 出土遺物実測図（石器）（1/2）

の杯部である。③⑨の脚部は特徴あるもので③⑧に類するもので杯部はブランデーグラス型のもの。④⑩は大型の高杯の脚部。

鉢（④②～④⑨）④②～④④は同系のもので、器面の調整も類似する。④④は甑に使用されたもの。④⑤・④⑥・④⑦も同系のもの。④⑨は台付のもの。④⑧は口縁端部はたち上がったものである。

手捏（⑤⑩・⑤⑪）⑤⑩は完形品のミニチュア土器である。⑤⑪は底部破片で内面に工具痕が残っている。壺・鉢になるか不明であるが、ここでは鉢に入れた。

石器（第16図、図版33）

溝 2 の底に近いところから出土した打製石斧である。

石斧（①・②）①は短冊型の完形のもので石材は緑泥片岩を使用し、側縁を整えて、刃部を使用したもので、基部の上部にノッチ状のものを入れている。重量は145.4gで、溝底に近い部分から出土した。②は基部の破片で、ノッチ状のものが残っている。溝 2 の覆土から出土したものである。石材は緑泥片岩製。

土器についての若干のまとめ

溝 2 出土の土器は、各器種にわたって外来系の土器が出土している。壺では、畿内系のものと山陰系のものと混入している。甕では、瀬戸内系の酒津式の新しいところと、畿内系の庄内式の中頃から新しいものが出土している。いわゆる豊前系のものは大型壺に多く、豊後系のものも見える。在地系のものをつまみあげて、セット論を展開したいが、今後としたい。武末氏の編年観でも若干疑問点が生まれるが、I 区の溝 2 は上層のものと下層のものとは、差がないものである。

(2) 土 壙 (第17~30図, 図版4・6~9)

近世の土壙を含めて12個を数える。南端に集中している。この南端には近代の土壙が中心に検出されている。

以下、順を追って説明を加える。

1号土壙 (第17図, 図版4)

溝2の下にあるもので、完全に溝に切られていたもので、長さ195cm、幅85cm、深さ36cmで、中から、壺の口縁部と甕の口縁部が出土している。

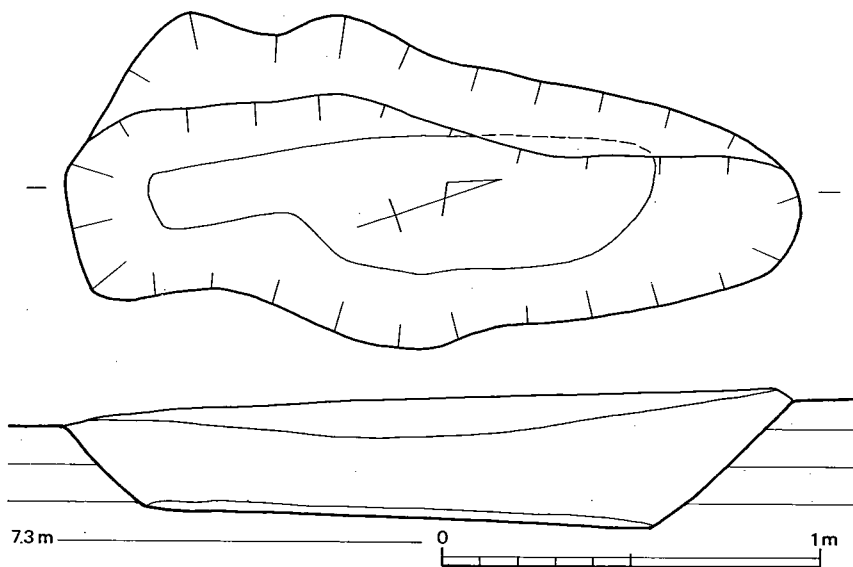
時期的には溝より一段階古くなるものと思われる。

出土遺物 (第18図, 図版24)

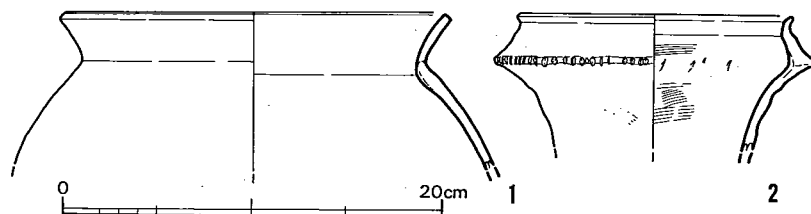
①・②は口縁部破片である。①は甕の口縁部破片で、「く」の字状の口縁のもので、胎土に細粒砂を含み、色調は、黄褐色で、器面調整は器壁の磨滅がひどいため不明である。

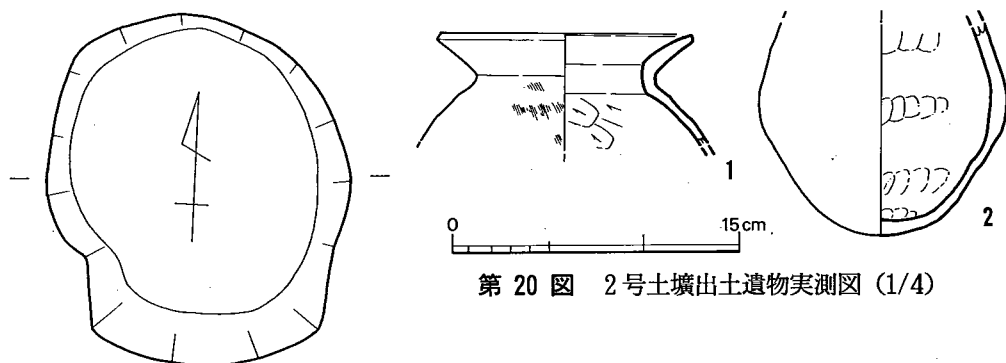
②は壺の複合口縁部で、口唇部が外反している特徴を有し、頸部と口縁部の接合点には刻目をもっている。色調は黄褐色で、胎土に細粒砂を含み、角閃石、雲母片の混入がみられ、焼成は良好である。器面の調整は内面はハケメで、外面はナデ仕上げで、一部にハケメが残っている。

第 17 図
1号土壙実測
図 (1/20)

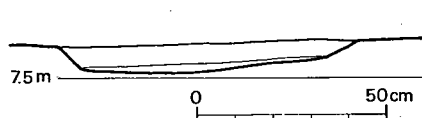


第 18 図
1号土壙出土
遺物実測図
(1/20)





第 20 図 2号土壌出土遺物実測図 (1/4)



第 19 図
2号土壌実測図 (1/20)

2号土壌 (第19図, 図版8)

平面形は不整形円形を呈し、長軸93cm、短軸80cmで、深さ6cmで、覆土から甕の口縁部破片と胴部下半の部分が出土している。時間的には溝2と同時期であろう。

出土遺物 (第20図, 図版23)

③は甕の口縁部破片で、くの字状に外反しているもので、器面調整は、内面の頸部下半をヘラ削りで、表面は頸部下半をハケを使用し、仕上げにナデている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。④は甕の胴部下半のもので、底部は丸底に近い凸状のものである。胎土に砂粒雲母を多く含み、色調は内面は黄褐色で、外面は2次的な火を受けて赤味を帯び、ススの付着がみられる。赤褐色に黒味がある。焼成は良好。

3号土壌 (第21図, 図版8)

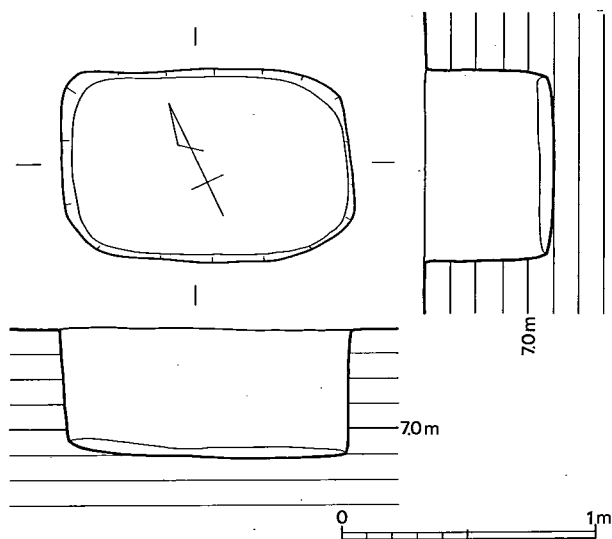
平面形は、不整長方形を呈するもので、埋土中より、牛の歯が出土している。近代の病死した牛を埋めた土壌である。長軸110cm、幅75cmで深さ55cmである。

4号土壌 (第22図)

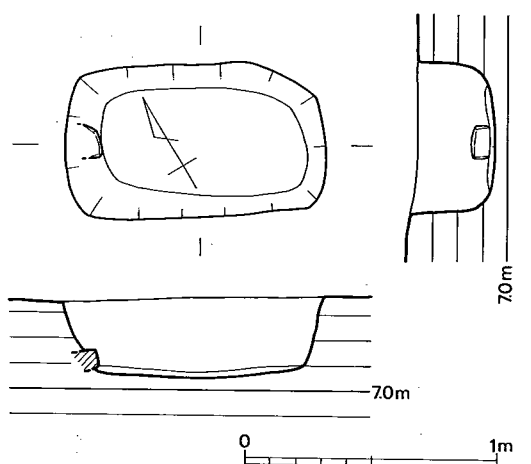
溝2の西側に接近しているもので、平面形が不整長方形を呈し、長軸105cm、幅60cm、深さ33cmで、埋土から口縁部破片と底部破片が出土している。

出土遺物 (第23図)

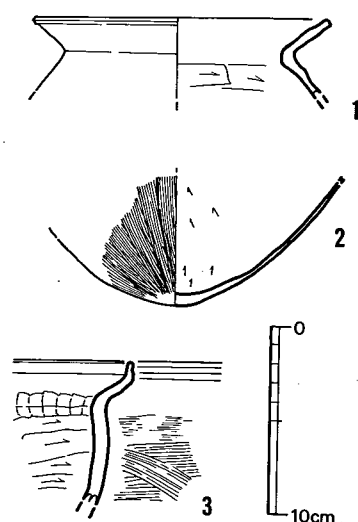
⑤・⑦は甕の口縁部破片で、⑥は底部破片である。



第 21 図 3号土壌実測図 (1/30)



第 22 図 4号土坑実測図 (1/30)



第 23 図 4号土坑出土遺物実測図 (1/4)

⑤は甕の口縁部破片で、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇端部より、肥厚化した口縁である。器面の調整は、内面の頸部以下はヘラ削りで、他はヨコナデである。胎土に細粒砂を多く含金雲母もみられる。色調は黄褐色を呈している。

⑥は甕の底部破片で、丸底を呈するもので、器面の調整は、外面縦位方向のハケメで、内面ヘラケズリである。胎土に角閃石を含み、金雲母片がみられる。色調は赤褐色で、ススの付着がみられ黒味を帯びている。器壁は非常に薄い。焼成は良好である。

⑦は甕の口縁部破片で、複合口縁部である。胎土に細粒砂を含み、雲母片がみられ、色調は褐色を呈し、焼成は軟質である。器面の調整は内面はヘラ削りで、外面は頸部下半は横位のハケメで仕上げはナデ仕上げである。

土坑の時期は溝2と同時期である。遺物は古式土師器である。

5号土坑 (第24図, 図版8)

平面形は不整形円形を呈し、長軸65cm、短軸53cmで、深さ3cmである。

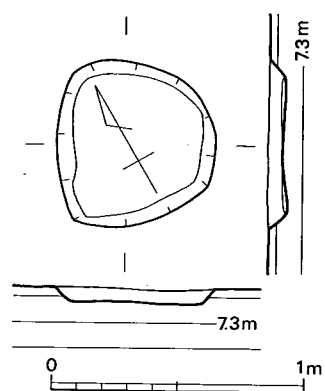
埋土から牛の歯の一部が出土している。近代の土坑である。

6号土坑 (第25図)

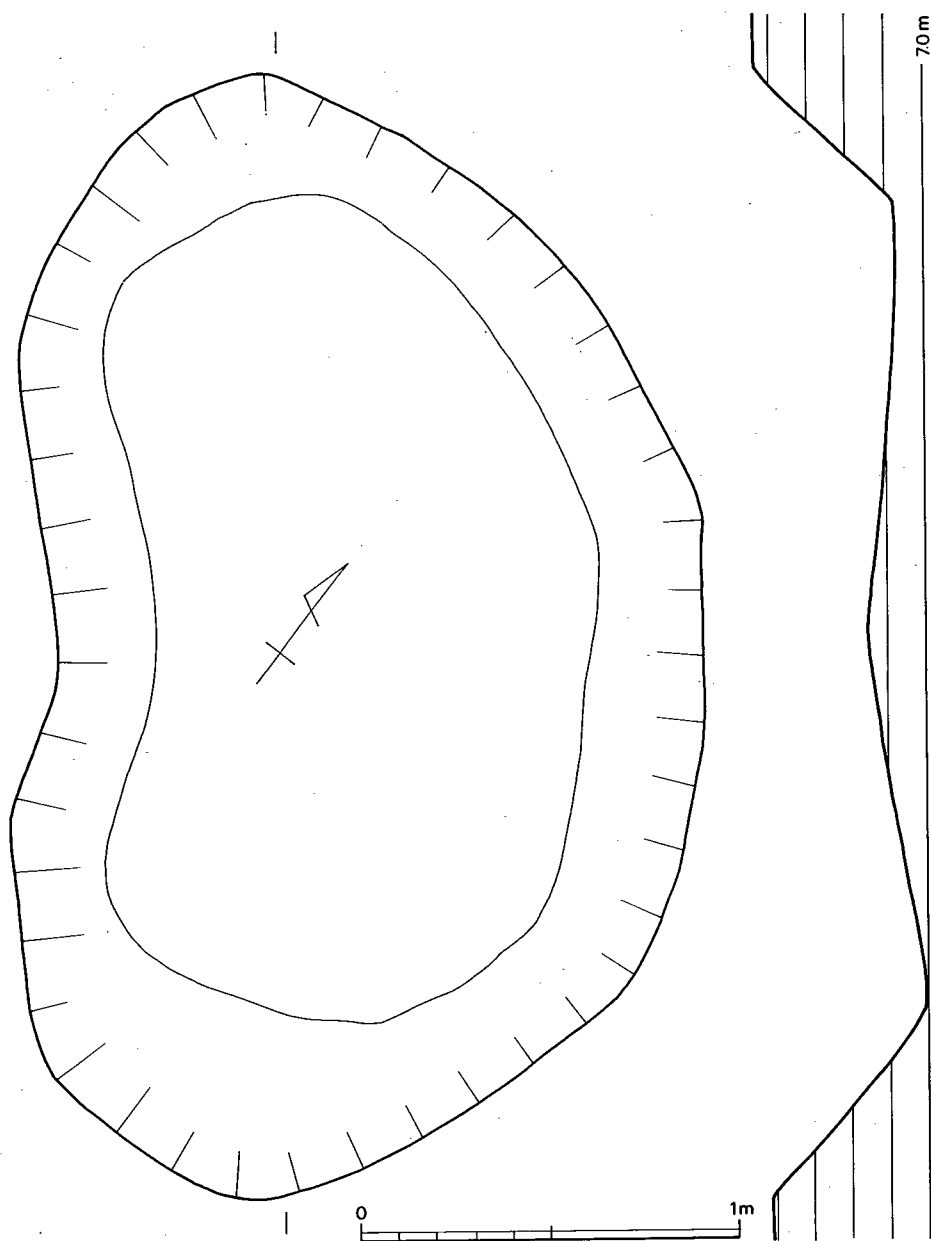
現代の土坑で、死牛を埋めたもの、平面形は不整形楕円形で、長軸が300cm、短軸170cmで、深さ40cmである。戦後すぐに埋めたものと思われ、完全な骨格が残っていた。

7号土坑 (第26図)

溝2の下にあったもので、溝の側縁が不整形に落ち込んでいる。覆土は溝と同じで、一段下げた段階に落ち込みが判明したもので、溝2が埋まって、近い時期のものである。長軸115cm、短



第24図 5号土坑実測図(1/30)

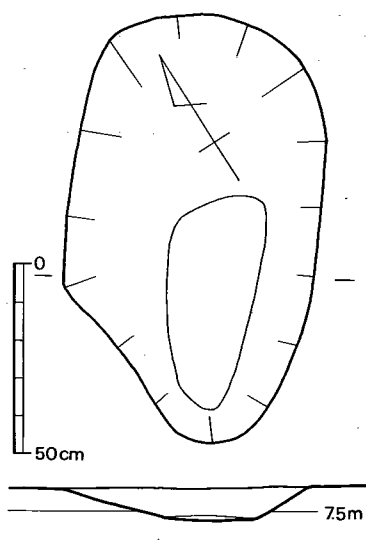


第 25 図 6号土壌実測図 (1/20)

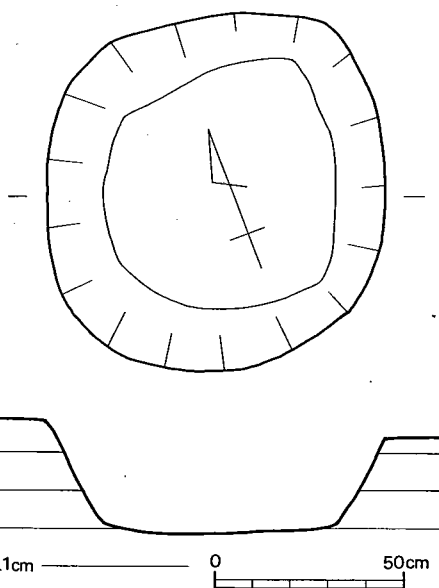
軸が66cm, 深さが10cm前後である。溝底よりも若干深い。出土遺物はみられない。

8号土壌

溝2の中央部より東側にある近世の土壌で、平面形は、不整長方形で、長さ115cm, 幅80cm, 深さ33cmで、断面はスリ鉢状に落ちている。底辺より近世陶器の伊万里の染付の小破片が出土している。時期的には、江戸時代中頃過ぎの18世紀後半を充てたい。



(左)第 26 図
7号土壌
(1/20)



(右)第 27 図
9号土壌
(1/20)

9号土壌 (第27図)

8号土壌の南東側にあつて、平面形は円形を呈している。直径が110cmで、深さ30cmである。出土遺物はみられない。覆土の色調からは8号土壌に近いものと考えられる。

10号土壌 (第28図)

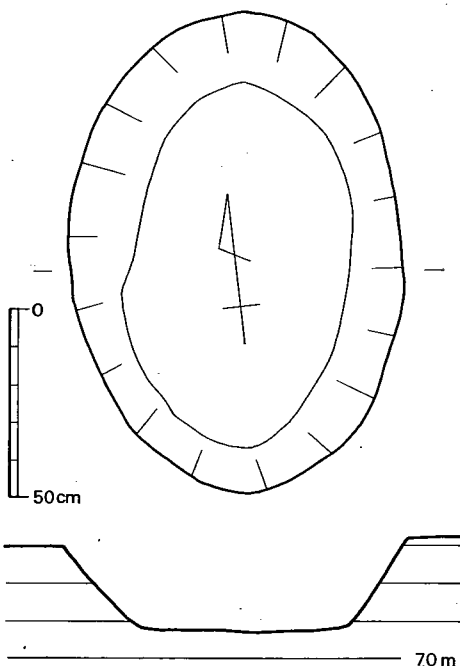
発掘区の東側にあつて、平面形は不整形円形を呈するもので、長軸128cm、短軸87cmで、深さ20cmである。出土遺物はみられず、埋土の色調からは8号土壌に近いものである。

11号土壌 (第29図)

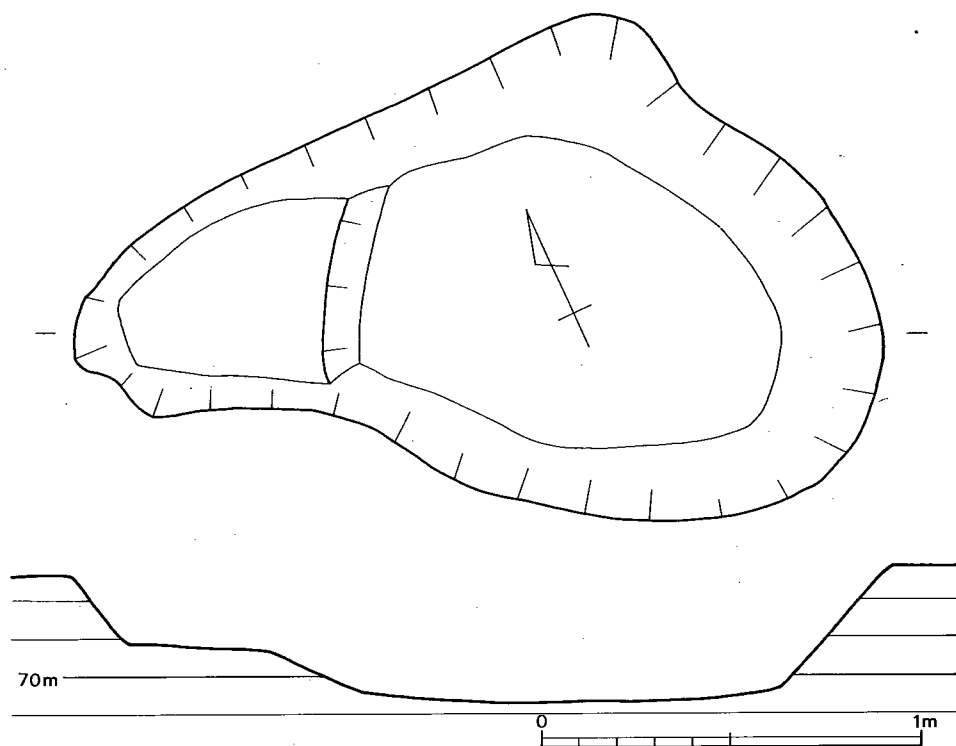
溝2の下流域の東側にあるもので、平面形は不整形のもので、内部が2段になっているものである。長軸が200cm、最大幅が100cmで、深さ34cmである。時期的には溝2の時期を充てたい。

12号土壌 (第30図)

溝1の南側にあるもので、平面形が不整形円形をなすもので、長軸が90cm、短軸が40cmで、深さ22cmで、出土遺物はみられない。時期不明のものである。



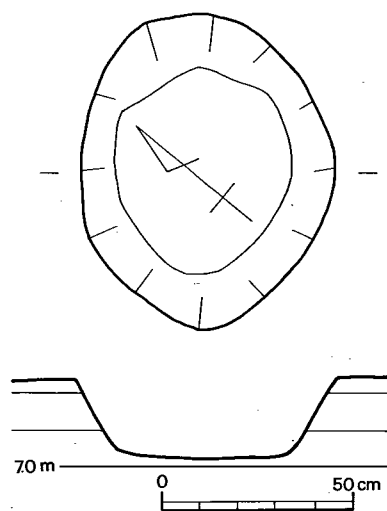
第 28 図 10号土壌実測図 (1/20)



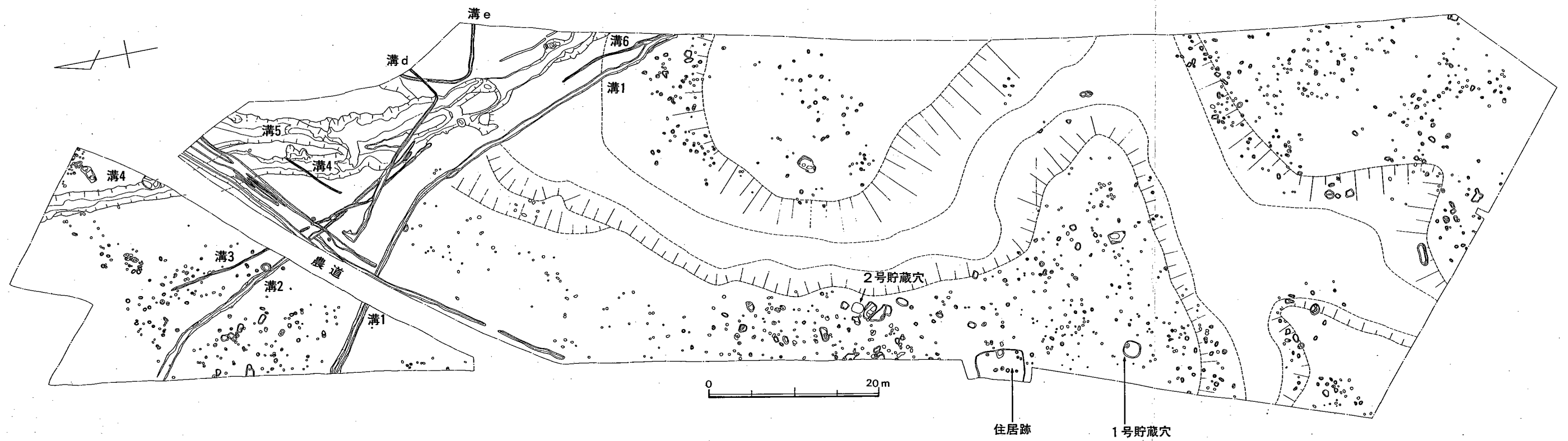
第 29 図 11 号土壌実測図 (1/20)

(3) 柱穴群 (付図)

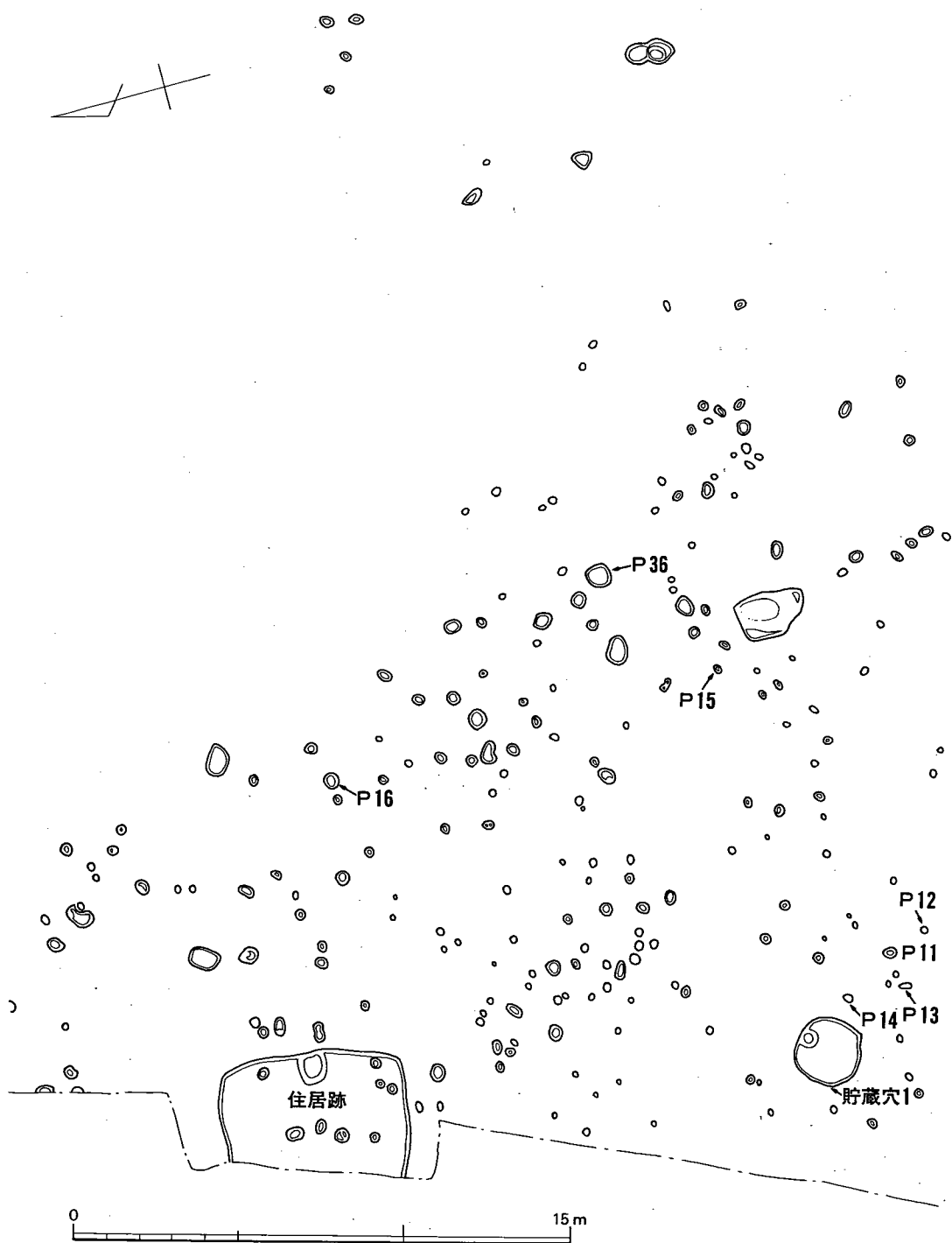
溝 2 の周辺部に若干の柱穴を見出したが、遺構としてとまらず、埋土中から遺物出土していない。



第 30 図 12 号土壌実測図 (1/20)



第 31 图 II区遺構配置図① (1/500)



第 32 図 住居跡付近実測図② (1/200)

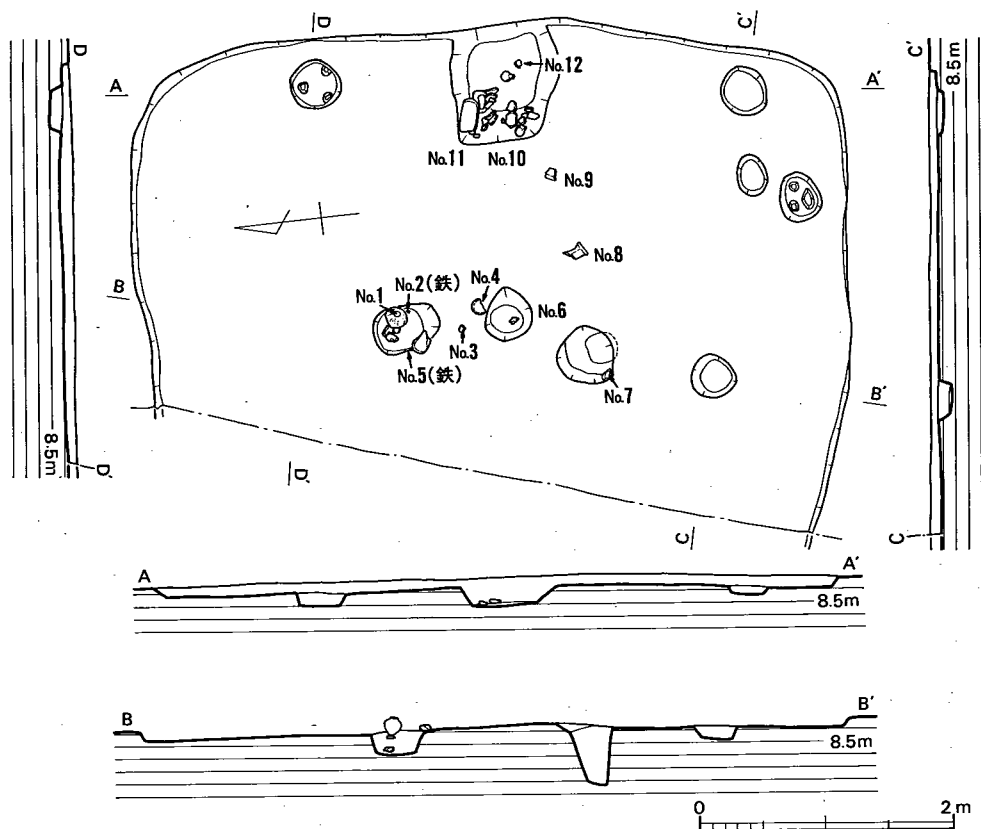
3. 津留Ⅱ区の生活遺構と遺物 (第31～81図, 図版10～13)

Ⅱ区はⅠ区の南側で水路をはさんだ地区で、字安蔵をいう。第2図を参照のこと。この地区から出土した遺構は竪穴住居跡1軒・貯蔵穴2・Pit多数・溝(弥生末～古墳時代初頭)6・溝(歴史時代)6・柱穴群多数を検出した。(第31図参照)

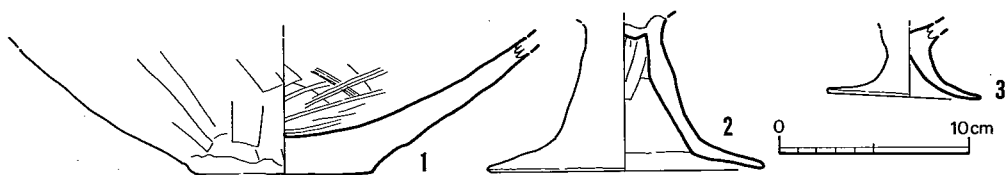
以下遺構ごとに説明を行なう。

竪穴住居跡 (第33図, 図版14・15)

ほぼ中央部西側端部にあつて標高は9.5m前後を計測する。遺構の中では一番高位置のもので津留遺跡の中の、道路予定地では辛うじて住居跡を捕えられた。平面形は長方形を呈し、規模は東側辺5.5m、南側辺3.6m+ α 、北側辺2.7m+ α で、全体の1/3ほどが調査区外に出ている。壁の高さは10cm前後で、東側辺の中央部に住居内貯蔵穴を持っているもので、これを中心として柱穴を捕えることができる。6本柱と思われるが、その内4本が理解でき、他の1本は区外と推定する。北側の1本については新しい土側溝が掘られているために破壊されていた。



第 33 図 住居跡実測図 (1/60)



第 34 図 住居跡覆土出土遺物実測図 (1/4)

大形の高杯の脚・壺・甕の破片等が床面や柱穴及び貯蔵穴から遺物が出土している。柱穴中より鉄製品も検出されている。時期的には古墳時代の初頭である。

出土遺物 (第34図, 図版26)

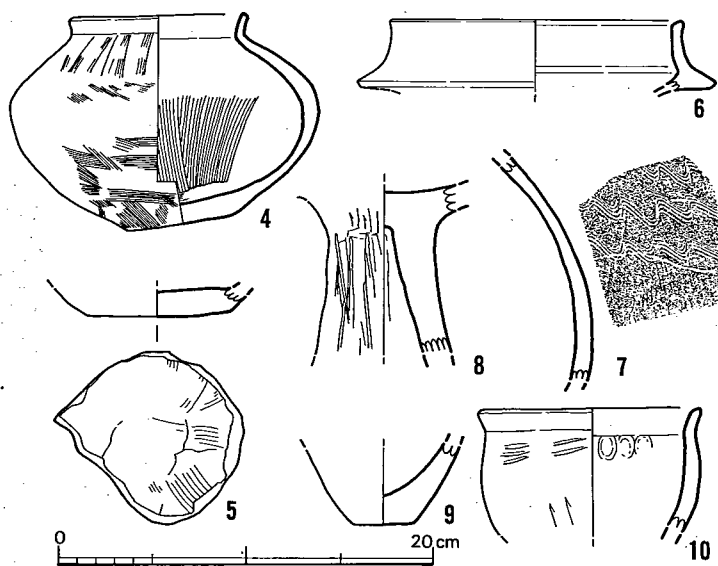
覆土出土のものには壺・高杯破片がある。

壺 (①) 大型の壺の底部破片である。底径9.4cm, 胎土に砂粒を多く含み, 角閃石を多く含み, 色調は茶褐色で, 黒変している部分も多い。器面の調整は原体にて擦痕を内外面に施している。焼成良好。

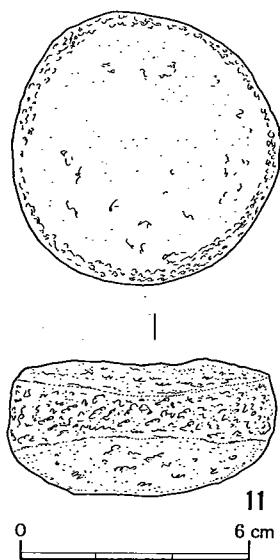
高杯 (②・③) 両者とも脚部の破片で, ②は中型の定型化したもので, 胎土に細粒砂を含み, 色調は赤褐色を呈し, 裾部は段をなして広がるもの。③は小型の脚部破片で, 胎土に細粒砂を含み, 色調は灰白色で焼成は軟質である。

床面からの出土遺物 (第35～37図, 図版26)

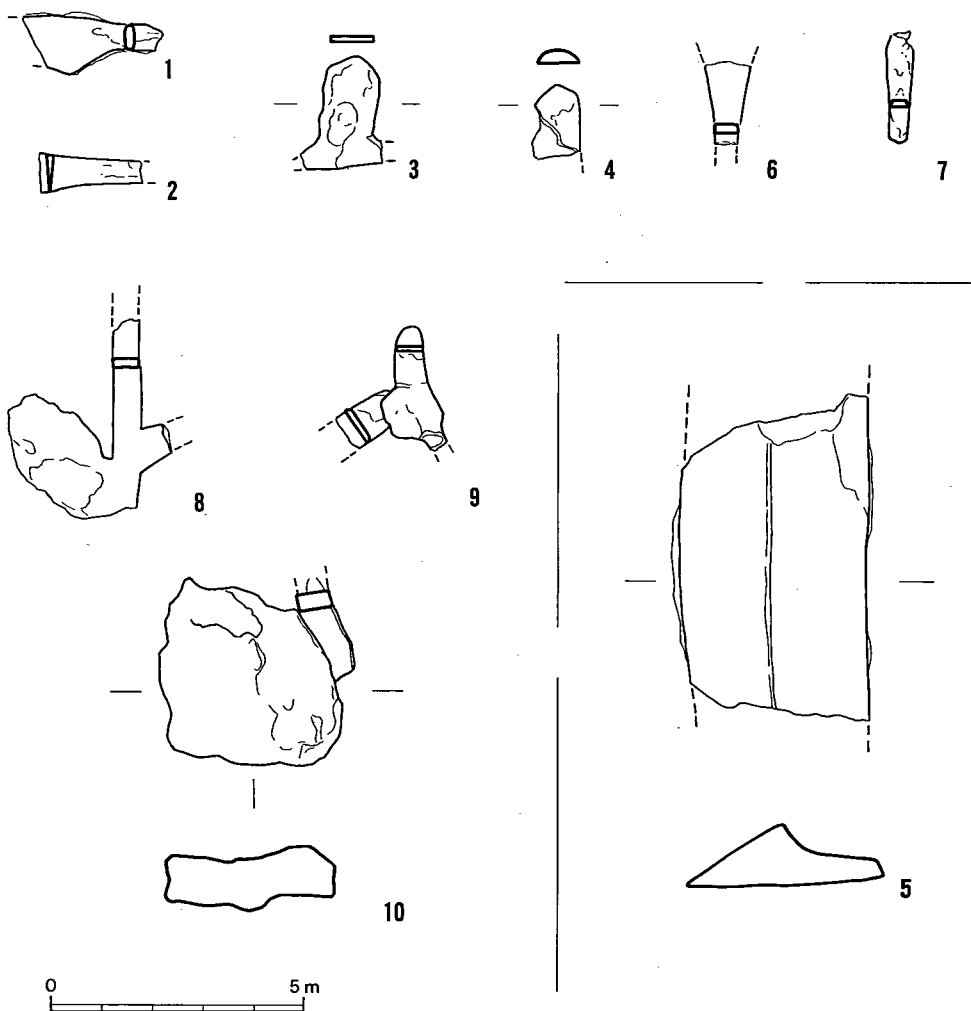
床面直上と室内貯蔵穴から出土したものは, 短頸壺・壺・甕・高杯・鉢・鉄製品・石器等が検出されている。



第 35 図 1号住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第36図 住居跡P-4出土遺物実測図(石器)(1/2)



第 37 図 鉄製品実測図 (2/3)

壺 (④・⑤・⑥・⑦) ④は完形品の短頸壺で、胎土に角閃石や砂粒を多く含み、色調は茶褐色で、外面は黒味を帯びている。器面の調整は内面の底部付近はハケメで、他はナデ仕上っている。外面は胴部下半はハケメで、上部は工具によるナデである。口径9.1cm、底径5.5cm、最大胴径16.3cm。⑤は平底で径は7.6cmである。ハケメを後にナデ仕上げである。胎土に細粒砂をやや多く含む。色調は黄褐色で、底部とところどころ黒化する。⑥は複合口縁の破片で、口縁部は直口するものである。器面の調整はヨコナデ。口径15.5cm⑦は肩部の破片で、櫛描の波状文を描き出している。

高杯 (⑧) 柱状部破片で、大型のものである。胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、器

面の調整は脚部内面はナデしぼり上げている。

外面はヘラミガキである。

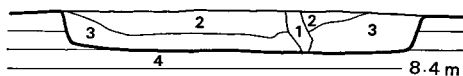
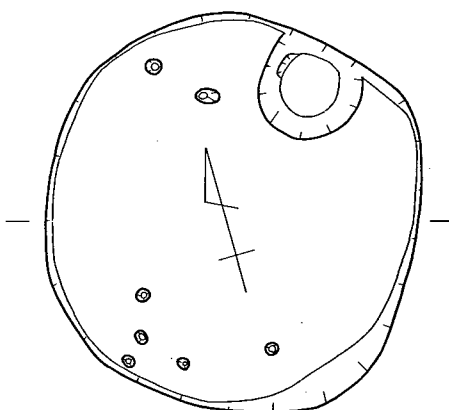
甕(⑨) 底部破片で、器面の調整は内外面ヘラケズリ、底径は3.3cmで平底

鉢(⑩) 室内貯蔵穴から出土したもので、胎土に砂粒を多く含み、角閃石・雲母を少し含む、色調は茶褐色で黒味をおびている。器面の調整は内面ヘラケズリの上をナデている。指痕が残っている。外面はタタキの後にナデている。下半はタタキ原体でナデ上げて、捺痕となっている。

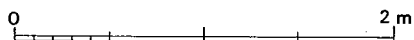
石器 (第36図)

作業台となるものと磨石とが出土しているが作業台になる部分は剥離して壊れてしまったので、磨石のみを記する。

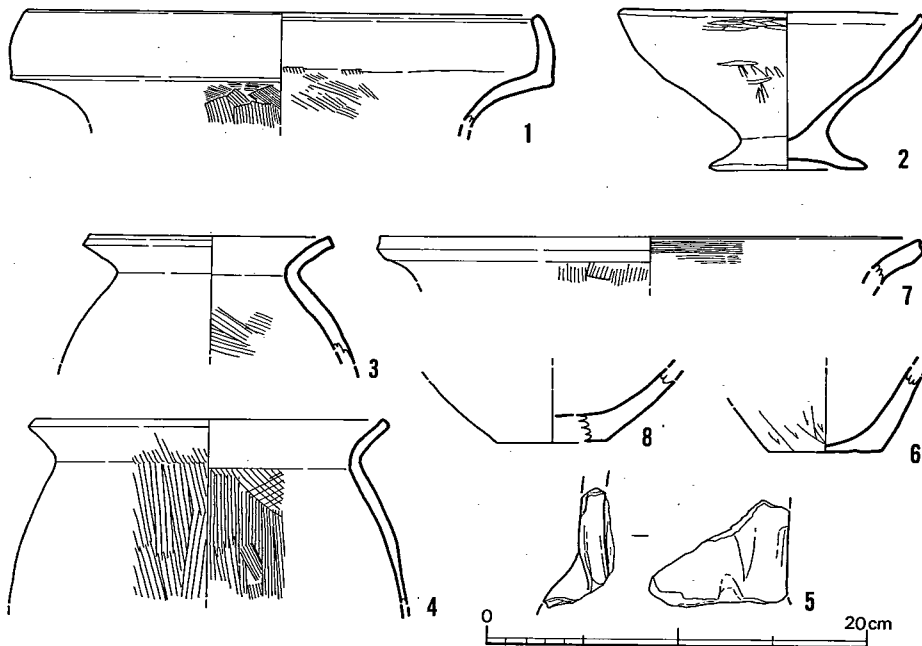
磨石(第36図) 住居跡の柱穴4より出土したもので、安山岩製のもので、形は円形で厚さは3cmである。側縁部を使用している。



1. 暗黄褐色砂質粘性土(中世以降の遺構埋土に似る)
2. 黒色砂質粘性土
3. 黒色粘性土(淡黒色に近い)
4. 黄褐色砂質粘土(部分的に礫を含む)



第38図 1号貯蔵穴実測図(1/40)



第39図 pit内出土遺物実測図(1/4)

鉄製品 (第37図、図版16)

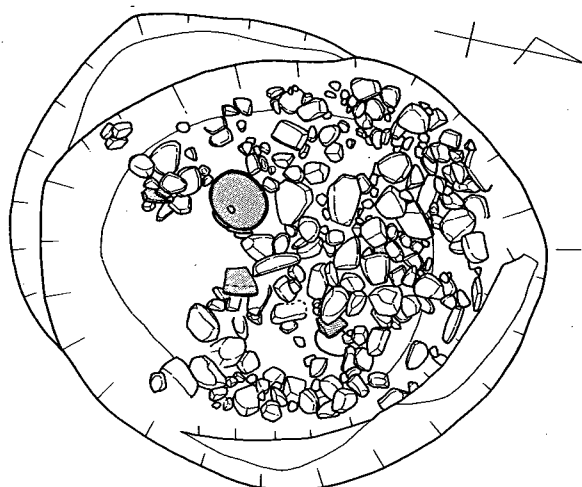
未成品のものが大半である。鉄鏝となるものである。出土地点は、柱穴の中から出土したものが大半で、一部は床面からも出ている。

鉄製品 (第37図、図版26)

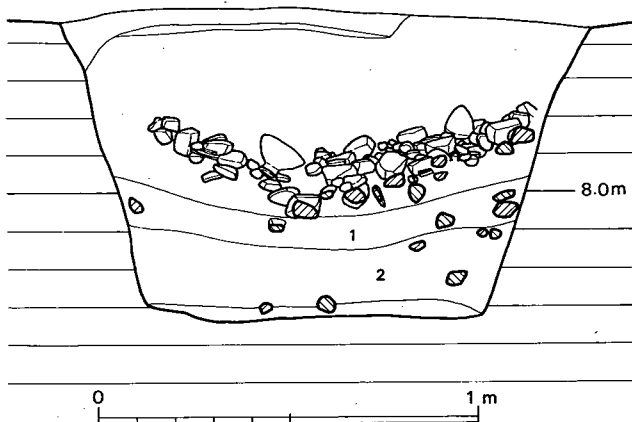
住居跡の覆土及び床面より出土したもので、スラグ (鉄滓) や鉄鏝片・刀子・紐状の結節のものである。鉄鏝の柄の部分等がみられる。鉄の大半は、スラグが大半で製品になっているものが少ない。未加工品が多く見られる。

鉄鋤先 (⑤) I 区から出土したもので、U 字形の鋤先の一部である。木質を入れる袂りを有するもので、ソケット式のものである。古墳時代の後期の所産と思われる。

以上遺物等から、住居跡は弥生終末から古墳時代の初頭に位置するもので、溝と同時期である。庄内併行期とした方が妥当である。



1. 黒色土・黄褐色粘性土が、ベルト状にかむ。
2. 黒色土、暗灰色砂質土に礫がまじる。



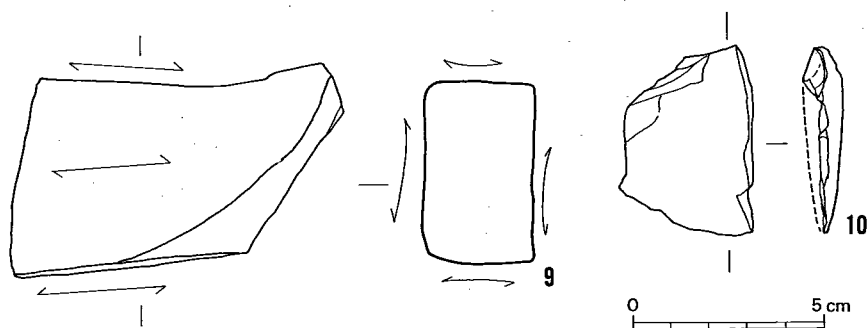
第 40 図 2 号貯蔵穴実測図 (1/20)

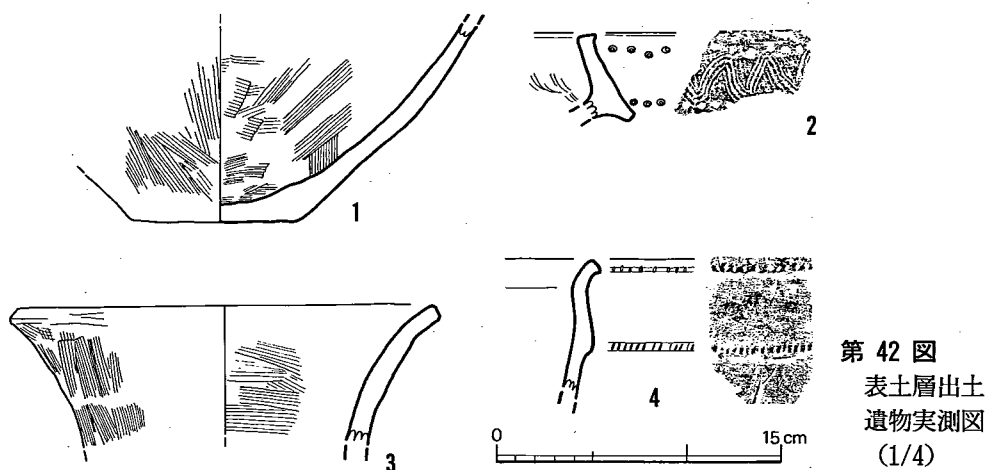
貯蔵穴及びピット

(第31・32図、図版12・14)

第32図の様に住居跡の周辺部で出土したものである。遺構の性格付けが貯蔵穴のものと、風倒木のピット等もみられる。風倒

第 41 図
pit 内出土
遺物実測図
(石) (1/2)





木のピットや不明ピットについては詳細な説明をはぶく。

1号貯蔵穴（第38図）

住居跡の南側にあって、平面形は不整円形を呈する。規模は長軸205cm、短軸198cmで深さ21cmで底面形も不整円形である。遺物の出土は見られなかった。

2号貯蔵穴（第40図、図版17）

住居跡の北東にあって、平面形は円形を呈し、規模は直径120cmで深さ82cmで、底面形も円形である。遺物は上層で台付鉢の完形が出土し、他に甕口縁部が見られた。

時期的には遺物から古墳時代初頭頃に埋ったものである。

出土遺物（第31図、図版26）

貯蔵穴の中から完形の台付鉢、壺の口縁部破片が出土している。

壺（①）複合口縁部破片である。胎土に角閃石を含み、砂粒を多く含む、色調は灰黄色で、器面調整はハケを使用されている。

鉢（②）台付鉢で完形のもの、胎土に砂粒を含み、角閃石や砂礫を含む、色調は褐色で一部に丹が残っている。器面の調整は内面はナデで器半は指痕で、継ぎ上げている。外面にはタキが残り、その上からヘラミガキをかけている。

pit（第32図、図版14）

住居跡の周辺部に柱穴群があるもので、建物が建つ様なものではない。その柱穴 pit の中から出土した遺物で実測できるものについて、以下に説明を付加する。

出土遺物（第39図③～⑧）

甕（③・④）pit 2 から出土したもので、口縁部破片、胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で黒味を帯びている。器面の調整は内面はハケメとナデで、外面はススの付着がみられ、二次加熱が見られる。復原口径13.4cm。④も口縁部破片で胎土は前者と同じで、色調は黄褐色。器

面の調整はハケ使用している。復原口径19.3cm。

器台 (⑤) 口縁部から U 字型に窓があく豊前系の器台の小破片で、pit 7 の中より出土したものである。

甕 (⑥) pit20から出土した底部破片、底径6.0cm、器面の内外面の調整は工具によるナデ

甕 (⑦) pit34から出土した口縁部破片で、復原口径28.5cm。

甕 (⑧) pit36から出土した底部破片である。

石器 (第41図、図版34)

pit 6 と pit39から出土したものである。

砥石 (⑨) 石質は硬質砂岩で小口の部分は砥いでないが他は全面使用されているもの。よく使用されている。重量220g。pit 6 で出土。

石庖丁 (⑩) 石質は輝緑凝灰岩で、石庖丁の背と刃部の一部の破片でよく磨かれている。重量16.3g。pit39出土

表土層 (第42図)

ここでは耕作土の下層を表土層とし黒色土上面として捕えた。

壺 (①②) ①は底部破片で底径8.8cm、大形の壺である。器面調整はハケを使用している。

②は複合口縁の口縁部破片で、竹管文上・下に施している。その間に波状文がある。胎土に細粒砂を含み、角閃石・金雲母がはいる。色調は黄褐色を呈し、口唇端部が押えられている。

器台 (③) 豊前系の上部破片で、U 字形にカットされた窓があるので破片。胎土に細粒砂を多く含み角閃石を含み、色調は黄褐色で、ススが付着している。復原口径22.2cm。

甕 (④) 板付Ⅱ式のもので甕の口縁部である。二段の刻目を有している。胎土に砂粒・石英を含み、色調は黄褐色である。流れ込みとみられる。この時期のものなし。

溝状遺構 (第43図、図版18～20)

Ⅱ区の主要な遺構は溝である。溝1～6までが、弥生終末から古墳初頭期のものである。また溝 a～5 は歴史時代のもので新しいものである。溝の性格付けは排水のものと考えられる。

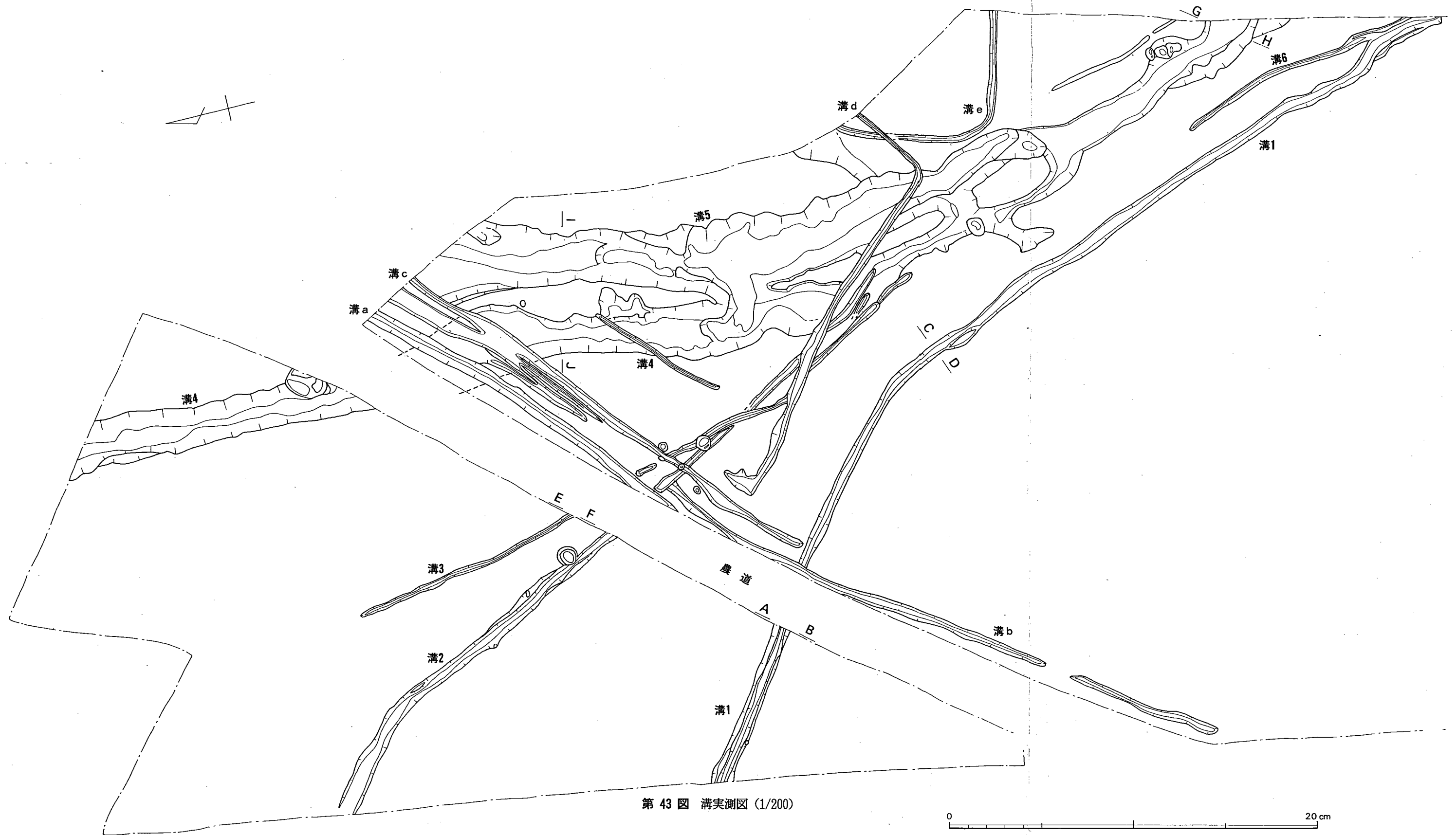
溝 1 (第43図、図版19)

この時期の溝では高位置にあるもので、流さ57.5m、幅50～100cm、深さ50cm前後を計測し、断面は U 字形をなすもので、北側に行くほど高位になり巾広になってくる。溝底より若干の遺物が見られる。

出土遺物 (第45図、図版29)

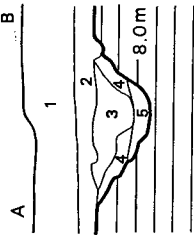
溝内から出土したものは小型の壺・甕・高杯・鉢の順で説明する。

壺 (①～⑤) ①は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色、器面の調整はハケを使用する。復原口径39.4cmで大型のもの。②は「く」の字状の口縁をもち、器面の調整はヨコナデである。復原口径15cm。③は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄橙褐色を呈し、

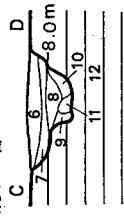


第 43 図 溝実測図 (1/200)

溝1土層



溝1土層



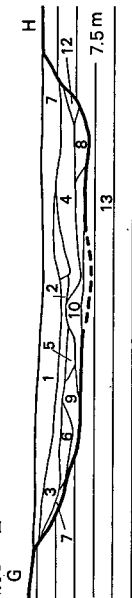
溝1土層

1. 暗黄褐色土
2. 茶褐色味のある暗黄褐色土
3. 黒色砂質粘性土 (砂粒多い)
4. 黒色砂質粘性土 (砂粒少ない)
5. 淡黄褐色粘質砂土 (粗砂)
6. やや濃い黒褐色粘性土
7. やや薄い黒褐色砂質粘性土
8. 暗灰色砂質粘性土 (2よりも砂質が強い)
9. 乳白色混り黒褐色粘性土
10. 乳白色混り黒褐色粘性土 (やや砂質)
11. 黒褐色土混り乳白色、黄白色粘土ブロック
12. 上部は乳白色粘土、下位は黄白色砂質粘土

溝3土層

1. 暗めの暗黄褐色土 (表土)
2. 暗黄褐色土
3. 暗黄褐色土 (茶褐色味がある)
4. 黒色砂質粘性土
5. 黄色土塊まじり黒色砂質粘性土
6. 黄褐色砂質粘性土

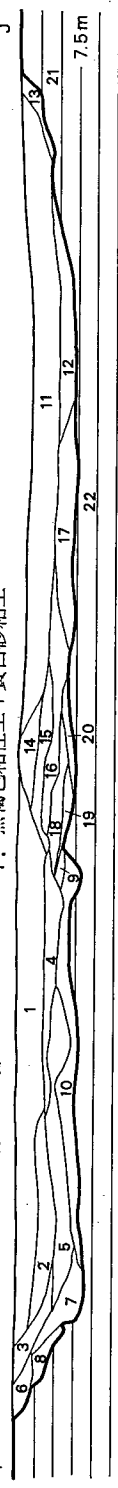
溝5土層



溝5土層

1. 黒褐色粘性土
2. 灰茶褐色砂質粘性土
3. 黒褐色砂質粘性土
4. 黒褐色砂質粘性土 (3よりもやや色調暗い)
5. 暗灰色砂
6. 暗灰色～黒色粘質砂
7. 黒褐色粘性土 + 黄白砂粘土
8. 黄白色粘土を若干含む暗灰色粘質砂
9. 暗灰色粘質砂
10. 暗灰色砂 (5よりも色調淡く礫がやや混ざる)
11. 灰色砂礫
12. 黄白色粘土
13. 昔灰色砂礫

溝4・5土層



1. 黒褐色粘性土
2. 黒色～暗灰色粘質砂
3. 黒色粘質砂
4. 暗灰色 (暗め) 砂 (やや粘性あり)
5. 4よりも暗く粘性のある粘質砂層
6. 暗灰色土、黒褐色土に乳白色粘土が混じる
7. 乳白色粘土、暗灰色砂質粘土、黒色土混土層
8. 乳白色粘土に灰色粘質砂が混じる
9. 暗茶褐色
10. 暗灰色～暗茶褐色砂 (9よりも暗い)
11. 黒色強粘性土
12. 黒褐色粘性土
13. 乳白色土混じり暗灰色粘性土
14. 暗灰色粘質砂
15. 暗灰色～黒色砂質粘性土
16. 暗灰色砂礫層 (礫少なく小さい)
17. 暗灰色砂礫層 (礫多い)
18. 暗灰色砂
19. 黒色土 (やや砂性)
20. 暗灰色砂
21. 乳白色粘土
22. 黄白色、黄褐色砂 (礫)



第 44 図 溝断面土層図 (1/40)

復原口径22.2cm。④・⑤は口縁部破片で前者が復原口径16.0cm。後者が15.5cmである。

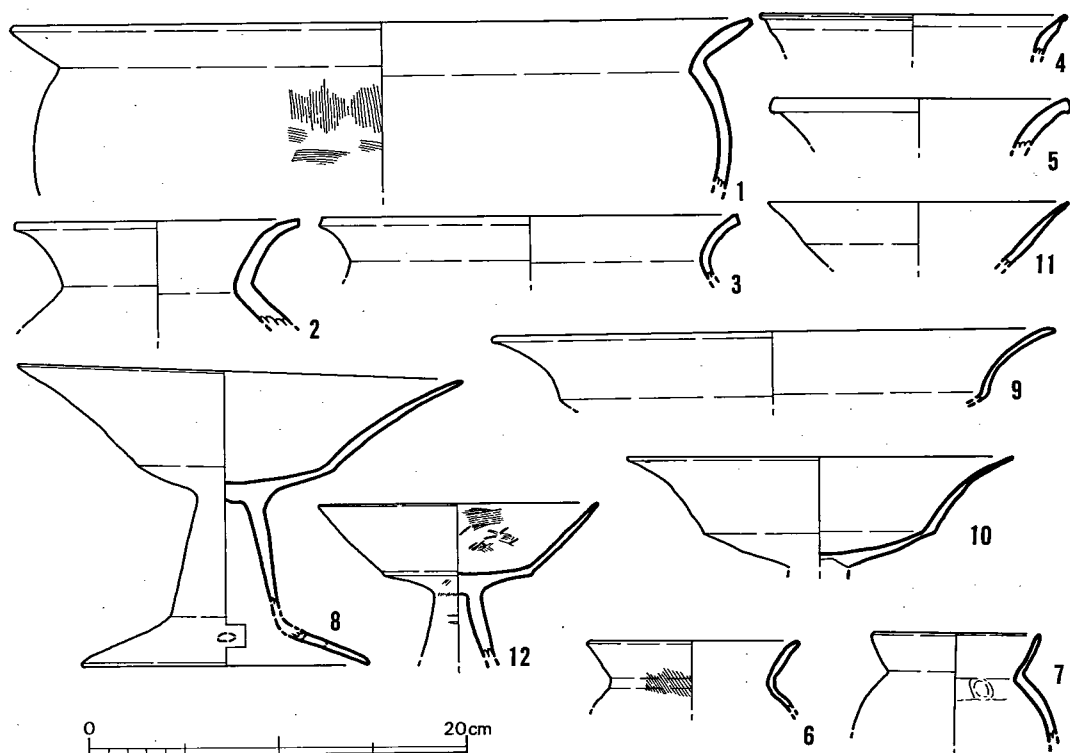
壺(⑥・⑦)は小型のもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整はハケを使用している。復原口径11cm。⑦は小型丸底のもので、胎土に細粒砂を含み、色調は褐色を呈し、復原口径は8.8cmである。

高杯(⑧~⑫)⑧・⑨・⑩は大型のもので、⑨・⑩の様に杯部に段を有しながら脚部にいたるもので、柱状が高く、裾部が開かないものと⑧の様に柱状部から一段、段を有しながら大きく開くものとに分れる。⑧は完形のものに近いのでその全体像が理解されるもので、胎土に砂粒や角閃石を含み、色調は黄褐色である。裾部に4個の孔あるもの。口径23.4cm、器高15.7cm、裾径15.1cmである。⑫は定型化されたもので、口径15.5cm、胎土に細粒砂を含み、器面調整はヘラミガキがあり一部にハケメが残る。⑪は口縁部破片で、復原口径16.0cmである。

時期的には弥生終末から古墳時代初頭である。

溝2(第43図、図版29)

溝1の15m東側斜面にあって、途中で溝4と合体するもので、長さ40m、幅1mで南側で20~30cmとなる。断面はU字形を呈し、第44図の様に深さ50cm前後を計測するものである。溝の内から多くの遺物がみられ、これは基本資料となるだろう。

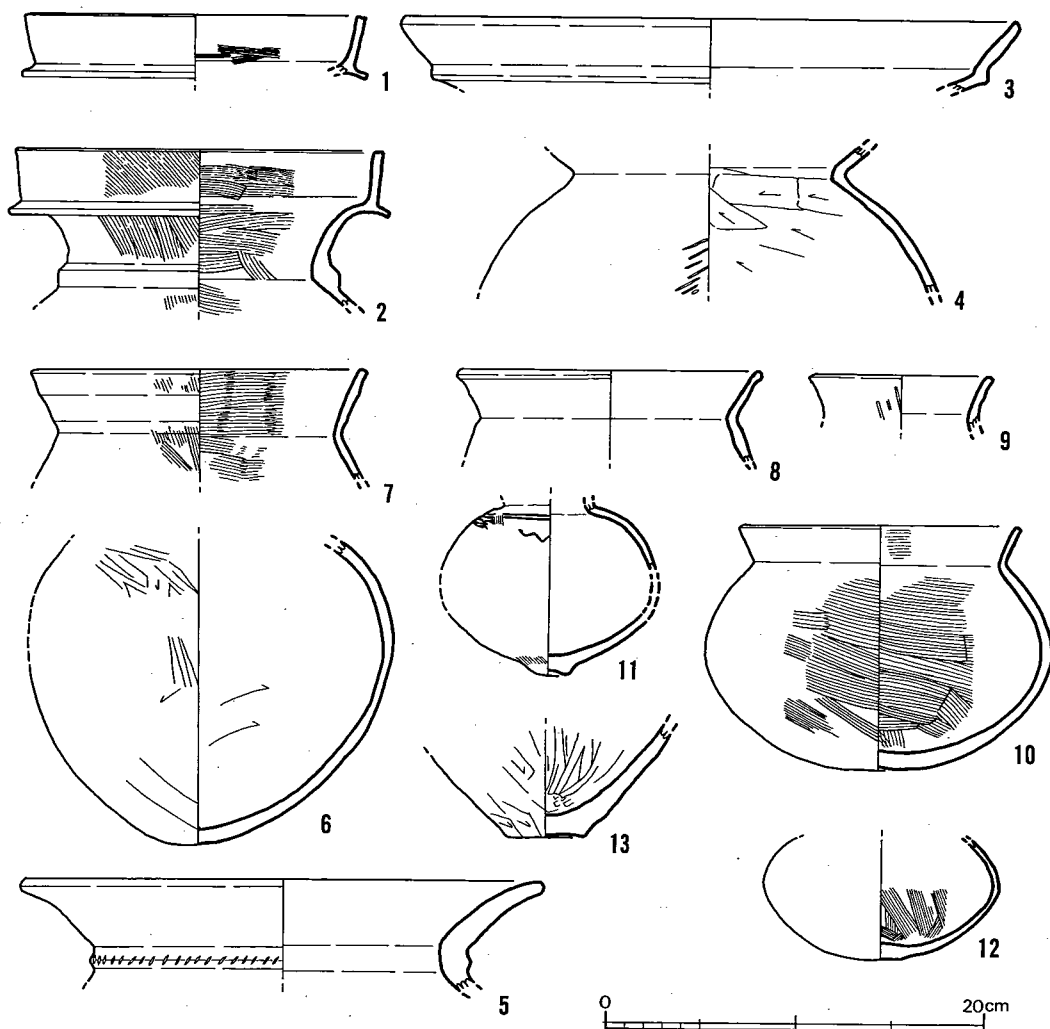


第45図 溝1, 出土遺物実測図(1/4)

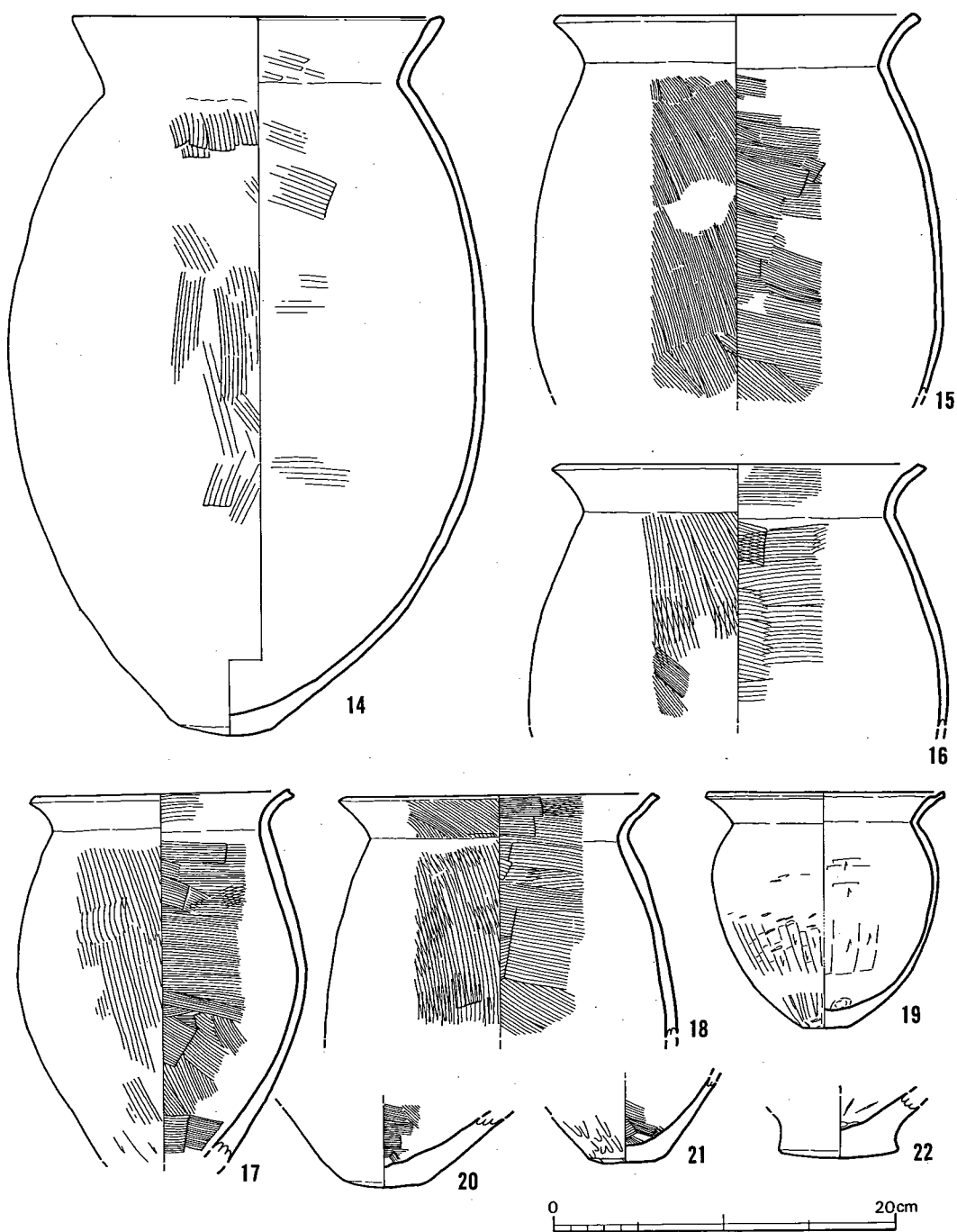
出土遺物 (第46図, 図版29)

溝の内から出土したものは土器類では壺・甕・高杯・鉢・器台と石器類も出土している。

壺 (①～⑬) ①・②は複合口縁部のもので、直立するもので、①と②は同一固体と思われたが相異なるものであった。②は胎土に細粒砂を含み、色調は褐色を呈し、器面の調整はハケを使用している。頸部直下に三角凸帯をもつもので、復原口径は19.4cm。③は山陰系の複合口縁で、④はその系統の頸部から肩部の破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面ヘラケズリ、口縁部はナデ。外面はタタキの後にナデ消している。⑤は口縁部破片で頸部直下に三角凸帯を持ち、凸帯上面に刻目をもつもので、胎土には角閃石を含み、細砂が多い粘土を使用している。色調は黄灰色で、器面調整はナデ仕上げ、⑥は胴部から底部にかけての破片である。⑦・⑧は在地系のもので、口唇部は類似している。⑨は直口壺の口縁部破

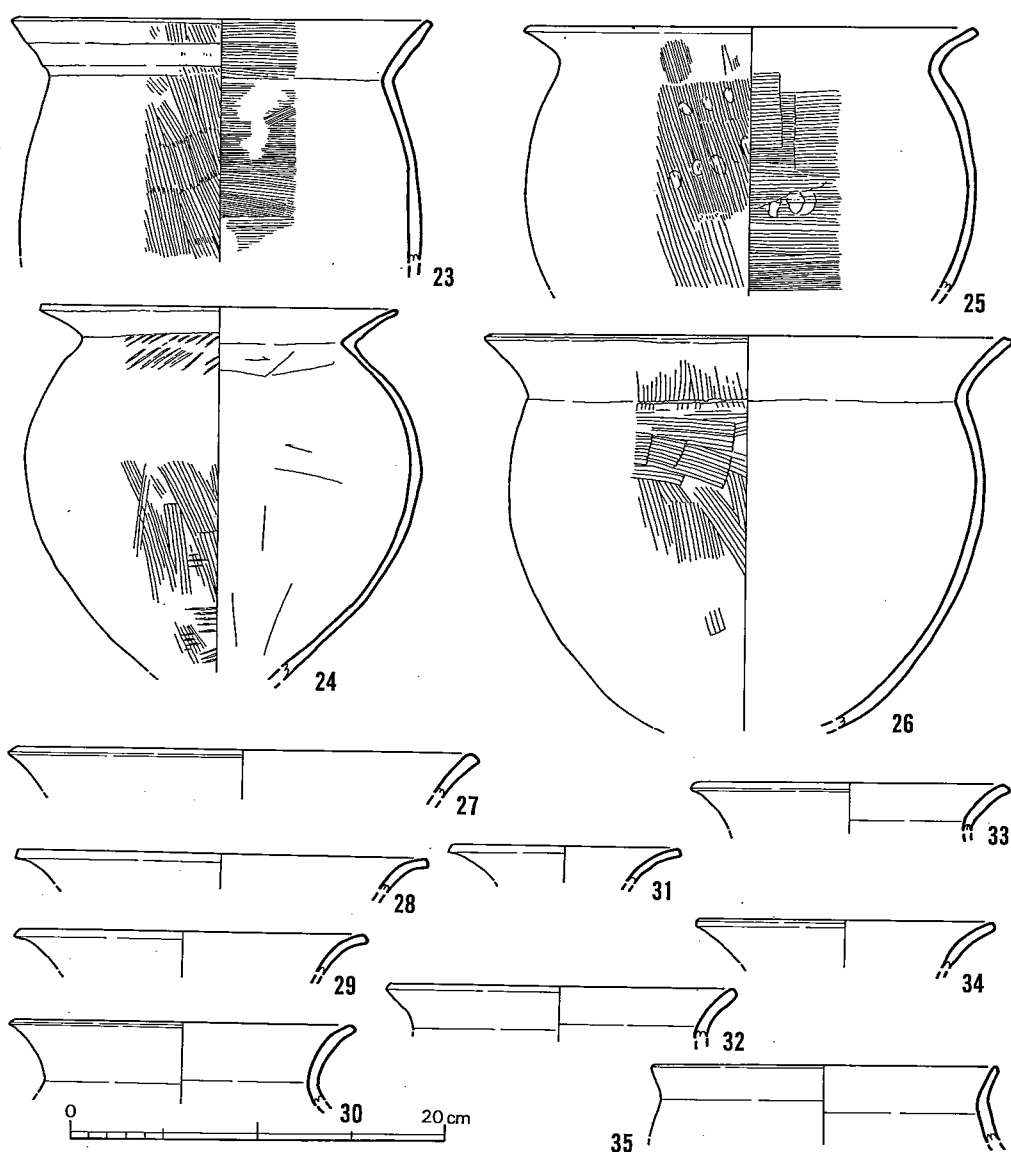


第 46 図 溝 2, 出土遺物実測図 (壺) (1/4)



第 47 図 溝 2，出土遺物実測図（甕）（1/4）

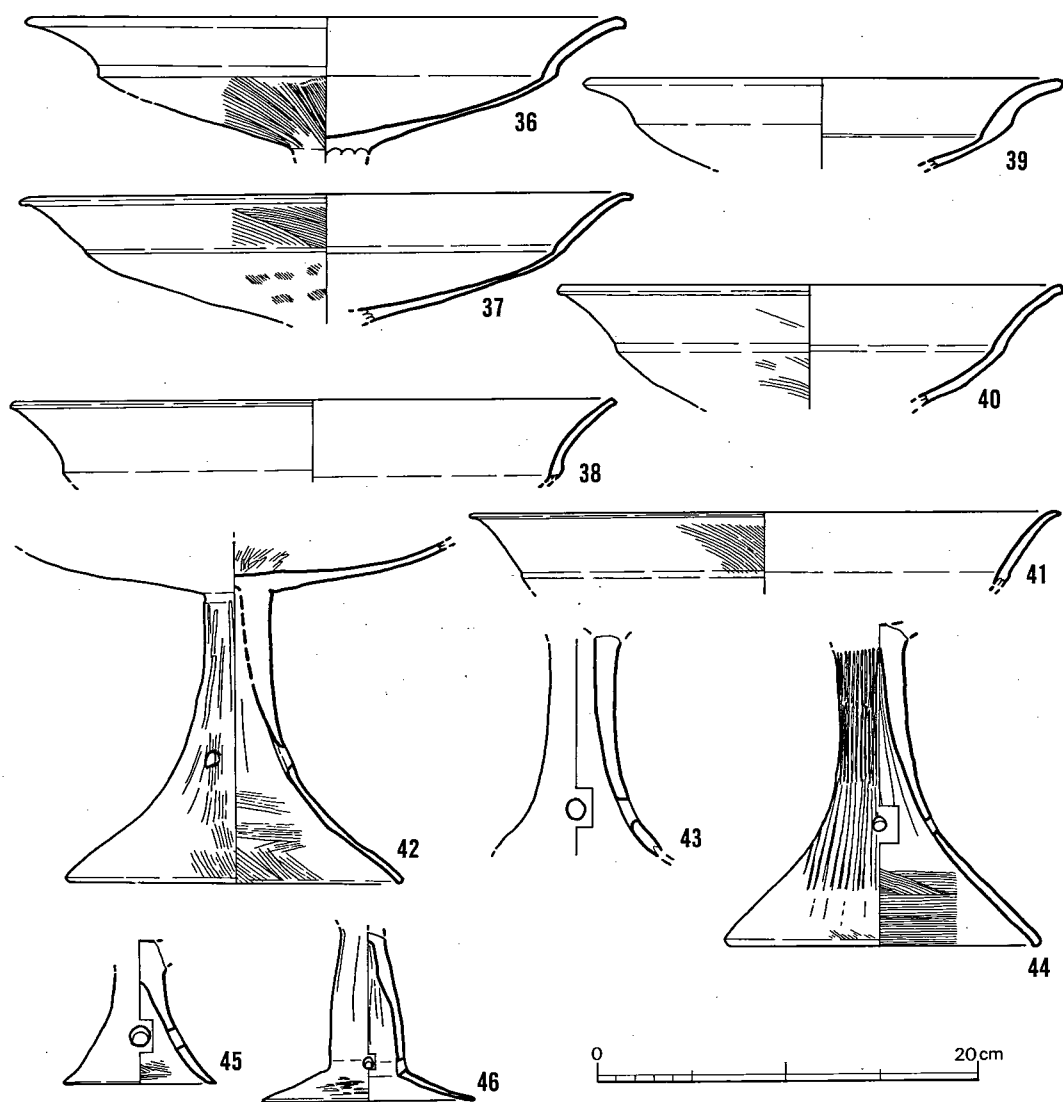
片，⑩は直口壺で，器面の調整はハケを使用している。復原口径14.5cm，⑪は小さな上げ底を



第 48 図 溝 2, 出土遺物実測図 (甕) (1/4)

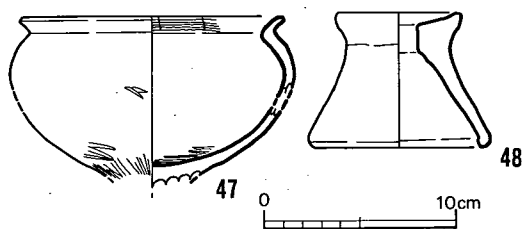
もつもので、肩部に波状文をもつもので、胴部が最大径13cm前後である。底径は1.5cm, ⑫は長頸壺の底部で丸底を呈するもので、器面の調整は内底面がハケメが見える。⑬は平底の破片で、外面にススが付着している。器面の調整はヘラケズリで内面はヘラ原体でミガいている。

甕 (⑭-⑮) 在地系の甕は⑭~⑮・⑲⑳㉑㉒, ㉓~㉔の大半がこれに該当する。長胴のものが基本である。⑭は胎土に細粒砂を含み、色調は内面は黄灰色で、外面は黄褐色で2次的な熱を受けて、ススが付着している。器面の調整はハケを使用している。口径22cm, 最大胴径28.3cm,



第 49 図 溝 2, 出土遺物実測図 (高坏) (1/4)

器高42.5cmで丸底でも凸レンズ気味のものである。⑮～⑱まで同系統のもの。⑲は口縁端部が若干もち上げられているもので頸部は「く」の字状になるもので稜をもつもので、底部は2.5cmの平底となる。器面の調整はヘラケズリである。黒斑あり。⑳～㉒は底部で丸底気味のもので平底である。㉔は庄内系のもので、胎土に細



第 50 図 溝 2, 出土遺物実測図 (1/4)

粒砂を含み、色調は黄灰色で外面は、ススが付着しているため黒味を帯びている。器面の調整は外面の全体をタキでその後ハケにて消している。内面はヘラケズリである。口径が19cm。

高杯 (36~46) 36~41は杯部破片で大形の高杯である。42~44は大形のもの、脚部破片、45・46は小形のもの、脚部である。36~41は同系統のもので杯部に一段、段を有しながら脚部にいたるもので杯部が浅いものである。器面の調整はハケを使用している。39は肥厚な口縁部になっている。42・43・44は同系統のもので穿孔が3~4個をもち裾部はラッパ状に開くだけで、裾部の端は内傾するものである。45・46では相異なる。45は裾部がラッパ状に開くが、裾部端も外へ広がっている。46は柱状部がエンタシス状になり一段、段を有しながら一気に外へ大きく広がっている。穿孔は1個である。

鉢 (47) 短頸の鉢の部分で、台がつくものである。復原口径14cm。

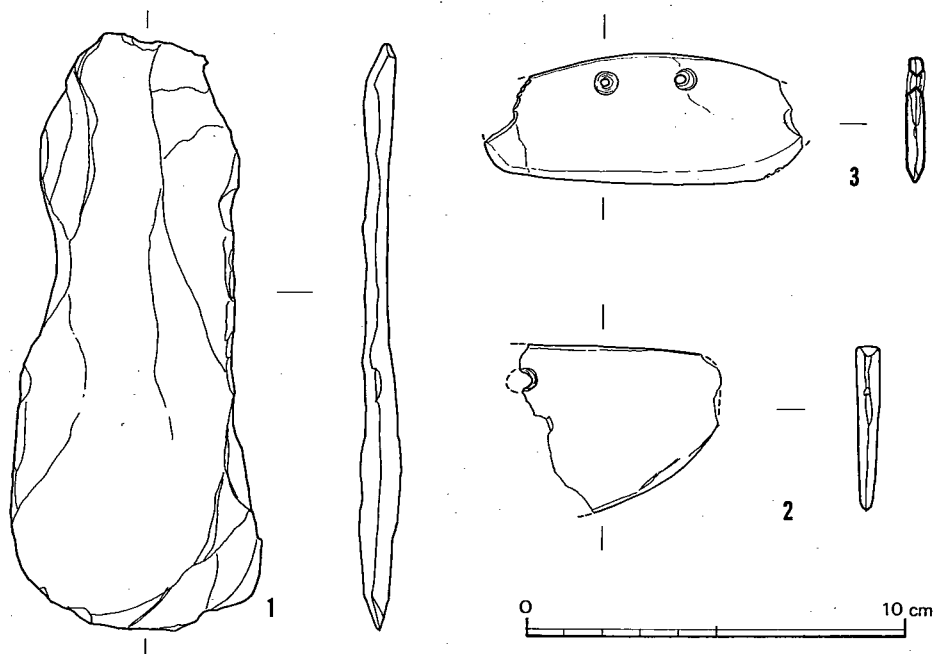
器台 (48) 脚部は内傾するもので、器面の調整は内外面ナデ仕上げである。

石器 (第51図, 図版33)

溝の覆土から出土したもの (①・②) 溝底から出土したもので、打製石斧と石庖丁である。

石斧 (①) 打製の短冊型の石斧で、刃部を使用して、ノッチ状の袈りが若干みられ、側縁部も剝離されている。石質は片岩系のもの。重量が158.9g。

石庖丁 (②・③) ②は石質は輝緑凝灰岩で、側縁部の一部で、重量は14.1gである。③はほぼ完形のもので、両側縁に袈りを入れて、背も丸味をもたせ、穿孔は両面から行っており、刃部も丁寧に仕上げている。紐づけがみられ相当使用されている。石質は緑泥片岩で、小形のもの。



第 51 図 溝 2, 出土遺物実測図 (石器) (1/2)

他に打製石斧の破片が3点みられる。

遺物から溝2の時期は、弥生終末から古墳時代の初頭である。

溝3 (第43図, 図版19)

溝2とクロスしているもので、溝3が溝2を切っている。出土遺物は覆土中より若干出土している、溝の全長35mで幅30~50cm、深さ20cmである途中溝4に合体するものと推定される。

出土遺物 (第52図)

甕 (①) 中形のもので、外来系の土器で丹塗のもので一部残っている器壁は薄く、内面はヘラケズリで、外面は細いハケメが残っており、ススの付着も見えている。丁寧に作られた土器で、胎土には細粒砂を含むが精良なる粘土を使用し、色調は内面黄褐色、外面は灰黄色に黒味を帯びる部分と丹が塗られてる部分がある。復原口径10cmである。

高杯 (②) 脚部破片で柱状部である。穿孔は4個見られる。外面はヘラでミガキ上げられている。

鉢 (③) 小形の鉢で、復原口径8.3cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色を呈している。口縁部は若干内傾する。

支脚 (④) 胎土に砂を含み、色調は褐色から黒褐色である。焼成は良好である。上部の傾斜面は黒変している。内面はハケメが残り他はナデ、脚部端は内側に曲げ込んでいる。

遺物は弥生の終末から古墳時代初頭である。

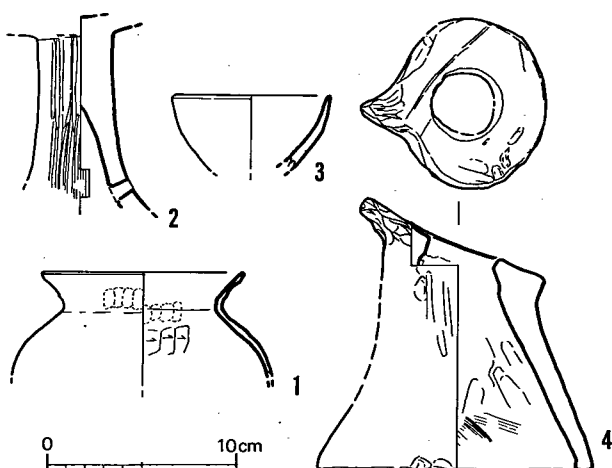
溝4 (第43図, 図版19)

溝3の横にあって、全長68m、幅2m、深さ30~80cmを計測する。断面は幅広いU字形である。途中から溝5とつけかえている。I区の水路側に延びている。溝の中より大量の遺物が出土している。

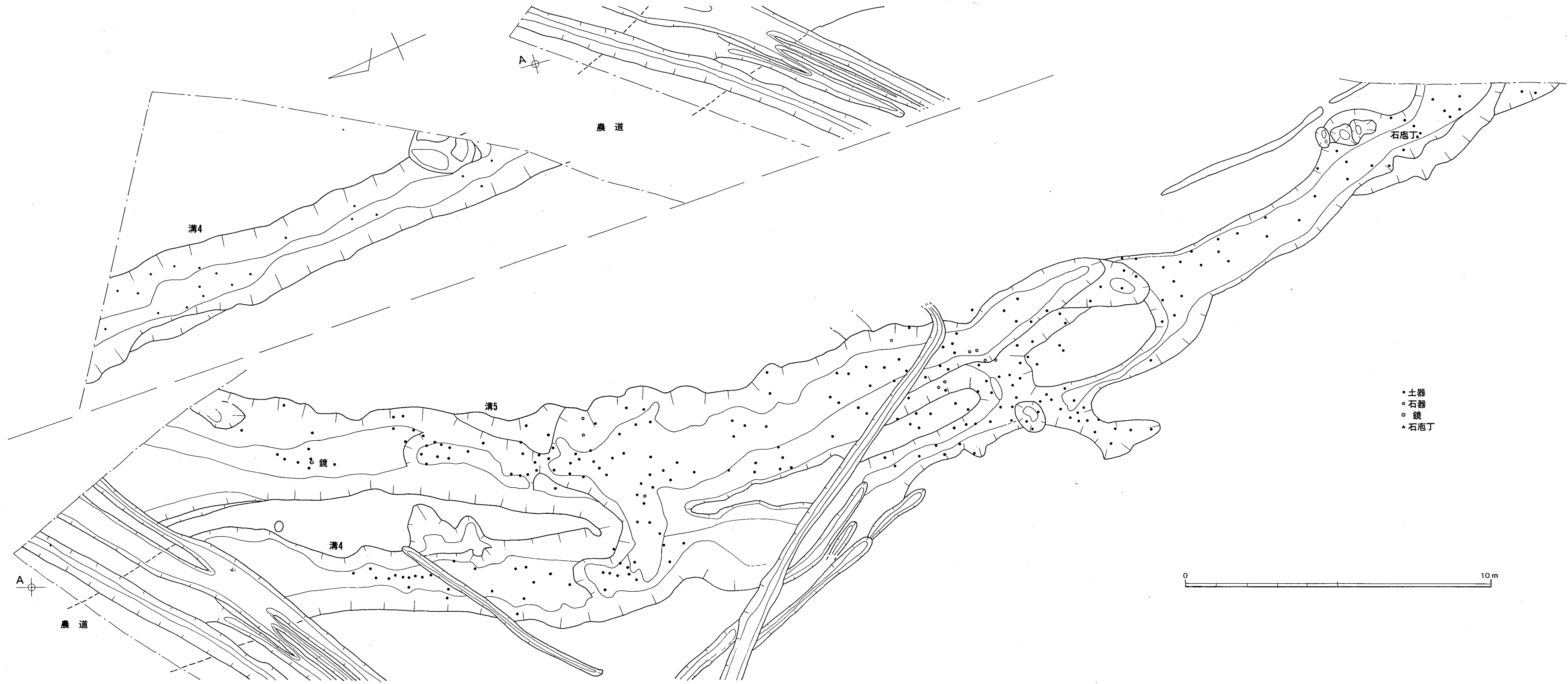
出土遺物 (第54図, 図版30)

覆土の黒色土出土のものから説明を加える。

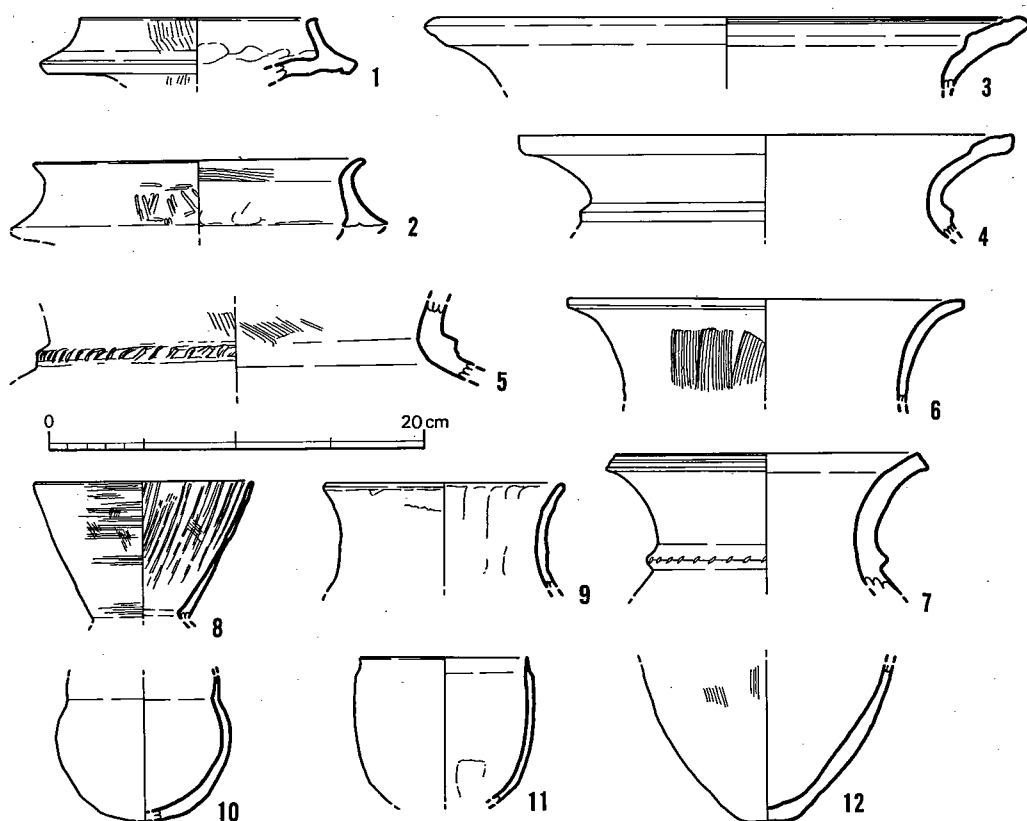
壺 (①~⑫) ①・②は複合口縁のもので、③・④・⑤・⑥・⑦大形壺の破片である。⑧・⑨は長頸壺の破片、⑩・⑪小型丸底の壺、⑫は底部破片である。①は複合口縁部破片で、口縁は内傾し、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は内面はナデ仕上げで、外面はハケメである。復原口径は12.4cmである。②も複合口縁部で、口縁部は直立し



第52図 溝3, 出土遺物実測図 折込み(1/4)



第 53 図 溝 4・5, 遺構配置図 (1/100)



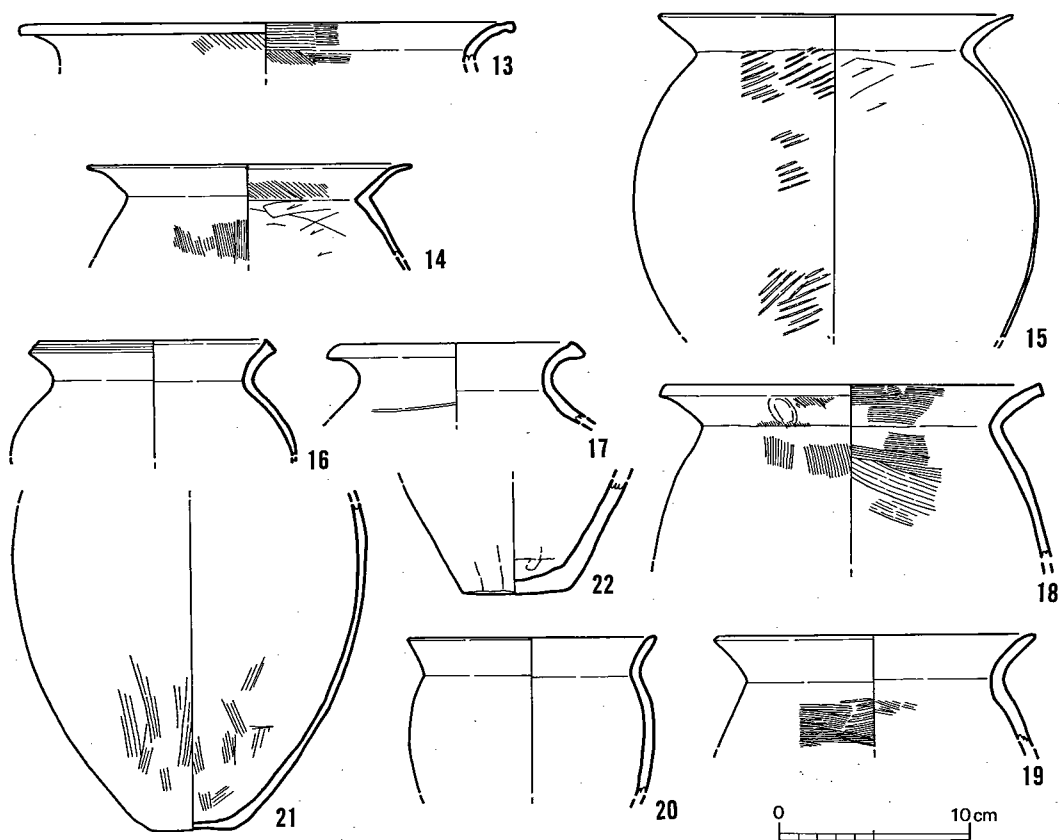
第 54 図 溝 4, 覆土中出土遺物実測図 (壺) (1/4)

ながら外反するものである。胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色を呈し、器面の調整はヘラミガキである。内面の口唇付近はハケメ、それ以下ヨコナデである。復原口径は17.5cmである。

③④は口縁内面に粘土帯を貼付けた口縁部破片である。胎土に細砂粒を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面は口縁に粘土帯をもち、その端部に二条の沈線を施しているものである。復原口径は32.8cmである。④は頸部に三角凸帯を一条持つもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色である。復原口径24cm。⑤は頸部の破片で三角凸帯が一条めぐらしている。その凸帯に斜からヘラで刻目を入れている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面ハケメで、外面もハケメが見られる。⑥は復原口径が21cmで、胎土に細粒砂や角閃石を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はハケメとナデが残っている。⑦は口縁部破片で、口唇部に沈線を2条もって、頸部に三角凸帯を有しヘラにて刺突文を施文するもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、復原口径は16.0cmである。器面調整は風化のため不明。⑧は長頸の口縁部で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面はヘラにて暗文を施して、ハケメを消している。外面はハケメが残っている。⑨は胎土に細砂を含み、色調は茶褐色、器面の調整

は内面ナデで外面もナデ仕上げ、一部に黒変あり、復原口径13cmである。⑩は小型丸底のもので、胎土に砂粒や角閃石を含み、色調は黄褐色で、外面は黄褐色で丸底底部付近は黒変している。胴部最大径は9.4cmである。⑪は口唇部が細く直立するもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面ナデで、外面は風化している。復原口径は9cmである。⑫平底状の凸レンズを呈するもので、底径は3.0cmで、器面にはハケメが残っている。

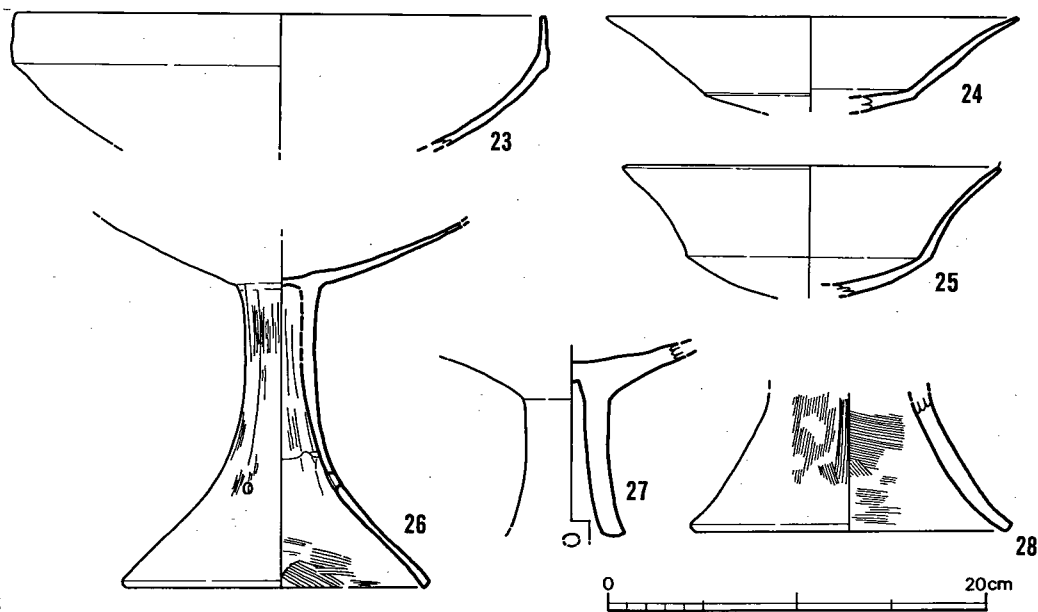
甕 (⑬~⑳) ⑬は口縁部破片で、器面の調整は内外面ともハケメである。復原口径は cm。⑭は胎土に細粒砂を含み、色調は内面灰黄褐色で、外面は黄灰色で、2次加熱を受け、ススが付着している。器面の調整は内面ヘラケズリで口縁部はハケメが残る。外面は頸部以下ハケメで他はヨコナデである。復原口径17.3cm。⑮は口縁部から胴部破片である。胎土に細砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面はヘラケズリで、外面はタタキで口縁部の内外ともヨコナデである。口径18.6cm。⑯は口唇部に沈線をもつもので、2条めぐらしている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色である。器面の調整はナデ仕上げである。口径12cm。⑰は復原口径12.4cmで、胎土に砂を多く含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面ヘラケズリで、外面の頸部直



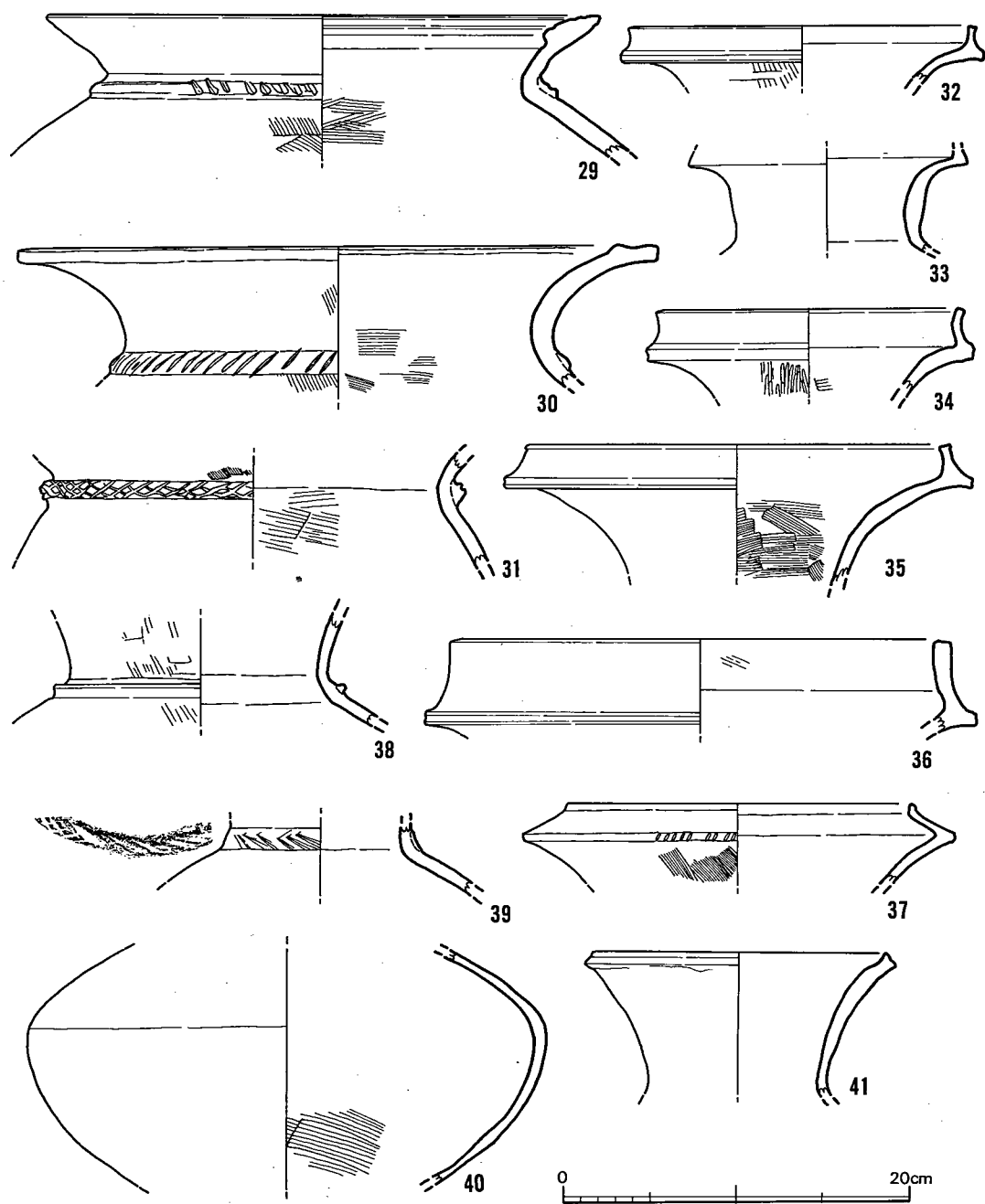
第 55 図 溝 4、覆土中出土遺物実測図 (甕) (1/4)

下にヘラ原体で1条の沈線を施している。⑬は胎土に砂粒を多く含み、色調は茶褐色で、器面の調整は内面は原体でナデて、口縁部内面はハケメで、外面はハケメである。復原口径は19.6cmで胴長の甕である。⑭も口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調黄褐色で、器面調整は内面ナデ仕上げで一部ハケメが残り、外面はタタキ後にハケで消している。⑮は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で器面の調整はナデ仕上げである。復原口径13.2cm、⑯は長胴甕の底部で、平底をなす。胎土に細砂を多く、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は内外面ハケを使用している。底径4.4cm。⑰も平底のもので3.3cmである。胎土に砂粒を含み、色調は黄橙色で、器面の調整はナデである。

高杯 (⑳～㉔) ㉓～㉔は杯部の破片で、他は脚部の破片である。㉓は口縁部破片で、この口縁が直立する。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内外面ヨコナデである。復原口径は28.2cmである。㉔は胎土に細粒砂を含み色調は黄褐色で、器面の調整はヘラミガキである。復原口径は21.8cmである。㉕は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、内外共に風化が著しく調整不明である。復原口径20.0cmである。㉖は脚部の破片で、大形の高杯である。胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は外面ハケメ後にケズリ、裾部内面にはハケメ他はナデである。裾部はラッパ状に開き、穿孔は全体に3個である。杯身はナデでススが附着している。㉗は低脚のもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好である。穿孔は3個である。内外共に風化が著しく調整不明。㉘は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色、器面の調整は内面ハケメ、外面もハケメで穿孔あり。



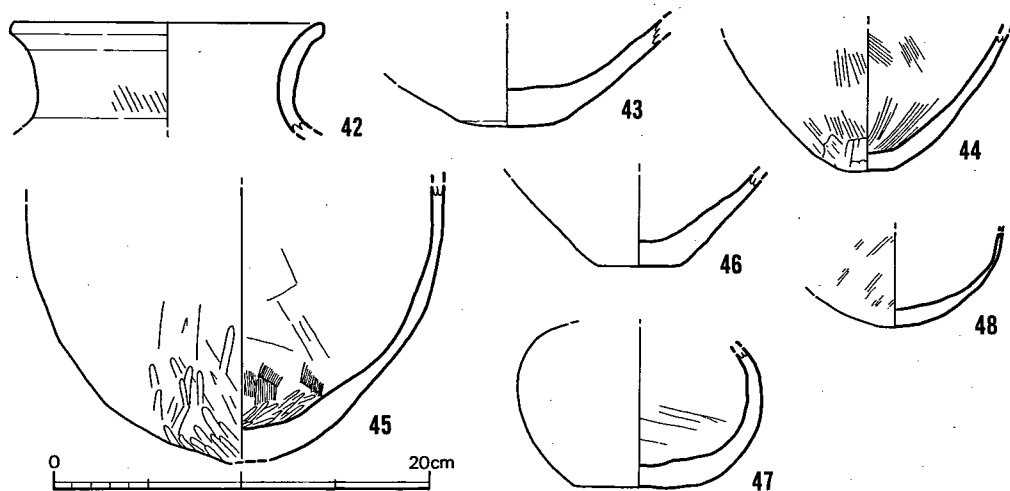
第 56 図 溝 4、覆土出土遺物実測図 (高杯) (1/4)



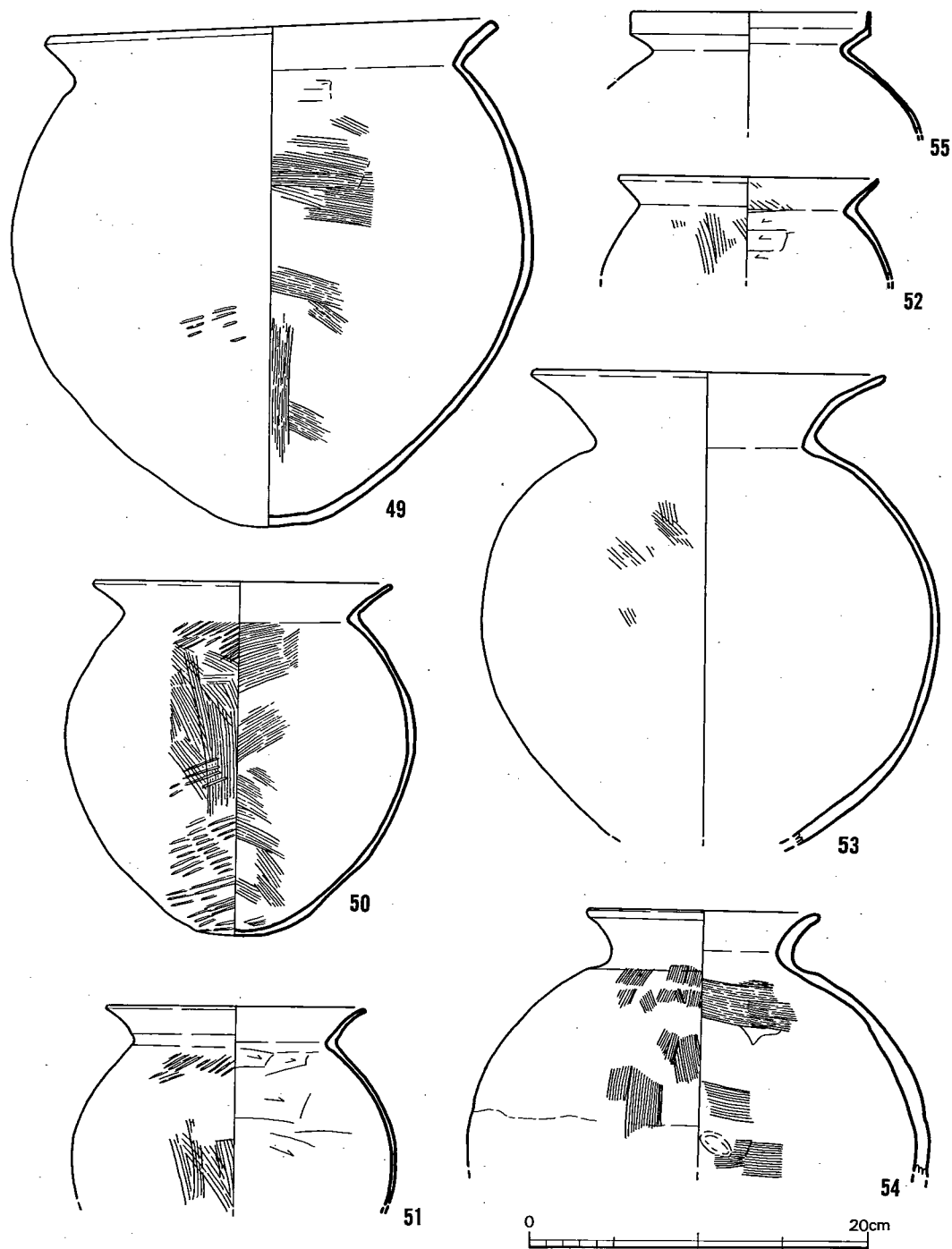
第 57 图 溝 4，出土遺物実測図（壺）①（1/4）

溝の内部から出土したものを中心にまとめてみた。

壺(29~48) 大形のもの29・30・31, 複合口縁のもの32~37である。29は口縁部内面に粘土帯を貼付けたもので、それに3本の沈線がはいる。頸部に三角凸帯をもち、刺突文が刻まれている。胎土には細粒砂を含み、色調は茶褐色を呈し、器面の調整は内外面ハケメである。口縁部付近はヨコナデである。30は胎土に細粒砂を含み、角閃石・石英粒をも含む、色調は黄褐色である。口縁部内面には粘土帯の貼付をめぐらしていたものである。頸部に三角凸帯を一条有し、刺突文を刻んでいる。器面の調整は内外面ハケメである。31は頸部から胴部の破片である。扁平凸帯に菱形文を刻んでいるもので、胎土に細砂を含んで、色調は暗黄褐色で、器面の調整は内外面ハケメである。32~36は直立する複合口縁である。33は口縁部が欠落している。35は大形のものである。胎土は細粒砂を含み、金雲母片もはいる。色調は暗灰色である。器面調整はヨコナデであるが内面に若干ハケメが残る。復原口径27.4cmである。37は口縁部が極端に内傾するもので、その屈曲部に刻目を有している。胎土に細粒砂を含み、雲母片を多く含み、色調は内面黄褐色で外面黄褐色で黒味をおびる。ススの付着がみえる。器面の調整はハケメとナデを使用している。38・39・40は頸部と胴部破片である。38は頸部直下に三角凸帯をもち、器面の調整は内面ナデ、外面はハケメである。39は頸部に刺突文を有している。40は胴部最大径は30.2cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で黒味をおびてススが付着している。肩部に黒斑あり。41は長頸壺の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色を呈し、器面の調整は内面がヨコナデで肩部以下ケズリである。復原口径16.8cmである。42も同様な破片で復原口径16cmである。43~47までは底部破片である。丸底のもの45・48, 平底のもの46・47で、丸底に近い小さな平底43・44である。47は長頸壺か直口壺の胴部破片で底径は6.8cmである。



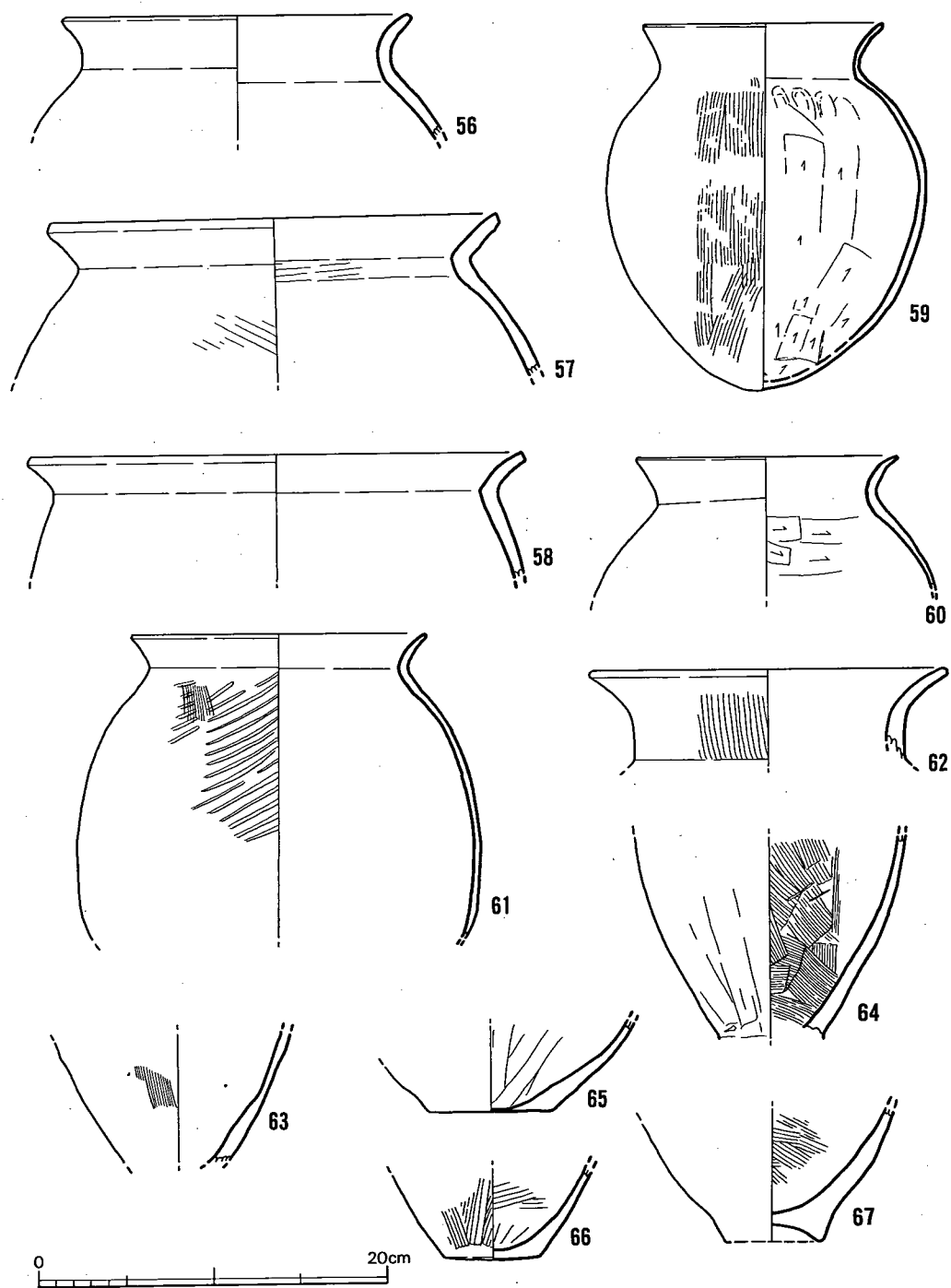
第 58 図 溝 4, 出土遺物実測図(壺)② (1/4)



第 59 図 溝 4，出土遺物実測図（甕）①（1/4）

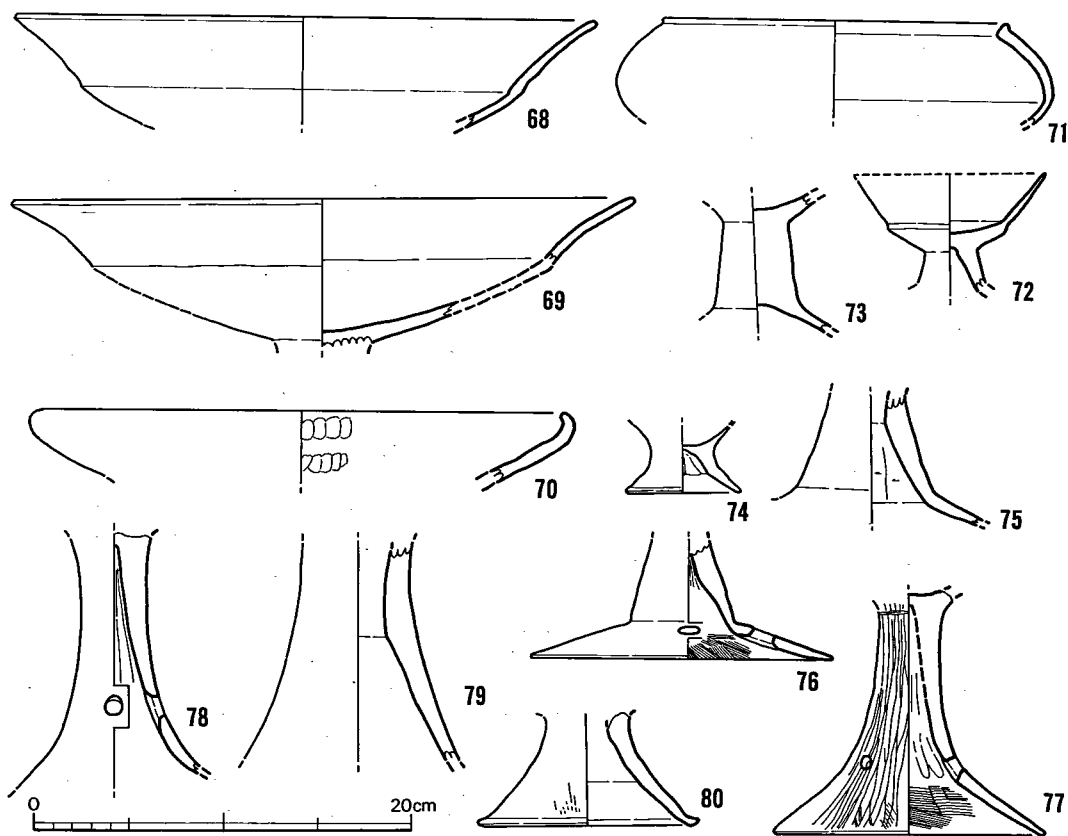
甕 (④⑨~⑥⑦)「く」の字状の口縁をなすもので、④⑨は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色である。器面の調整は内面ハケメで、外面は器面があられているが不明であるが、一部にタタキが残っている。口縁部は肥厚である。復原口径26cmで、最大胴径30cm、器高29.7cmである。⑤⑩は胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色で、器面の調整は、内面ハケメで、外面はタタキの後でハケメ調整する。口径17.4cmである。⑤も前者と同じ器形をもち、胎土に細砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面がヘラケズリで、外面をタタキの後ハケメで消している。口径15.6cm。⑥は口唇端部をはね上げぎみで、口縁部は「く」の状をなして、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は内面ヘラケズリで、外面ハケを使用している。⑦は胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で、器面の調整は内面ナデで、外面ハケメである。復原口径20.7cmである。④は胎土に砂粒や角閃石を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はハケを使用している。復原口径は13.2cm、最大胴径27.3cmである。⑤は口縁が直立するもので、瀬戸内の影響を受けている。細い沈線を外面にもっている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は風化の為不明である。復原口径13.9cmである。⑥は細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は風化の為不明、復原口径は20.2cmである。⑦は胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で、器面の調整は内面はハケメとナデで外面はタタキが一部残っている。復原口径26cm。⑧は胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色で、器面の調整は風化しているため不明、復原口径は28.6cm。⑨は胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色で外面はススが付着しているため黒味を帯びている。器面の調整は内面ヘラケズリ、外面ハケメである。口縁部はナデである。⑩は胎土に細粒砂を含み、色調黄褐色で、器面の調整は内面ヘラケズリで、他はナデ、復原口径14.8cmである。⑪は胎土に砂を多く含み、色調は褐色で、外面にはススが付着している。器面の調整はタタキ後に一部ハケで内面はナデである。復原口径は17.0cmである。⑫は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で、器面の調整はハケ使用し、内面はナデである。復原口径20.6cmである。⑬は胴部破片で胎土に砂が多くみられ、色調は黄褐色で、外面にはススが付着して黒味がある。器面の調整は内面は工具によるナデ、外面はハケメを施している。⑭も胴部破片、胎土に細粒砂を含み、色調黄褐色で、器面の調整は内面ハケメで外面工具によるナデである。⑮は底部破片で、胎土に細い砂を含み、色調は黄褐色、器面の調整は内面ヘラ状工具でナデで、外面もナデ、底は平底をなす。⑯も丸味を帯びた平底で、胎土も、色調も前者と同じで、器面の調整は内外面ともハケメである。⑰は底に台がつくもので、豊後地方の影響を受けたものと見られる。胎土には細粒砂を含み、色調は茶褐色で、器面の調整はハケを使用し、底部内面はヘラケズリである。

高杯 (⑥⑧~⑩⑪) ⑥⑧~⑩は杯身の部分の破片で、他は脚部の破片である。⑥⑧は胎土に細粒砂を含み、色調は褐色、器面の調整はヨコナデである。口縁部は杯部の中央部分で段をなして大きく広がっている。口径30.6cmである。⑨は細粒砂を多量に含み、角閃石で、色調は黄褐色一部に黒斑あり、器面の調整はヨコナデである。復原口径32.8cm、⑩は胎土に細粒砂を含み、色調は



第 60 图 溝 4，出土遺物実測図（甕）（1/4）

黄褐色を呈し、器面の調整はナデ仕上げで内面に指痕が残っている。口縁部は内傾する。⑦は器形がブランディーグラスの様な形で、その杯部の口縁部破片である。胎土に細粒砂を含み、若干角閃石をも含んでいる。色調は黄褐色で、器面があられているため調整不明である。復原口径18.0cmである。⑧は中型の定型化した低脚の高杯である。胎土に細砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は不明である。裾部は段を有して、大きく広がる。⑨は高杯の柱状部破片で、内面の絞り込みの空洞がみられないものである。畿内系の特長的なものである。⑩は小型の高杯の脚部の破片である。⑪は中型の高杯の脚部破片である。裾部に一段、段を有して広がっている。⑫は前者と同じ器形となるもので、裾部に穿孔が4ヶ所ある。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はヨコナデ、内面はハケメでヨコナデである。⑬は⑫の器形の脚部破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面はハケメとナデで、外面はヘラミガキ裾部との境いに3個の穿孔がはいっている。⑭は同系統のもので、穿孔も3～4個であろう、器面の調整は内外共に風化が著しいため不明である。⑮は柱状部が巾広なものである。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は内外とも風化が著しく調整

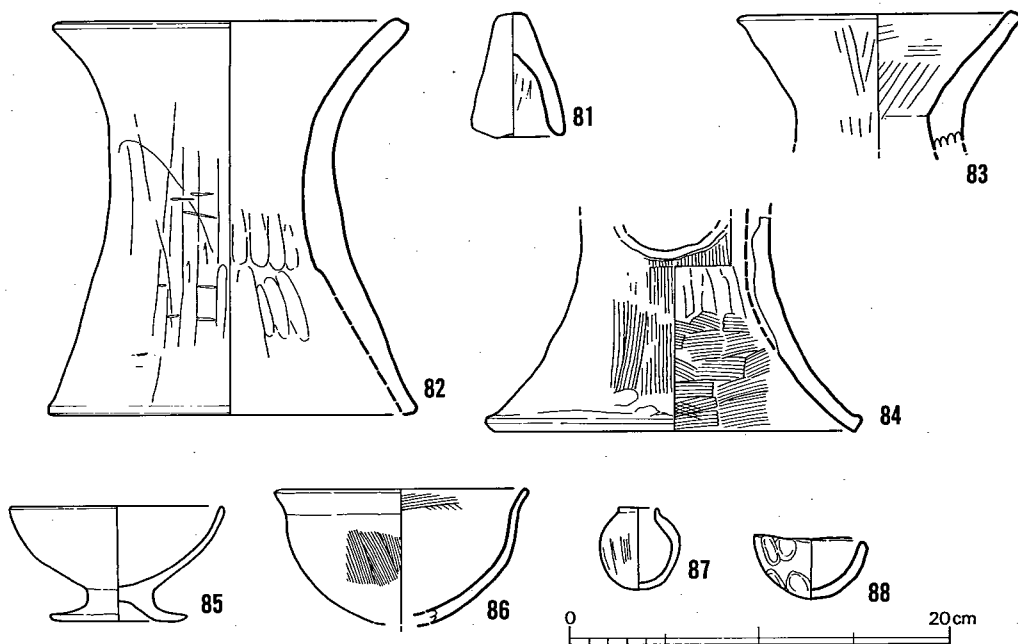


第 61 図 溝 4，出土遺物実測図（高杯）（1/4）

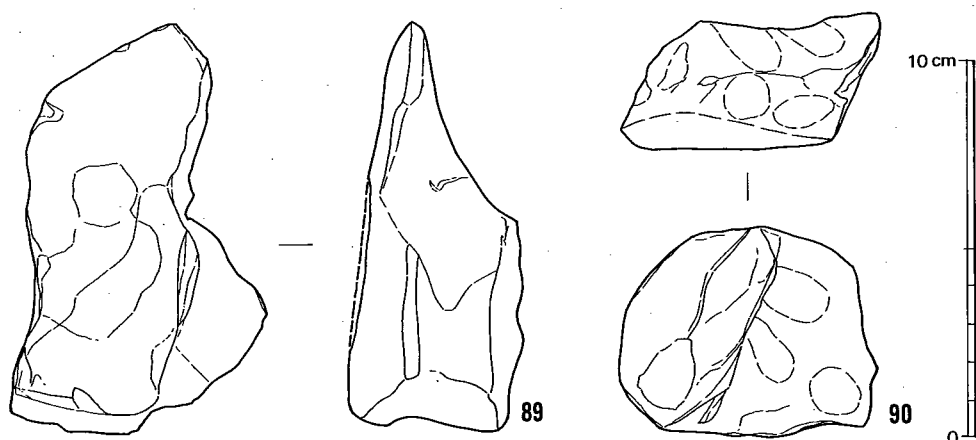
不明である。㉔は小型のものの脚部である。胎土に細粒砂を含み色調は黄褐色で、器面の風化はひどくなっている。

支脚（㉔）色調は黒褐色を呈している。支脚の上部は2cm前後のものである。器高が7.0cm。

器台（㉒・㉓・㉔）3点で全体の器形は判明するものが㉒である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、上部に黒変している。器面の調整は、ヨコナデと外面はヘラケズリで一部に工具の痕跡が残っている。㉓は前者よりも一まわり小さなものである。器面の調整はハケメであ



第 62 図 溝 4，出土遺物実測図（器台・支脚・鉢・手捏等）（1/4）



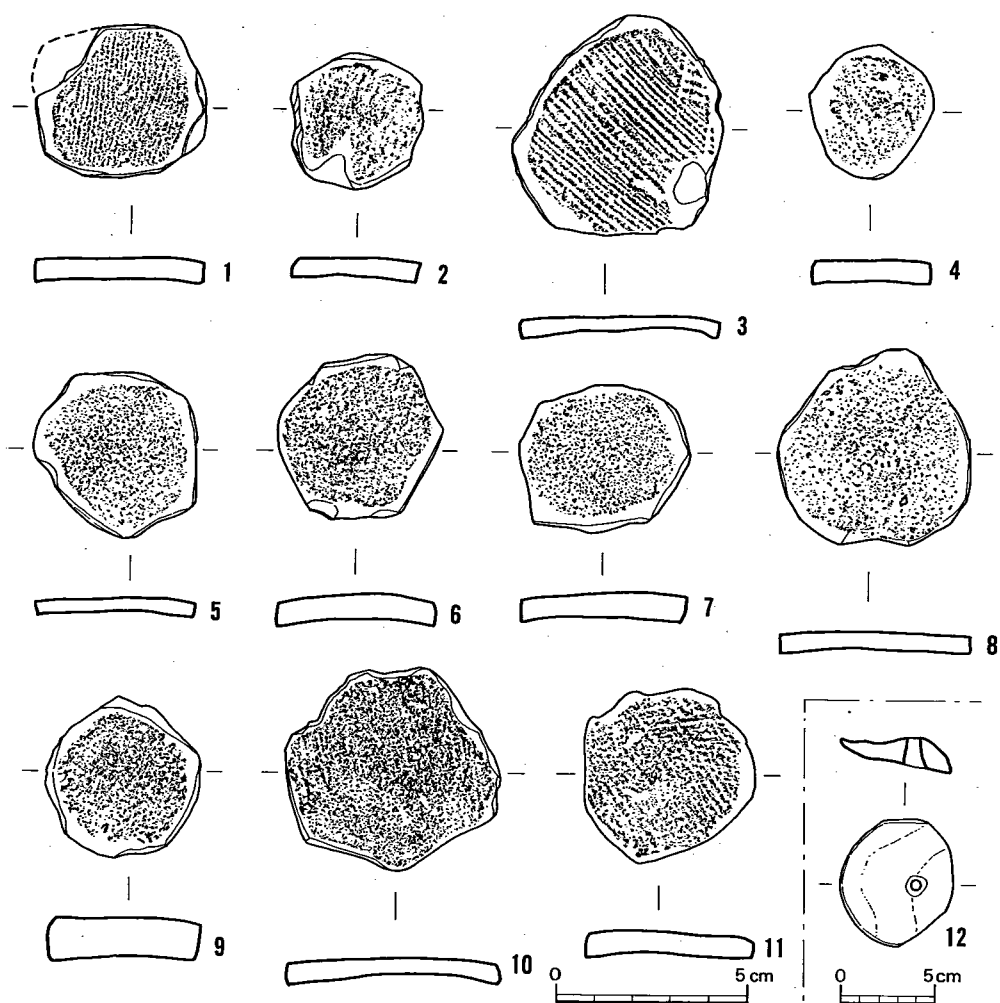
第 63 図 溝 4，出土粘土塊実測図（1/2）

る。④は豊前系のもので、上部にU字形の窓あきのもの、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し器面は内外面ともハケを使用し、一部にナデが見える。

鉢（⑤・⑥）⑤は台付けのもので、胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で、器面の調整は風化のため不明であるが一部にナデが残っている。⑥は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面調整は内面ナデ、上部ハケメ、外面はハケメである。

手捏（⑦⑧）⑦はミニチャーの壺で、祭祀土器である。胎土は砂粒を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はハケメで内面はナデである。⑧は鉢形のもので、胎土に砂粒を多く含み、色調は茶褐色で、器面の調整はナデ仕上げで指痕が外面に残る。

粘土固（⑨⑩）粘土が焼かれて固ったもので指痕が残っている。両者とも色調は灰黄色で一



第 64 図 溝 2・4・5, 出土遺物実測図 (1/2, 1/4)

部に黒く焼けた部分がある。手慰さめのもので重量が㊸は178.9 g、㊹は102.8 gを計る。両者とも胎土に細粒砂を含む。

土製品 (第64図, 図版33)

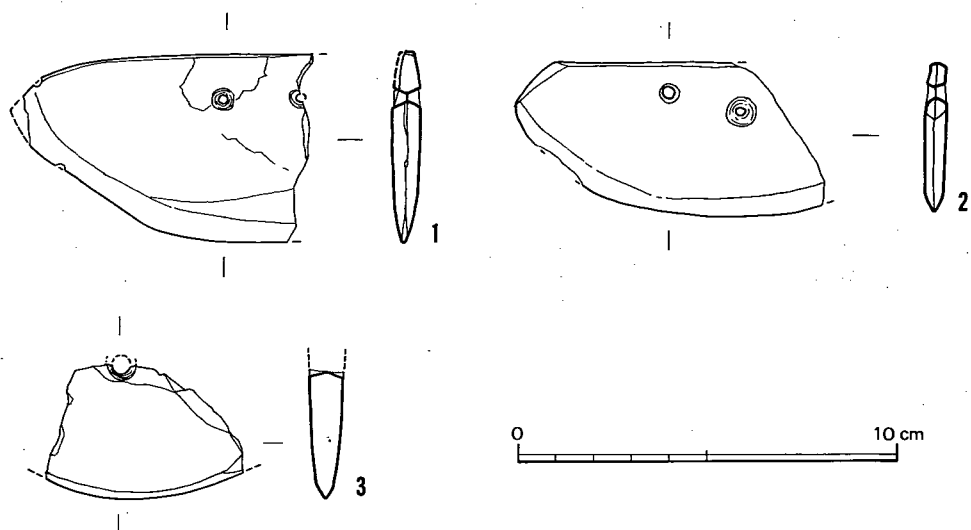
土製円盤 (①・②・③) ①は溝2から出土したもので、側縁部を擦っているもので、重量13.4 g。②は溝4の黒色土層から検出されたもので、側縁部を使用している。重量8.8 gである。③は溝4から出土したもので、側縁部を使用しているもので厚さ5 mm前後で重量が19.7 gである。

石器 (第65・66図, 図版33)

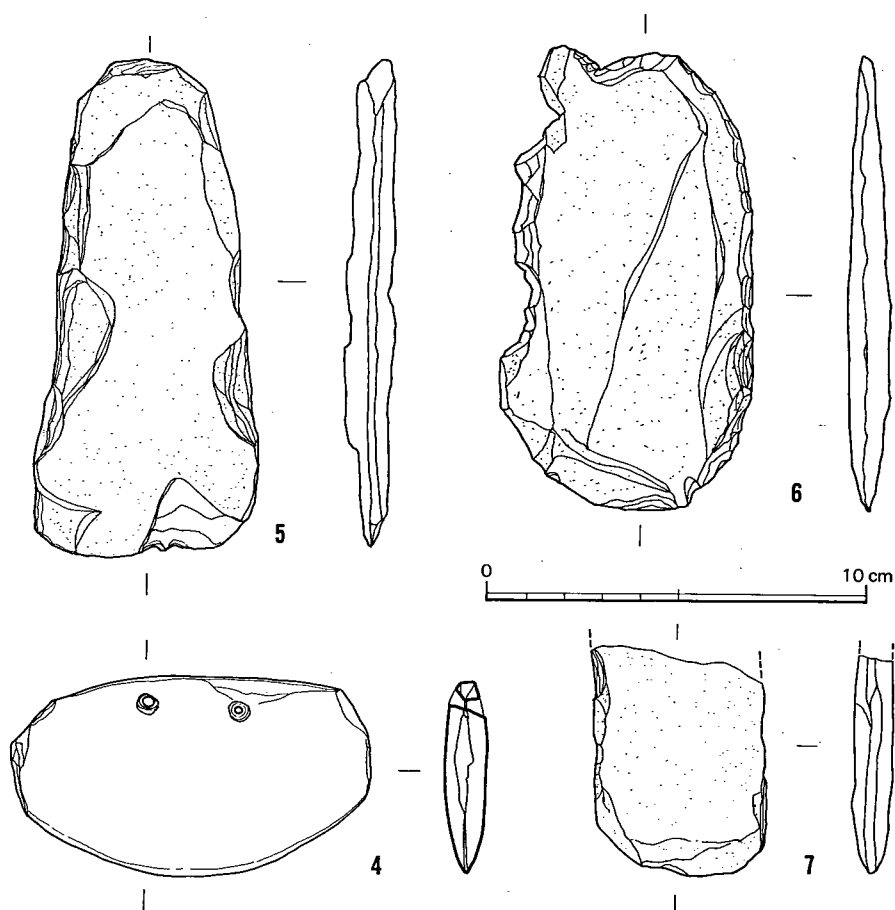
石庖丁 (①・②・③) 溝上面の黒色土から出土したもので、①は凝灰岩製のもので半欠品である。穿孔は両面からあけている。重量は34.2 g。②も凝灰岩製のもので、側縁部の調整もほどこしてある。穿孔も両面からのもので、紐ずれもみられる。刃部の調整も良好である。1/3の欠損品である。重さは32.4 gで、手頃な大きさである。③は輝緑凝灰岩製で、紐通しの孔は両面から孔をあけたもので、重量は17 gである。刃部も調整されている。

石庖丁 (④) 完形品で、紐ずれもあって、孔は両面穿孔のもので、刃部も調整され、指あて部は肥厚である。磨き上げられている。重量は76.4 gで、石質は安山岩系のものである。

石斧 (⑤・⑥・⑦) ⑤は打製石斧で、石質は粘板岩製のもので、刃部は細い剥離があり、側縁部も剥離調整を行なっている。重量は167 gである。⑥は一応打製石斧として上げているが、石製は輝緑凝灰岩であるため、石庖丁の未成品としてあつかえるものである。側縁部は敲打さ



第 65 図 溝4, 出土遺物実測図 (石器) (1/2)



第 66 図 溝 4, 出土遺物実測図 (石器) (1/2)

れ、剥離調整されたものである。刃部の剥離もそうみると、より石庖丁に見えてくる。重量は 82 g である。⑦は刃部の破片で、石製は緑泥片岩のもので重量は 40 g を計測する。全て出土石器は覆土中からである。

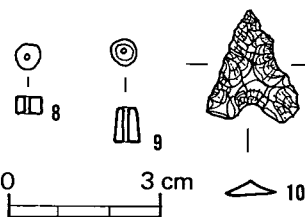
玉 (第 67 図⑧・⑨) ガラス製のもので、両者ともライトブルーである。⑧は覆土中から出土したもので 0.1 g を計測する。⑨は溝カタの部分から出土したもので、⑧にくらべて厚くなっている。穿孔は片側のみである。0.3 g を計測する。

石鏃 (第 67 図⑩) 覆土中から出土したもので、黒曜石製のもので、断面は三角形を呈している。0.7 g を計測する。

特殊なもの (第 68 図, 図版 31)

興味深いものを上げてみた。

ヘラ書のもの (①) 溝 2 の覆土から出土した甕の胴部破



第 67 図 溝 4, 出土遺物実測図 (玉) (2/3)

片の一部にヘラにて×の刻目が印されている。

円盤貼付のもの (②) 溝4の底付近から出土したもので壺の肩の部分に装飾されたもので、大形のものである。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、外面は灰褐色である。

注口土器 (③) 溝4の覆土から出土したもので注口土器の注口の部分である。胎土には細粒砂を含み、色調は褐色を呈している。

特殊土器 (④) 溝4の中から出土したもので、しゃもじ型のもので、その柄の部分である。手捏のもので、先端部は黒斑がある。

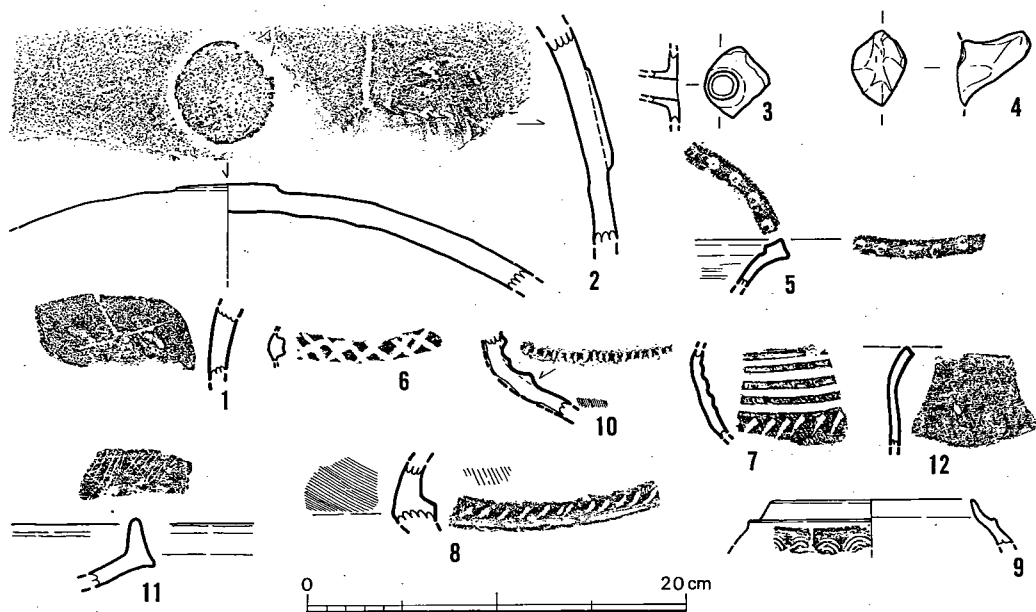
各種の文様 (⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩) 溝4から出土したものである。⑤は中形の壺で、口縁内部には粘土帯と口唇端部に竹管文が施文されている。⑥は壺の帯紐である。⑦は壺の肩部に沈線文と刺突文である。⑧は壺の部分の刺突文である。⑨は鉢で口縁部下部に櫛描文を波状に施している。復原口径10.6cmである。⑩は壺の肩の三角凸に竹管の刻目を有するものである。

ヘラ書きのもの (⑪) 溝5の覆土のもので、先きに説明しておく、口縁端にヘラ書きがあるもの。

初痕がついている土器 (⑫) 溝5の中から出土した小型の甕の破片の胴部についているものである。

溝5 (第43図, 図版18・19)

溝4の途中から分かれたもので、初め溝4は一直線で北側にながれていたものであるが、何らかの理由で、溝5を作って二方向へ水を流したものと見える。全長35m, 幅3m, 深さ70cm,



第 68 図 溝 4・5, 特殊遺物実測図 (1/4)

断面U字型をなしている。溝の中から土器・石器・鏡片が検出された。溝は溝4と同じ時期であるが、表土下面（耕作土）の覆土からは須恵器の杯身の破片が1点出土している。まず覆土から説明を付加したい。

溝5 覆土中出土遺物（第69図，図版32・33）

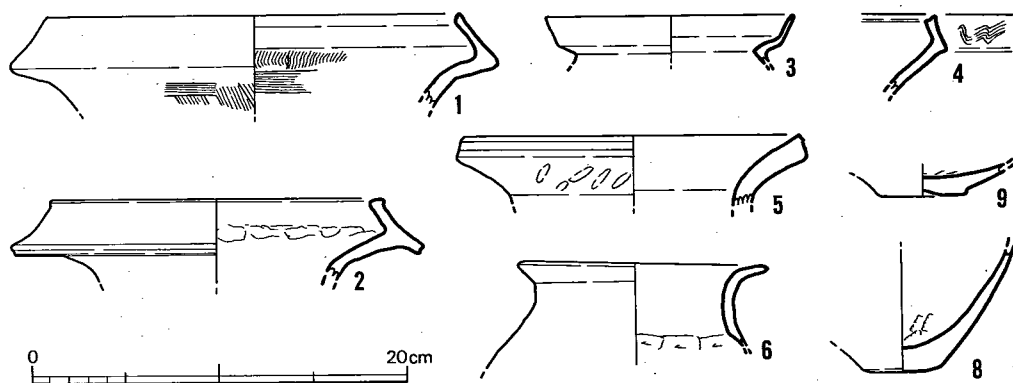
覆土は黒色粘土層である。出土した遺物は土器や土製品・石器類である。

出土土器（第69図）

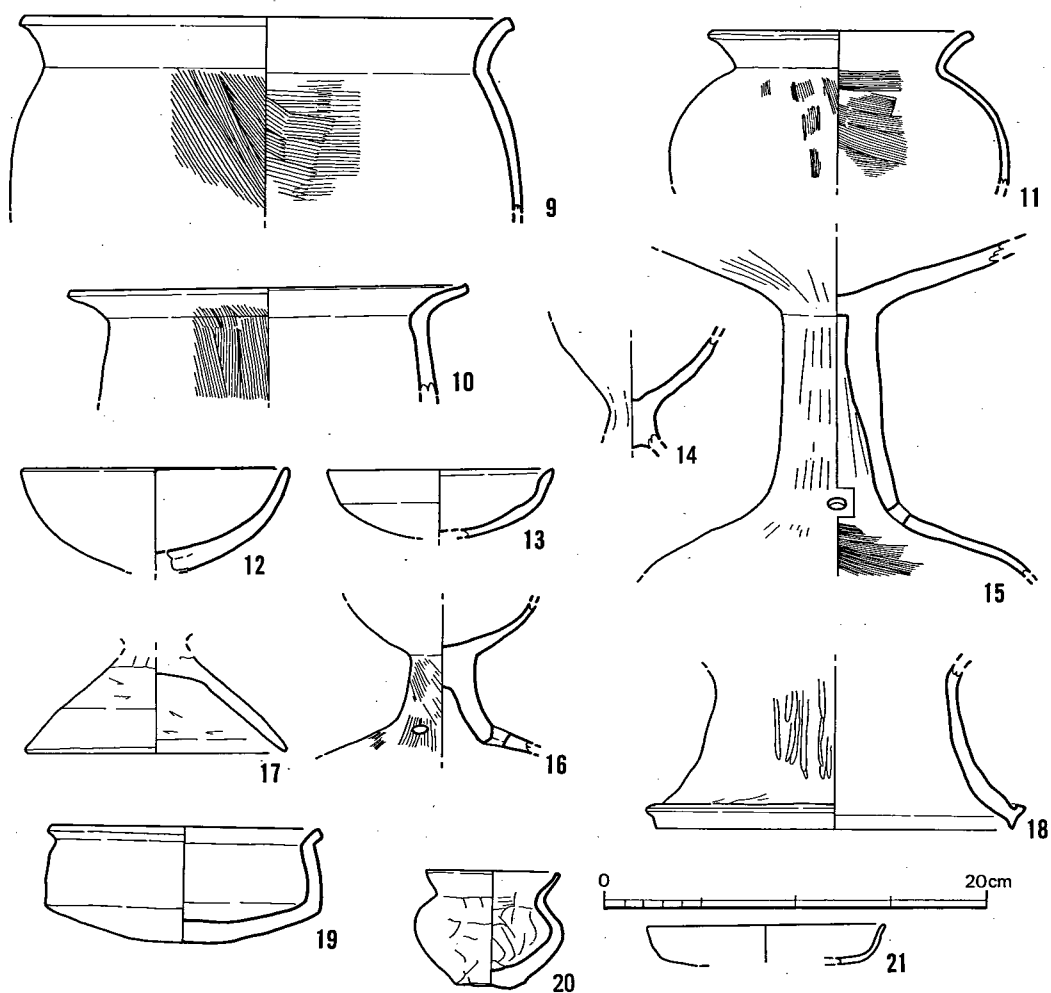
壺（①～⑧）①～④までは複合口縁の破片である。①は大型の壺の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はハケメとヨコナデである。復原口径22.0cm。②は胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で、器面の調整はナデが中心で、復原口径は22cmである。③は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内外面は風化して不明である。山陰系の影響を受けたものである。④は口縁部破片で、複合口縁は内側に傾斜している。外面に波状の櫛描文あり、胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で、器面の調整はナデ仕上げである。⑤は口唇部には一条の浅い沈線をもち、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はヨコナデである。一部にヘラ状工具痕が残っている。⑥は口縁部が外反するもので、器面の調整は内面ヘラケズリで、口縁部から外面まではナデ仕上げである。⑦は底部破片で丸底に近い平底である。内面はヘラケズリ，外面は工具によるナデである。

甕（⑨・⑩・⑪）⑨は大型の甕の口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で内面は黒味を帯びる。器面の調整はハケメとヨコナデである。復原口径は26.2cm。⑩は口縁端部が若干つまみ上げられている。胎土には細粒砂を含み、金雲母片も若干みられる。色調は灰褐色で、器面の調整はハケメとヨコナデである。⑪は口縁部が「く」の字状をもって、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、外面にススが付着して黒味を帯びている。器面の調整はハケメとヨコナデで、復原口縁は13.4cmである。胴部の一部に黒変がある。

高杯（⑫～⑬）⑫・⑬は杯身部で、脚部には⑬の様に裾が長いのがつくものである。⑫は胎



第 69 図 溝 5，覆土中出土遺物実測図（壺）（1/4）



第 70 図 溝 5，覆土中出土遺物実測図（壺）（1/4）

土に細粒砂を含み，色調は黄褐色で，器面の調整は内面ナデで，外面は風化の為不明である。
 ⑬は胎土に細粒砂を含み，色調は黄褐色で，器面の調整は内面はナデ，外面は風化の為不明。
 ⑭は柱状部の破片である。小型のもの。
 ⑮は大型の高杯の柱状部の破片で胎土に細粒砂と角閃石を含み，色調は黄褐色で器面の調整は裾部内面はハケメで，柱状部の内面はナデ，裾部には穿孔が4つで，柱状部はヘラミガキである。
 ⑯は定型化された高杯で裾部に一段，段を有しているもので裾部は広がっている。胎土に細粒砂を含み，色調は黄褐色を呈し器面の調整は内外面風化しているがハケメが一部分残っている。
 ⑰は低脚部の破片で裾部が広がるものである。胎土に細粒砂を含み，色調は灰褐色で，器面の調整はケズリとナデである。

器台(18) 胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整はヘラミガキとナデである。復原底径は18.8cmである。

鉢(19) 胎土に細砂を含み、色調は黄褐色で、外面は黒味を帯びている。底部にはヘラ記号がある。器面の調整はナデ、歪びつの感じがするもので、復原口径は14.15cmで、底径は14.65cmで若干底が広がっている。

手捏(20) ミニチャーの小壺で、胎土には砂を多く含み、色調は黄味がかった黒褐色である。器面の調整は指痕と指ナデである。

杯(21) 身の部分で、胎土に細粒砂を含み、色調は灰青色で、焼成は良好である。器面の調整はナデである。古墳時代終期頃で、型式は須恵Ⅳである。この溝5の廃絶時期をこれで捕えることは疑問である。

土製品(第64図⑤~⑫)

土製円盤(⑤~⑧, ⑩~⑪) 側縁部を磨いたもので、いわゆるメンコと称するものである。重量は10gから20gまでである。

甗(⑫) 底部がハゲタもので、土器製作過程の理解できる破片で、穿孔は片側である。2次的な穿孔ではなく当初からのものである。

石器(第71図, 図版33)

覆土中からは石庖丁・石鏃である。

石庖丁(①・②) ①は刃部の破片である。石質は凝灰岩である。重量は9.7gである。②は基部の破片で、輝緑凝灰岩である。紐通しは両面穿孔である。重量は18.1g。

石鏃(③) 石質は黒曜石で、五角形鏃に抉りを入れたものである。加工は丁寧で、押圧加工である。断面三角形で、重量は1.8g。

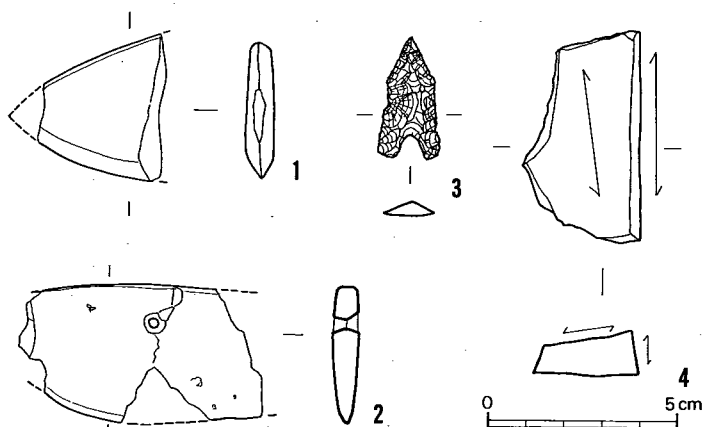
溝底より出土遺物(第71~78図, 図版32)

番号を付して取り上げたもので、遺物には土器・鏡片・土製品・石器等である。

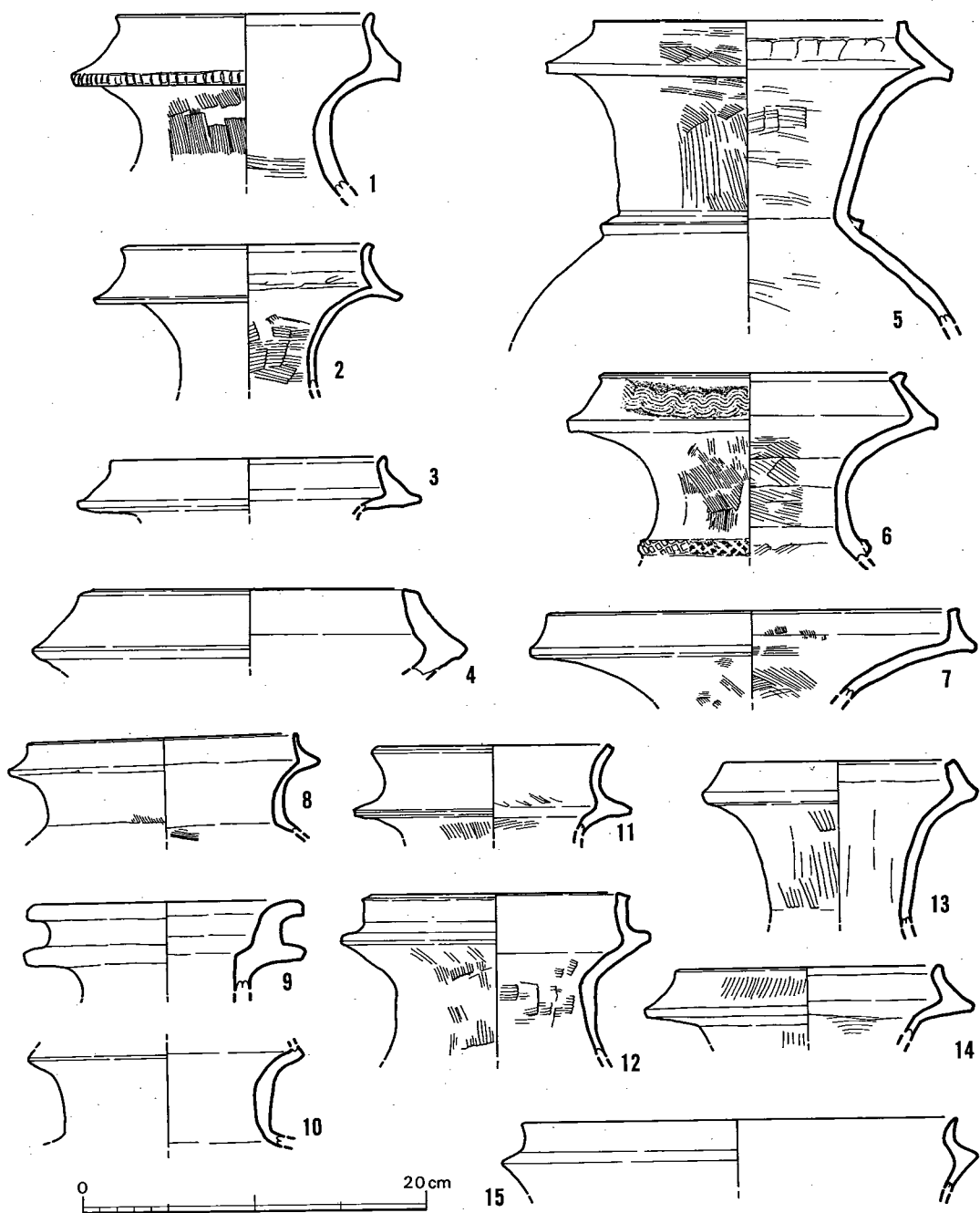
出土土器

(第72~76図, 図版32)

壺(①~③4) ①~⑮は複合口縁の破片である。大型のものと中型のものに分類できる。大型のものは①④⑤⑥⑦⑧⑫⑮。



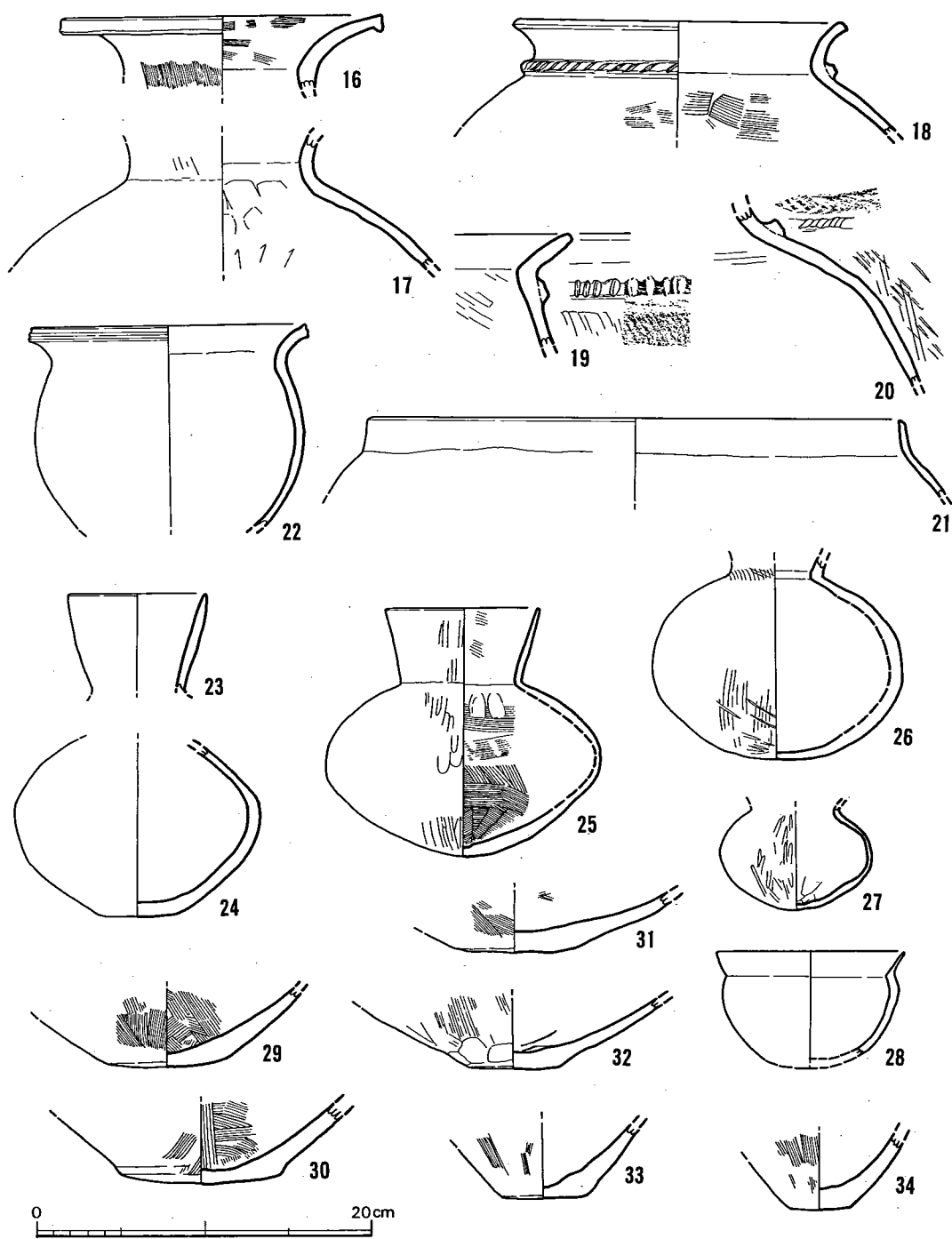
第71図 溝5, 出土遺物実測図(石器)(1/2)



第 72 図 溝 5, 出土遺物実測図 (壺) ① (1/4)

他は中型のものである。①は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で外面は黒味を帯びている。器面の調整はハケメとヨコナデで、複合口縁の端部は外反させ、屈曲部には刻目を施している。

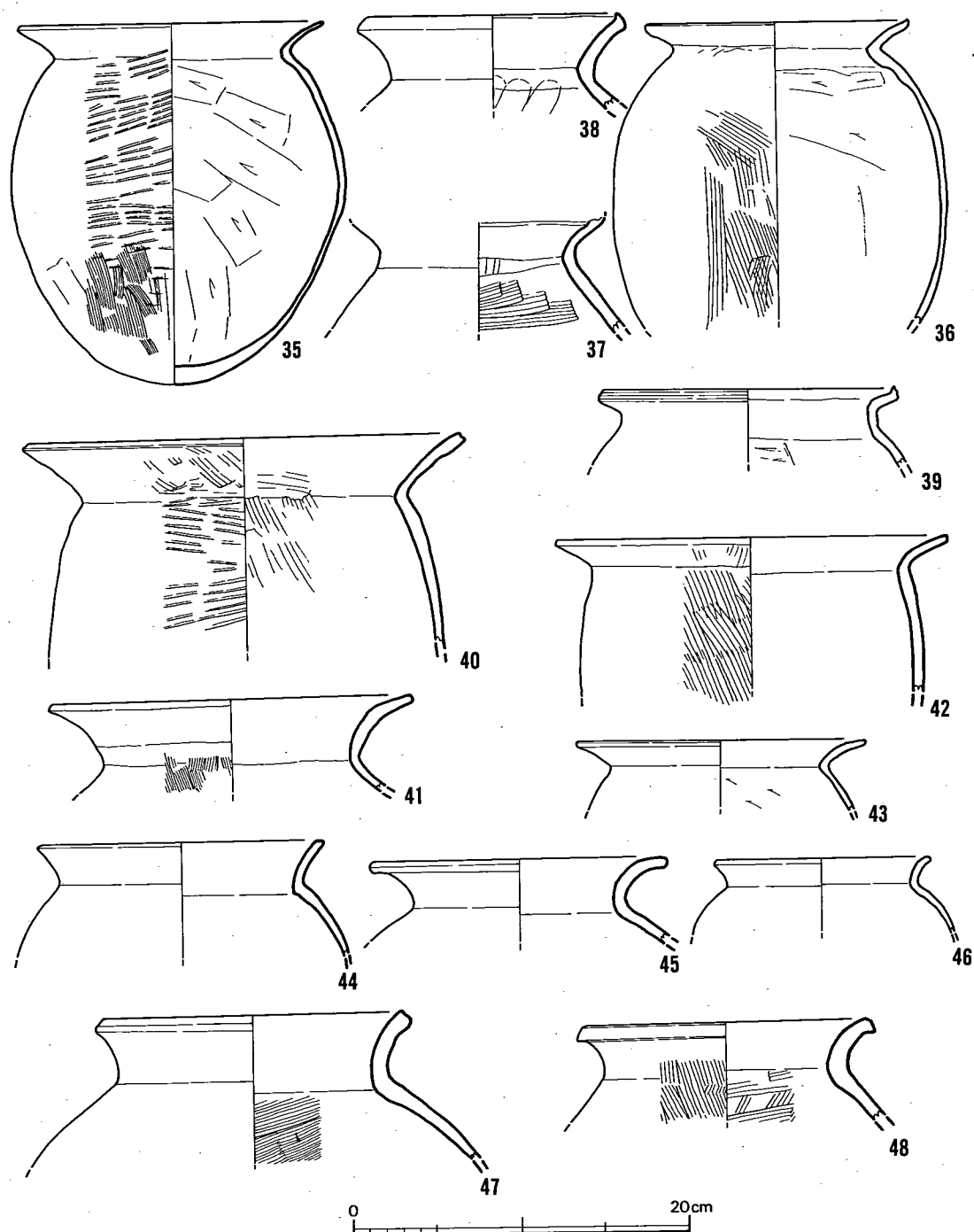
その屈曲部の端部に2孔の竹串にて孔をあけている。②は胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で、器面の調整はハケメとヨコナデである。口縁部は外反している。復原口径は14cm、屈曲部口径は18cmである。③は胎土に細粒砂は多く含み、金雲母と赤褐色粒を若干混入している。口縁部が直立したもので口唇を外反している。④は胎土に細粒砂を多く金雲母及び赤褐色粒を含む、器面の調整はヨコナデである。復原口径18cmである。⑤は胎土に細粒砂を多く金雲母、赤褐色粒を含む、色調は灰黄色で、器面の調整はハケメとヨコナデである。頸部直下に三角凸帯がある。内口径は18.2cmで屈曲部23.5cmである。口唇端部は直立する。⑥は胎土に角閃石を含み、色調は黄褐色で一部黒変している。口唇端部は押えられている。器面の調整は口縁部に波状を櫛描文で、内面はナデとハケメで、頸部には偏平な刻目凸帯を一条めぐらしている。⑦は胎土に角閃石を含み、色調は黄褐色である。器面の調整は内外ハケメである。復原口径は24cmである。⑧は胎土には砂粒を多く含み、色調は黄褐色で外面は黒味を帯びる。器面の調整は風化しているため不明である。復原口径は15.4cmである。⑨は胎土に砂粒を多く含み、金雲母、角閃石を若干含み、色調は黄褐色で、器面の調整はヨコナデである。復原口径は15.4cmである。⑩は細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、器面の調整はナデである。複合口縁部は欠損している。⑪は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はナデとハケメである。復原口径は13.2cmである。⑫は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はヨコナデとハケメである。復原口径は14.4cmである。⑬は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、器面の調整は外面の頸部には粗いハケメで内面はナデである。⑭は胎土に砂粒・金雲母を多く含み、角閃石を少し含んでいる。器面の調整は外面はハケメで、内面も頸部は粗いハケメである。⑮は胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で、器面の調整はナデである。⑯は胎土には細粒砂を含み、色調は灰黄色で、器面の調整はハケメが見える。口唇端部は押えられているため外面側につまみ上げている。⑰は頸部から肩部の破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好、内外面はハケとヘラを使用して調整されている。⑱は口縁部直下に三角凸帯をめぐらし、それを斜めに刻目を入れている。胎土に細粒砂を含み色調は黄褐色で、器面の調整はハケメが見える。復原口径は19cmである。⑲は口縁部破片で、胎土には細粒砂を含み、色調は暗黄褐色である。口縁直下に三角凸帯をもち、刻目が施こされている。器面の調整は内外面粗いハケメである。⑳は肩部の破片で、上部に三角凸帯をもって、胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で外面は黒味を帯びている。内外面粗いハケである。㉑は在地系のもので、口縁部は直立して胎土に細粒砂を含み、色調は黒褐色で、焼成は良好で、器面の調整は内外ナデである。㉒は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で外面にはススが付着しており、口唇端部に二条の沈線を有しているものである。外来系の影響を受けているものである。器面調整はナデが見られるが、外面は風化とススの付着のため不明である。復原口径は16.2cmである。㉓は長頸壺の頸部破片である。㉔は胴部の球体形をなして平底に近い丸底である。胴部最大径は13.7cmである。㉕は胎



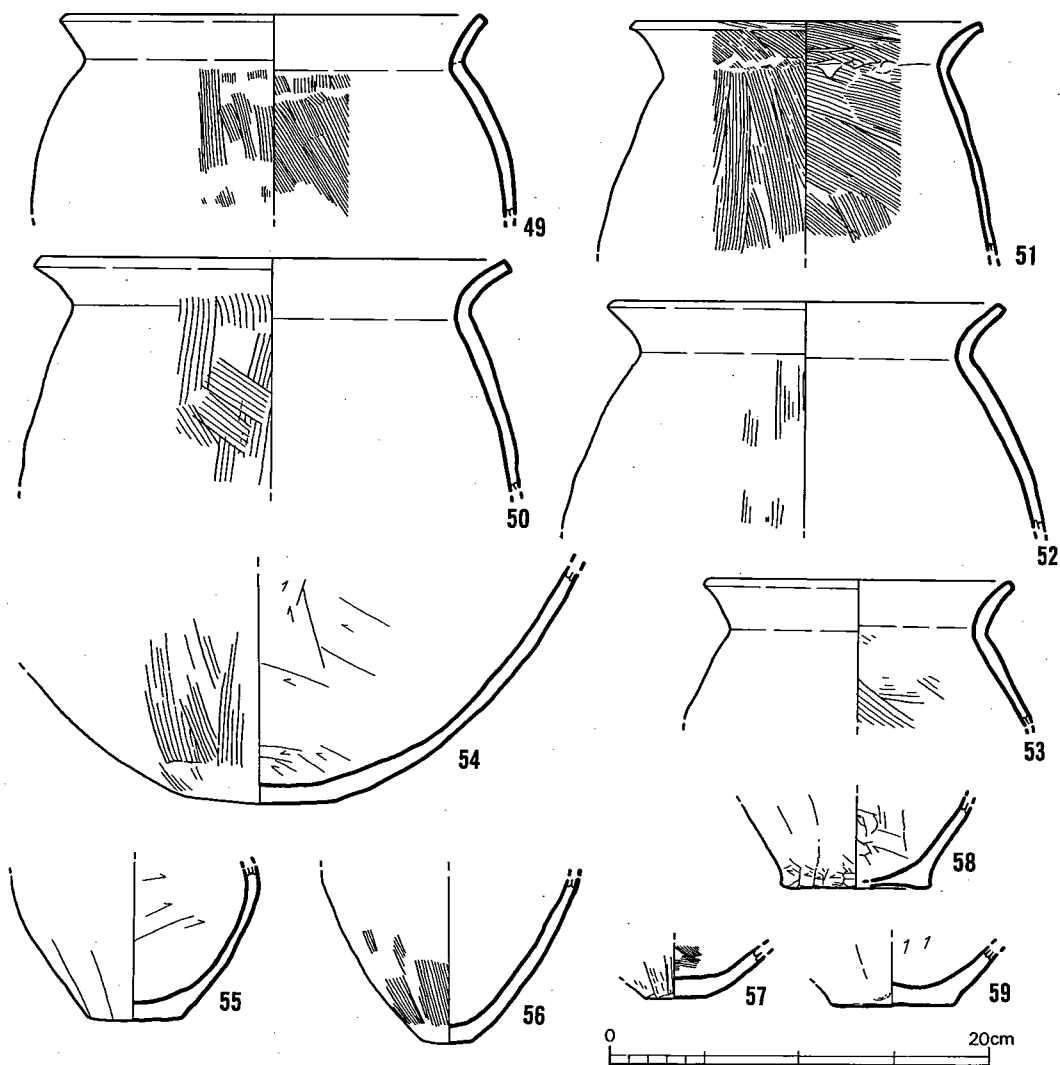
第 73 图 沟 5，出土遗物实测图（壶）②（1/4）

土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は外面はヘラミガキ、内面はハケメである。底部に黒斑がある。②⑥は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で外面は黒味を帯びている。器面の調整は内外面ナデで、胴部下半はハケメ部分にミガキである。胴径最大径は15cmである。②⑦は胎土には細粒砂を含み、小型丸底壺の球体部で、色調は黄褐色で、器面の調整は内面はヨコナデ、外面はミガキである。②⑧は胎土に細粒砂を含み、色調は暗褐色で、外面は灰黒色である。器面の調整はナデで、一部工具のナデであり、底部は黒斑している。②⑨～②⑫は平底に近い円底（凸レンズ状）である。②⑬・②⑭は平底である。器面の調整はハケメとナデにて実施している。ナデにはヘラ状工具を使用している。

甕（③⑤～③⑨）③⑤～③⑦は「く」の字状に外反するもの、③⑤は胎土に細粒砂や角閃石を含み、色調は黄褐色で、底部は2次的に熱を受けて剝離している。器面の調整には、内面はヘラケズリとヨコナデで、外面はタタキ、下半分はハケメでタタキを消している。③⑥は胎土に細粒砂を多く、角閃石を含んでいる。色調は内外とも黄褐色を呈し、器面の調整は外面ハケメ一部にタタキが残っているので、内面ヘラケズリである。畿内の影響を受けたもので③⑤・③⑥は庄内式のものである。③⑦・③⑧・③⑨は口縁端部につまみ上げをもっているものである。③⑧は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面調整はナデである。③⑦も同じ系統のもので、内面の調整はハケメである。③⑨は胎土に細粒砂を含み、色調は内外茶褐色で、器面の調整は内面ヘラケズリで、外面ヨコナデが中心となっている。口唇端部は細い沈線が走っている。④①は胎土に細粒砂を多く含み、角閃石や赤褐色粒をも含む、色調は内外とも灰黄色で、器面の調整は、内面は粗いハケメ、外面はタタキと口縁部も粗いハケメである。復原口径の25.6cmである。④②は胎土に細粒砂を含み、角閃石等を含み、器面の調整は外面ヨコナデで頸部以下ハケメである。④③は胎土に細粒砂を含み、色調は内外黄褐色で、器面の調整は外面ハケメで、内面は風化が著しく不明である。復原口径23.4cmである。④④は胎土に細粒砂や金雲母・赤色粒子を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面ヘラケズリで、外面は風化は著しく調整不明である。④⑤は胎土に細砂粒や角閃石・金雲母片を含み、色調は黄褐色である。復原口径は17.2cmである。④⑥は胎土に細粒砂を含み、色調黄褐色で、器面の調整は風化が著しく内外面とも不明である。④⑦は胎土に細粒砂を含み、色調黄褐色で、器面の調整は風化が著しく不明。④⑧は胎土に細粒砂と赤色粒子や金雲母を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面ハケメで外面はヨコナデで、復原口径18.8cmである。④⑨は胎土に細砂粒・金雲母・赤色粒子を含み、色調は黄褐色で器面の調整は内外ハケを工具として使用している。口唇端が下側につまみ上げられている。④⑨～④⑫は長胴の甕の口縁部破片である。④⑨は胎土に細粒砂と金雲母を含み、色調は黄褐色で、外面に灰黄褐色を呈し、器面の調整はハケメとヨコナデである。復原口径は22.7cm。④⑩は胎土に細粒砂と金雲母・角閃石を含み、外面に茶褐色で内面は灰黄褐色である。器面の調整は外面ハケメで口縁部はヨコナデである。④⑪は胎土に細粒砂を含み、若干角閃石をもち、色調は黄褐色に、外面は黒味を帯びる。器面の



第 74 図 溝 5，出土遺物実測図（甕）①（1/4）

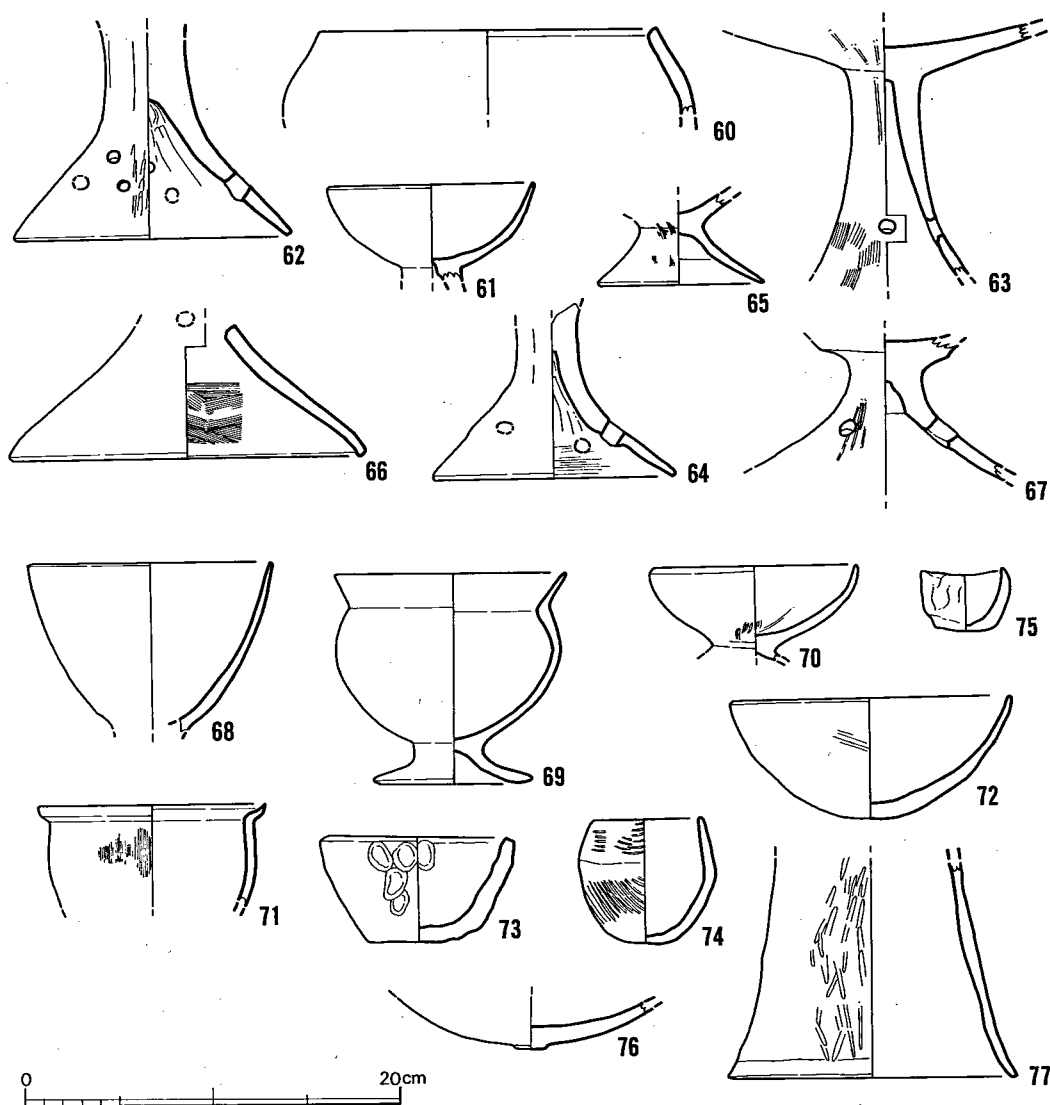


第 75 図 溝 5，出土遺物実測図（甕）②（1/4）

調整はハケメである。②は胎土に細粒砂と赤色粒子を含み，色調は黄褐色で外面は黒味をおびている。器面の調整は外面ハケメで，口縁部から内面はヨコナデである。復原口径は21cmである。③は胎土に細粒砂を含み角閃石と赤色粒子を含む，色調は黄褐色で，器面の調整はハケメとヨコナデである，外面は内外共に風化が著しい。④～⑨は底部破片で，丸底平底等がみられる。④は丸底で，胎土に細粒砂を含み，色調は灰黄色で，器面の調整は内面ヘラケズリで，外面はハケメである。⑤は平底で，胎土に細粒砂を含み，色調は黄褐色で，器面の調整はヘラケズリである。⑥も丸味を帯びた平底である。胎土に細粒砂を含み，色調は茶褐色で，器面の調整はハケの後にナデ仕上げで，内面はナデである。⑦は丸底に近い平底である。胎土に細粒砂

を含み、色調は黄褐色である。器面の調整はハケメが主体である。⑤⑧・⑤⑨は平底である。胎土に細粒砂を含み、色調は前者が黄褐色で、後者が茶褐色で、器面の調整はヘラケズリと工具によるナデである。

高杯（⑥⑩～⑥⑪）⑥⑩・⑥⑪は杯身の破片である。⑥⑩は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色をなし、器面の調整は内外とも風化著しく調整不明である復原口径は17.9cm。⑥⑪は小型の高杯である。胎土に細粒砂を含み、角閃石をも混入する。色調は灰褐色である。復原口径は10.8cmである。⑥⑫～⑥⑬は脚部の破片である。⑥⑫は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はミガキ



第 76 図 溝 5，出土遺物実測図（高杯・鉢・手捏・器台他）（1/4）

が中心で柱状内面はナデである。上下に穿孔あり、孔は8個である。③は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はミガキが中心で柱状内面はナデである。穿孔がある4個か。④は中型の高杯の柱状部で、胎土に細粒砂が多く、色調が黄褐色で、器面の調整は柱状内面は粗いハケメとナデである。⑤は小型の高杯の脚部である胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は柱状内面はケズリで他は不明。⑥・⑦は大きく裾が広がるもので、⑥は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内面ハケメで、外面は風化のため不明、脚部の上部に穿孔が2孔である。⑦は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はナデで内面もナデである。穿孔は3個である。

鉢 (⑧~⑭) ⑧は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、器面の調整は内外面ナデで、深鉢になるものである。⑨・⑩は台付鉢で、胎土に砂粒を多く含み、色調は前者が黄褐色、後者は茶褐色で、器面の調整は両者とも磨滅して不明である。⑪は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はハケメとヨコナデである。⑫は胎土に細粒砂を多く含み、色調は赤褐色で、底部は黒化している。器面の調整は一部にハケメが残るのみである。復原口径は14.6cm。⑬は手捏みみたいな歪なもので、胎土に粗い砂を含み、色調は黄褐色に黒斑あり、器面の調整はナデである。⑭は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で下半に黒斑あり、器面の調整は内面ヨコ方向ナデ、外面はタタキの後にハケで消している。丁寧に造られたものである。

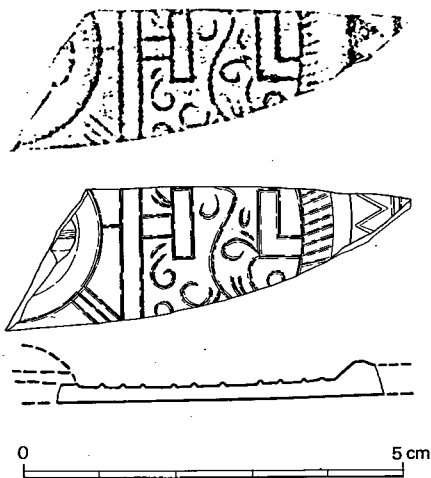
手捏 (⑮) 平底のもので口径が5cmのものである。指痕とナデで調整し、色調は黄褐色である。

特殊な土器 (⑯) 丸底の底部に円盤が貼付いたものである。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、器面の調整は丁寧にヘラでナデているもので、黒斑があるもの。珍しい土器である。

器台 (⑰) 下半部のもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色で、器面の調整は外面をミガキで、内面をナデで、一部に丹塗が残っている。器面全体は磨滅気味である。

青銅器 (第77図, 冠首図版, 図版33)

鏡 (第77図) 溝5の溝底から検出された方格規矩鏡の良質の破片で、残長(斜行長)5.5cm前後で、幅が最大1.8cm、厚さが外区で4mmで薄い部分で2mmである。鏡の色調は鏡背で錆かかった緑黄色で、鏡面は緑かかった白銅色であった。側縁部は研磨されて、他面は割れた状態で、錆の状態から見ると、割口の研磨された面は鏡背と同じ錆で、割れた面は錆の状態が相異なるため、後日に割ったものと思われる。鏡面は内側に鈕の一部と鈕通しの一部が残し、それに方格を巡らし、内区



第77図 溝5, 出土遺物実測図(鏡)(実大)

にT・Lその周辺に唐草文がまいて、外区斜行櫛羽文帯、縁の一部には鋸齒文と一条線が見られるもので、縁の部分の大半が欠けている。鏡は舶載鏡で後漢の後半のもので、方格規矩鏡の簡略式のものである。鏡面径は推定で13.6cm前後で、重量14.3g。

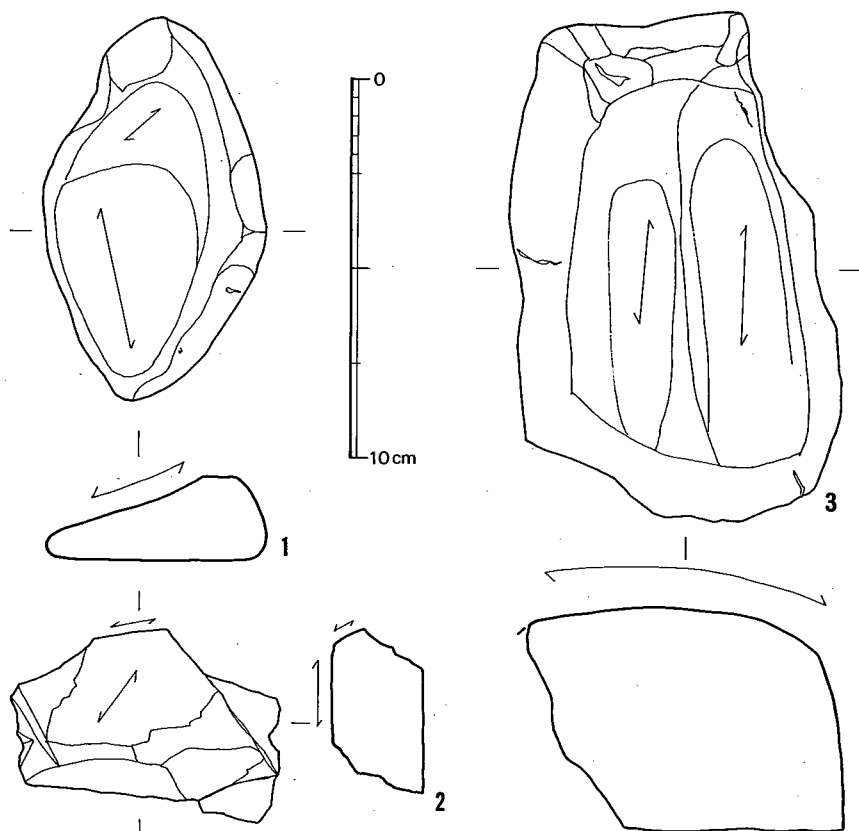
土製品 (第64図, 図版33)

土製円盤 (第64図—⑨), 側縁部を磨かれたもので、他の同種のものより厚手である。重量18g。色調は黄褐色で、壺の破片を加工し使用している。

石器 (第78図, 図版34)

砥石 (第71図—④), 石質は硬質砂岩で、欠損品で、側面と上面を砥石として使用しているもので、全体を使用していたものの下部と側面・小口部が欠失したものである。良く使用されている。重量は21.6gを計測する。

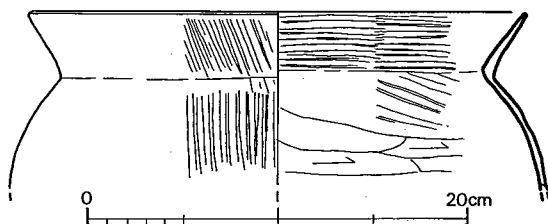
作業台 (第78図①②③) ①は溝4の底より出土したもので、上面を砥いでいる。石質は硬質砂岩である。②は溝5の底辺より出土したもので上面及び側面を砥いでいるもとで、片石製でよく使用されている。③も作業台として使用されたもので、石質は硬質砂岩で、上面を砥いでおり、他は使用されていない。



第78図 溝4・5, 出土遺物実測図(石器) (1/2)

溝 6 (第79図, 図版18)

溝1から分離したもので、長さ14m、幅0.5m深さ30mで断面U字形をなすものである。溝内からの出土遺物は若干であった。



第 79 図 溝 6, 出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物 (第79図)

甕 (第79図) 胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色で黒斑あり、器面の調整は口縁内面はハケメで以下ヘラケズリで、外面は縦位のハケメである。「く」の字状の口縁で内面に稜がはっきりしている。

歴史時代の溝 (第43図)

排水溝が6本出土している。a～fまでである。細い溝で、農道に沿って西から東へ流れている。溝eから土鍾が1点出土している。埋土は黒色土で火山灰質のものでパサパサした感じである。

溝 a (第43図)

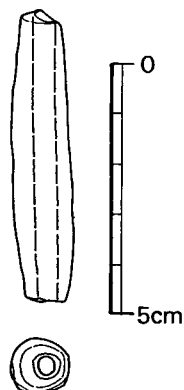
農道に沿って検出されたもので、長さ18m、幅50cmで、深さは20cmで断面はU字形である。

溝 b (第43図)

農道に沿って全長50mで、幅50cm、断面はU字形である。途中とだえているが、西から東へ流れている。

溝 c (第43図)

農道に沿って、全長25mで、幅80cm、深さ20～30cm断面はU字形である。東に行くほど深くなる。埋土から土鍾が1点出土している。



出土遺物 (第80図)

土鍾 (第80図) 長さ5.8cmで、幅0.9cmで、孔径0.4cmである。漁具として使用されたもので、網の鍾である。重量7.9g。

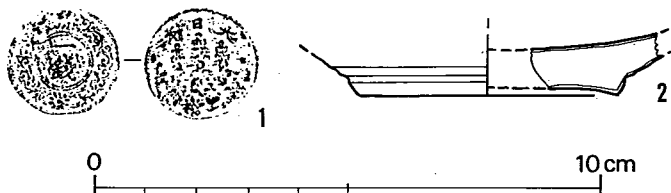
第80図 溝e, 出土遺物実測図(2/3)

溝 d (第43図)

過去に水田があったものの排水溝で、ほぼ田圃の形をなしている。

溝 e (第43図)

過去に水田があったものの排水溝で、平面が方形をなしている。溝dに切られている。



第 81 図 表採資料実測図 (2/3)

溝 f (第43図)

過去に水田を耕作した排水溝で、地番境いである。全長 7 m, 幅 30 cm で深さ 20 cm, 断面が U 字形をなしている。

耕作土出土遺物 (第81図)

耕作土中から出土したものに、一銭銅貨とキセルの雁首を磁器の破片がみられた。ここでは一銭銅貨と磁器を上げて説明する。

出土遺物 (第81図)

銅貨 (①) 一銭硬貨で、紀年銘が読めない。大正 8 年以後の小型のものである。

磁器 (②) 底部破片で、胎土に細粒砂を若干含み、色調は灰白色で、釉は草色釉で、底部は碁司底を呈し、畳付部分に目土が付着している。見込みにも、同様な目土をもっている。15 世紀から 16 世紀にかけての高麗青磁片である。

若干のまとめ

北部九州における古墳出現期の研究は、近年一步一步前進している。畿内では、弥生時代と古墳時代の境を、庄内式という型式をあてている。当地では西新式土器それに該当するもので、この期の研究は森貞次郎博士に位置付けられている。1955 年『日本考古学講座 4』に弥生土器を九分類し、第七～九式を後期とし、その後期前半を「高三瀧式」、第八式を「下大隈式」として後期中頃に比定している。第九式に充てた「雑餉隈式」は、杉原荘介氏の「水巻町式」につづく型式を提唱したもので、後に資料的に不十分との理由で撤回された経緯がある。それに代わる型式として「西新式」が、後期の最も新しい段階のものであった。さらに同氏は、1966 年『日本の考古学Ⅲ—弥生時代—』、九州の中で、弥生後期を「高三瀧」・「下大隈」・「西新」に 3 区分し、「弥生の下隈を西新时期より下げることはできない」とした。これによって北部九州の弥生後期終末の概念として定着するまでにいたった。これをお浸ししてみると「高三瀧式」は壺形土器においては、朝顔形口縁部から内側に反転しつつ外湾する二重口縁が、中期後半の袋状口縁の細頸壺式ともっとも近い関係にある。「下大隈式」は二重口縁が内側に反転しつつ湾曲するもので、底部は平底をなす。「西新式」は器面の整形にあたってつけられた横あるいは斜めの敲き条痕が消されずに残存するものがある。短く外湾する口頸部の口縁端部及び頸部の突帯にあらく大きな斜めあるいは斜格子の刻目文を入れることは壺形・甕形に共通する点であり、底部はほとんど丸底になる。」と言われる。では、当該遺跡のⅠ区溝やⅡ区の溝 1～5 から出土した遺物はこの西新式に該当するものが大半で、それ以外に外来系の土器から考えると、古墳時代初頭にはいるものとみられるものが多く見られる。弥生時代と古墳時代の線引き線上にあるもので、所謂津留遺跡の溝出土の遺物は邪馬台国時代の土器群と見てよいであろう。

IV. お わ り に

以上が今回の発掘調査を実施した津留遺跡の内容である。この調査の成果と今後の課題を記して、おわりとしたい。

(1) 鏡片について

行橋平野の古鏡については、長嶺正秀氏^(註1)が紹介されている。それ以後出土したものを入れてまとめてみると、次の様になってくる。

1 京都郡勝山町上所田出土鏡二面^(註2)

箱式石棺墓・石蓋土墳墓群などからなる遺跡で、そのうちの石蓋土墳墓から長宜子孫内行花文鏡の鏡片と三角縁鳥文鏡の鏡片を出土した。鏡の直径を復原すると18.5cm前後で、大形舶載鏡片であり、鈕を載せる四葉座の間には「長」「孫」の二文字が見られる。内区には内行花文八花文を配し、花文の間には「W」・「W」の二種類の図形を抜き、外区には2重の斜行櫛歯文帯を有し櫛歯文帯の間は渦卷文で区画される雪雷文帯で画されている。外区の外側は素文の平縁で終るものと思われ、鋳あがりは良好である。

後者も石蓋土墳墓の内から出土したもので、舶載のもので、鏡径は径8.2cmをはかり、銅質は良好であり、表面は漆黒色で光沢がある。鏡は全体の $\frac{2}{3}$ ほどの2片からなるもので、鈕はなく内区に乳を持ち、複雑な文様と鳥文からなる。外区には直行する櫛歯文があり、三角の鋸歯文帯を持って三角縁へと続いている。

2. 行橋市稲童石並出土鏡^(註3)

石並前方後円墳に近接している低い墳丘を伴う箱式石棺墓内に、舶載の内行花文鏡が副葬されていた。鏡は鈕を含む2片からなり、全体では内区の $\frac{1}{2}$ ほどを含む鏡片で、折損部には磨滅がみられる。四葉座鈕であり、四葉座の間には「長」・「宜」・「○」・「孫」の3文字が見られており、長宜子孫銘を有した事が知られる。四葉座の外側には円圏で鈕座と画された内行花文の八花文帯をめぐらし、花文の間に○の円丈が配されている。内行花文の外側には、直行櫛歯文帯の一部が残されて、その外側は平行文帯と思われる。外区の外側は素文平縁に終るものと考えられ、鋳のあがりは良好である。直径は18cm前後の大形鏡である。

3. 行橋市前田山遺跡出土鏡二面^(註4)

行橋平野のほぼ中央、勝山町から連なる低丘陵上に位置する遺跡である。遺跡は大きく2つの丘陵に分けられ、東側第Ⅰ地区丘陵上には、弥生時代前期末～古墳時代初頭にかけての住居跡・袋状竈穴（貯蔵穴）などからなる生活遺構がある。鏡は東側丘陵第Ⅰ地区から二面出土したもので、石蓋土墳墓から副葬の小形仿製鏡と8号箱式石棺墓から、素環頭刀事ともに、蝙蝠



第 82 図 行橋平野鏡出土分布図 (1/50,000)

- | | |
|----------------|-------------------------|
| 1. 京都郡勝山町上所田遺跡 | 6. 京都郡豊津町上坂遺跡 |
| 2. 行橋市稲童石並遺跡 | 7. 行橋市稗田・吉田神社境内遺跡 |
| 3. 行橋市前田山遺跡 | 8. 京都郡犀川町本庄・(通称大池の堤) 遺跡 |
| 4. 京都郡犀川町山鹿遺跡 | 9. 京都郡豊津町徳永川の上遺跡 |
| 5. 京都郡犀川町続命院遺跡 | |

座長宜子君内行花文鏡が検出される。

前者の小形仿製鏡は、鏡面径は7.22cmをはかり鏡面は、黒灰色で錆化著しい。鈕の外にはS字文様を四ヶ所持ち、その外側には内行花文を九花文帯めぐらしている。花文帯の外側には直行櫛歯文帯を持ち、外側は平縁へと連続している。なお、鈕の部分には布が付着して残っていた。

後者は一部が欠けているがほぼ完形品であり、全体に手づれがある。鏡面は白銅質で、光沢がある。裏面は漆黒色で、全体に灰緑色ないし黒緑色の浮錆がある。鈕の外側には蝙蝠座を四ヶ所に呈し、座の間に「長」・「宜」・「子」・「君」の4文字が見られる。内区には内行花文帯がめぐらされており、外区は雲雷文及び櫛歯文はないもので、外側は平縁である。直径は9.85cm。

4. 京都府犀川町山鹿出土鏡 ^(註5) 二面

昭和27年に土取のために、石蓋土墳墓が2基発見され、その中の一基から出土した小形仿製鏡である。鏡の径が7.6cmをはかり、鈕を含む内区には一種の変形蕨手文を有し、さらに内行花文帯をめぐらしている。外区には斜行櫛歯文を持ち外区の外側は平行の素縁で行っている。

引きつづき行なわれた土取で石室1基、石蓋土墳墓4基、箱式石棺墓2基が発見された。この中の2号箱式石棺墓内から、成人骨と共に舶載の連弧文変形双獣鏡が検出された。鏡は鈕を含む約 $\frac{1}{2}$ の鏡片で、折損部は磨滅が見られる。鏡の復原径は16.6cmの大形鏡である。鈕は大きく扁平で、内区の文様は鈕座両端の3本の平行帯線によって二分され、雲文化した獣形二軀を施回させ、外区は2条の陽刻円圏で区別され、周囲には一種の渦文毛狀文があり、さらに十六花文の内行花文帯となっている。外区の外側は周縁4mmの三角縁である。

5. 京都府犀川町続命院出土鏡 ^(註7)

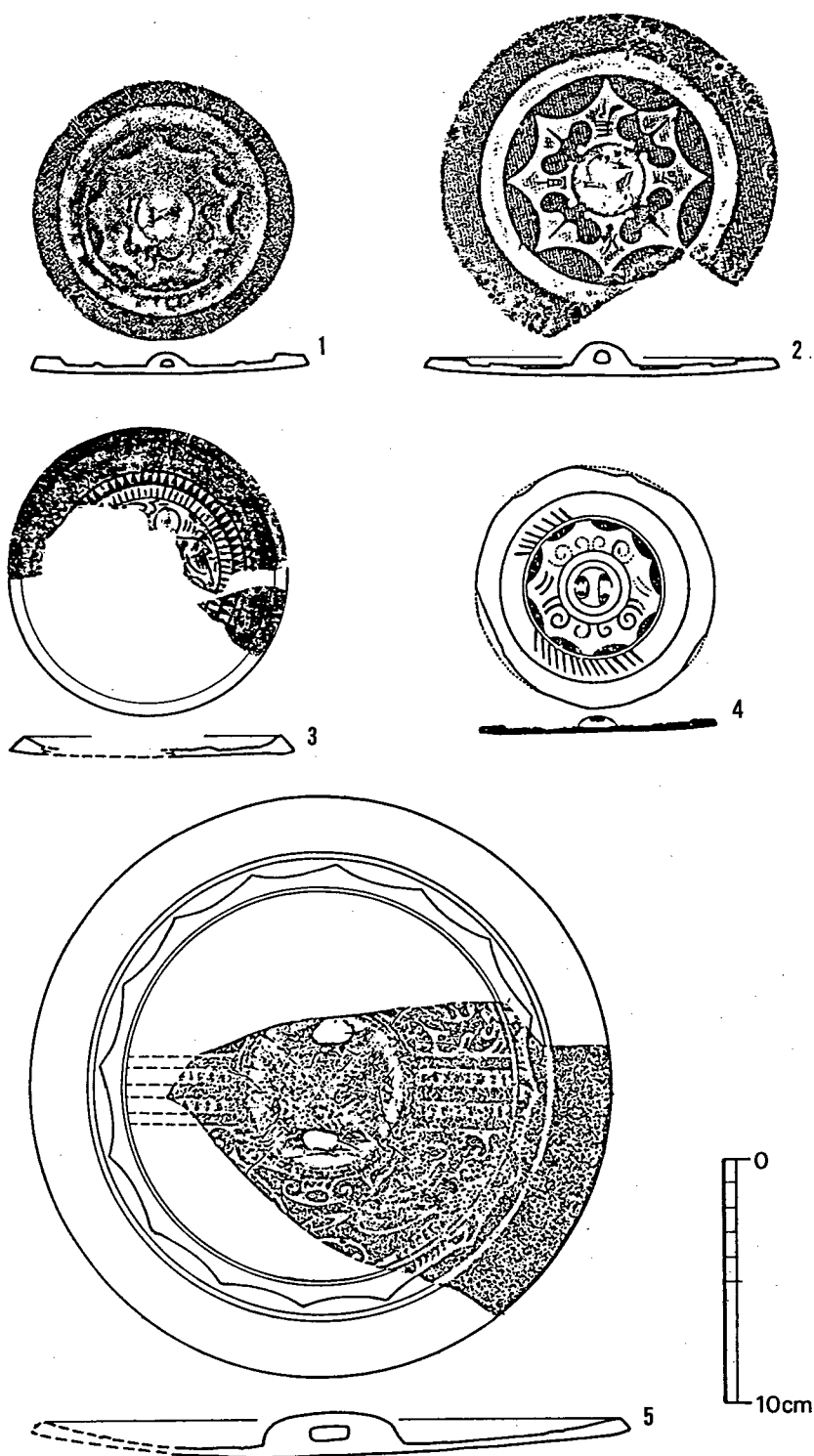
豊津町から犀川町にかけて発達する洪積台地の先端部で、長さ約1m前後の箱式石棺墓から出土したもので、銅質は全体に悪く、表面は灰白色ないし灰青色で、表裏とも鏡面は錆化がかなり進んでいるが、鏡面の残存状態は比較的良好。鏡は全体に若干変形している。鈕そして内区に内行花文帯六花文があり、その外側に斜行櫛歯文帯、その外側に銘帯があって、そして斜行櫛歯文帯、3mmほどの平縁で、直径が6.0cmを計測する。その祖形は連弧文日光鏡である。銘帯の部分の一字ずつの字間に渦文と菱形文を挿入されているもので、その渦文が顕著にみえる。

6. 京都府豊津町上坂出土鏡 ^(註8)

昭和54年6月、箱式石棺墓から鉄鏃9本と共に舶載の夔鳳鏡片出土している。鏡は直径16cm前後に復原される。外縁の約4cm×5cmの鏡片で、鏡質は良好で、表面は漆黒色で光沢があり、折損部には磨滅が見られる。鏡の外縁部には連弧文が見られ、割付けからは16花文を配したものと考えられ、図文は平彫である。花文のカーブは強く、花文には禽獣文を入れ平素縁で終っている。

7. 行橋市稗田・吉田神社境内出土鏡 ^(註9)

吉田神社境内の箱式石棺墓内から前漢鏡と思われる大形舶載鏡一面を出土している。



第 83 図 行橋平野出土鏡式一覽① (1/3)

(註10)

8. 京都郡犀川町本庄（通称大池の堤）出土鏡

箱式石棺から出土したもので、鏡式は弥生の小形仿製鏡で、直径が7.4cm、鈕から図文がきてその外側に内行花文7花文を配し、それをとりまく様に斜行櫛羽文、そして平縁となっている。

(註11)

9. 京都郡豊津町徳永川の上出土鏡

遺跡は祓川の河川段丘状にあって、現場説明会要旨によると、遺跡は南側で6～7世紀の群集墳と弥生集落、北側に弥生終末～古墳初期の墳墓群、墳丘墓群を確認している。墳丘墓は弥生後期後半（3世紀初）から造られはじめ、古墳初期（3世紀後半）まで続きその変遷が一望できる。また弥生後期の墳丘墓は円形・楕円形・隅丸方形と多彩であるが、古墳初期になると長方形となる。棺数は85基を調査し、副葬品を保有する率が高い。とくに石棺の大半が荒されているにもかかわらず、中形鏡を含む6面の鏡が副葬されていたことの意義は大きい。鏡式は龍虎鏡・連弧文鏡・方格規矩鏡片・画像鏡片・不明鏡片・小形仿製鏡片が検出されている。また玉類・鉄器類や供献土器多数が出土しているという記事であった。

現在整理中であり、正式な報告がまたれる遺跡である。

10. 行橋市津留遺跡出土鏡（本遺跡）

Ⅱ区の溝5の底辺より出土した方格規矩鏡片で、復原直径は13cm前後で、折損分を丸く磨き上げている。鋳の上がりは良好で、舶載品で、後漢後半のものと考えられる。時期は弥生終末から古墳時代初頭である。

以上が現在まで判明している行橋平野での古鏡である。10遺跡18面で、一番出土している川の上遺跡である。その多くの鏡は墳丘墓から出土しているもので、当時の共同体内部で、鏡が副葬される者と、そうでない者の差が出ている。

また津留遺跡の鏡片みたいに溝の中より出土したのは何を意味しているのか興味深い例である。副葬される鏡、廃棄される鏡、それはいったい何であったのか、問題となろう。

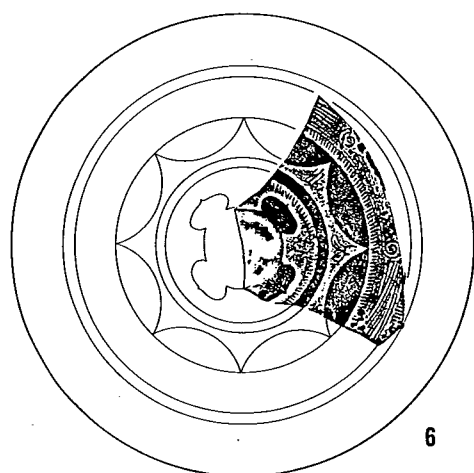
10遺跡18例では、墓に副葬された例が大半で、津留遺跡の出土例は異なったものである。また折損した側縁部を研磨していることも一つの目安となってくる。9遺跡中4番の犀川町山鹿出土鏡の一面の連弧文変形双獣鏡片と6番の豊津町上坂出土鏡の夔鳳鏡、2番行橋市稲童石並出土鏡の内行花文鏡がそれである。なお豊津町の川の上遺跡の分は詳細不明、報告を待ちたい。

(註12)

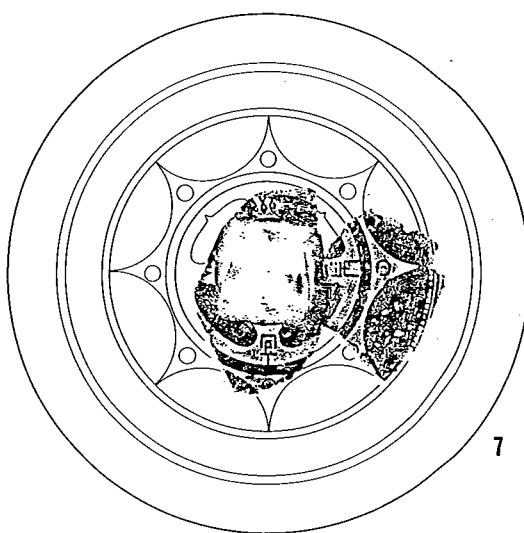
高倉洋彰氏は鏡片副葬については、「破片とはいえいずれも完鏡と同様に一個の鏡として使用されている」とし、「弥生時代小形仿製鏡」と一致した性格を有していると考え。そのことから、「北九州の地域社会内部における首長層の権威付け」に利用されたとしている。

(註13)

それ以前に小田富士雄氏は4の犀川町山鹿の例で、鏡片に磨滅があることを指摘している。その後も、多数の報告書において類例を増加させ資料を紹介されている。鏡介の意義は、弥生



6



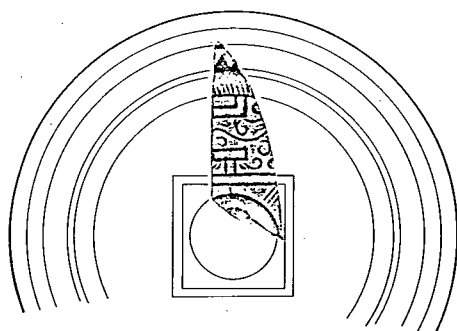
7



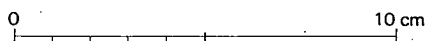
8



9



10



第 84 図 行橋平野出土鏡式一覽② (1/2)

時代後期に小型仿製鏡が出現することと関連して「後漢鏡を入手しがたい所では、仿製鏡や舶載鏡片、細形銅剣片などの所有が重要な意義をもったのであろう。また、墓への副葬のほかに、住居址からの出土例や単独出土例もあり、祭祀具としての意義も考えられる」としている。^(註14)^(註15)^(註16)^(註17)^(註18)^(註19)
その他にも、永峰光一氏・瀬川芳則氏・小林行雄氏・賀川光夫氏・三好保治氏・正岡睦夫氏・高橋徹氏等の論究があるが、各氏とも年代的には弥生時代後期から古墳時代の中頃まで行なわれたことが明らかで、正岡氏は「弥生時代の副葬された鏡片は割れ目を加工しているが、穿孔はされていない。これに対し、若干、時代の下降する方形台状墓・古墳等から出土するものには1～2個の穿孔がみられるものが多い。」と述べて、高倉氏の弥生時代の再加工を行なった鏡片で、^(註20)^(註21)「旧壙棺墓地域から周辺地域の首長層へ配布される舶載鏡の絶対数の不足を補う目的をもって」いるという見解に対し、疑問をはさんでいる。また「鏡片が多くの場合、後漢鏡であり、長期間伝世したことも推定される。大型の鏡と違って、頻繁に使用されたのではないかと考えられている。このことから首長層の者ではなく、周辺に位置する人物と推定し、首長が行なう祭祀と異り、弥生時代以来行なわれてきた呪術的な分野にたずさわっていたと考えることができないであろうか」と論述し、また穿孔ある鏡片を垂飾品」としている。「集落址からも穿孔した鏡片が出土し、鏡片を用いる儀式は集落内においても行なわれていたものであろう」と推定している。正岡氏の考えを支持したい。

前述した行橋平野から出土した鏡片の例はほぼ全て、墓地からの例で、一般的に鏡片の副葬のみられる墓は、いずれも前期古墳か、それに先行するもので、後期古墳から出土した例は確認されていない。古いものは共同墓地内の箱式石棺・土墳墓・石蓋土墳墓などからの出土であって、共同墓地が継承している年代は弥生後期から古墳時代前期にわたっているものが多い。

しかしながら、鏡片を出土した墓だけが他の墓と著しく異っているということは見られない。^(註23)

この例は、9の豊津町徳永川の上遺跡においてもいえることで、新聞発表等から見ると、13基の墳丘墓と鏡の出土状態が、一つの墳丘墓に1面という様に考えられ、川の上遺跡の墳丘墓が首長階級のものではなく、共同体構成員の家族的集団の長（すなわち家父長クラス）であることが考えられるわけで、首長的なものからより小グループに分離され、より家族的集団（血縁集団）の墓域として捕えた方が妥当ではないだろうか。詳細報告書が刊行されない前段階で、先走りの感があるが、川の上遺跡を見て考えたことを若干書いてみた。

このことから、弥生終末期から古墳初期の行橋平野周辺の集落が、集落の構成員の単位が家族的集団の集まりで、その単位が増えて、地縁的な共同体と組織化され、その構成員が1つの家族的集団となっているもので、1つ墳丘墓が1つ家族的集団の墓地と考えてはどうであろうか、これらの集落と集落が組織化進んだものが国と捕えることができ、後日、高塚を築造するもの、いわゆる前方後円墳の時期へと推移していったと考えたい。

あまり蛇足めいたことを書いたが、では津留遺跡の鏡片の場合はⅡ区の溝5の底から出土したもので、他の出土遺物の中にミニチュア土器、手捏土器等もみられる。鏡という祭祀用具等をからませると、農業に関係する水辺の祭祀として意義付けたいものである。

今後も、この時期で溝の中から出土する鏡片の類例が増加することを願ってやまない。^(註24)

(2) 土器について

豊前地方の弥生後期から古墳時代初頭の研究は、その端緒である。すなわち行橋 B. P、椎田 B. P、豊前 B. P の発掘調査によって、その資料の蓄積によってなされるだろう。現在、^(註25) 行橋平野を中心としたこの期の編年表は、下稗田遺跡の調査で、弥生後期中頃～古墳時代初頭までを骨格のみⅠ～Ⅳ期まで示めされている。

これは、^(註26) 森編年を基礎にして組まれたものでⅠ期を後期中頃（高三瀨）、Ⅱ期を後期後半（下大隈）Ⅲ期を後期終末（西新）、Ⅳ期を後期終末から古墳時代初頭の編年骨組みであらわしている。

本遺跡は、Ⅰ区溝1は歴史時代の中世期の所産で、Ⅰ区溝2、Ⅱ区の溝1～溝6までは、ほぼ弥生終末期から古墳時代初頭のものである。Ⅱ区住居跡も弥生終末期で、未製品の鉄器を伴っている。

Ⅰ区溝2、Ⅱ区溝1～溝6の出土遺物は下稗田の編年表では下稗田後Ⅲ期・Ⅳ期を中心としたものにあてはまる。^(註27) 柳田康雄氏の編年観では後期5式と土師器Ⅰ式を中心としたもので、井上裕弘氏の弥生後期後葉3式と古墳前期1式に位置するもので、この期の土器が大半であり、^(註28) 基本資料になると考えられる。

Ⅰ区溝2を上層と下層と分類したのは、溝2が掘り直されたものによってである。時期差としてはあまり出ていない様に見える。

今回は一応資料の提示にとどめ、以後の資料増加を待って、行橋平野を中心とする編年図を作製したいと考える。これを今後の目標として精進する。

註

註1 長嶺正秀 「豊前国における古鏡について」『亀田南遺跡』勝山町文化財調査報告書 第1集 1981. これには、主に弥生時代の漢式鏡・小形仿製鏡を中心にまとめられている。

註2 定村實二・渡辺正気、昭和33年西日本史学会秋季大会の発表要旨の中で、『九州考古学』7・8, 1959.

註3 定村實二 1969報告

註4 長嶺正秀ほか『前田山遺跡概報1』前田山遺跡調査会編1977

行橋市教育委員会編『前田山遺跡』1989

註5 鏡山 猛「石蓋土壇に関する覚書」『九州考古学論攷』吉川弘文館 1972.

註6 註1に同じ

註7 註1に同じ

註8 児玉真一ほか「豊津町発見の箱式石棺墓と副葬品」『とよ』6号 1980

児玉真一「福岡県京都郡豊津町平遺跡発見の箱式石棺墓副葬品」『九州考古学』55 1980

註9 註1に同じ

註10 註1に同じ

註11 1988～1990年県教委の調査のもので、現在整理中のもの、内容については現場説明会要旨また新聞記事等から拾い上げた。

註12 高倉洋彰「弥生時代の鏡片副葬について」『九州考古学』51 1976

現在、銅鏡鑄型が出土している遺跡は3例で、奴国所在地である春日市の春日丘陵の須玖坂本遺跡と須玖永田遺跡^(はいつ)の2遺跡である。坂本遺跡のものは完成品で、後に砥石に転用されている。鏡式は内行花文鏡で鏡経は7.5cmで、石質は長石片岩である。後者永田遺跡鏡鑄型片である。須玖岡本遺跡から200m前後の位置である。もう1例は朝倉郡夜須町三牟田字ヒルハタ遺跡である。鑄型は完形品のもの。

註13 小田富士雄「豊前京都郡発見の三重墓」『古代学研究』第20号 1959

註14 永峰光一「鏡片と再加工と考えられる白銅板について」『信濃』第18巻4号、1966

註15 瀬川芳則「石庖丁再考—その思想的背景について—」『考古学研究』第15巻第3号 1969

註16 小林行雄『古鏡』学生社 1965

註17 賀川光夫『大分県の考古学』吉川弘文館 1971

註18 三好保治「二つの石棺より検出された破碎鏡片」『四国考古学古代史研究』1 1968

註19 正岡睦夫「鏡片副葬について」『古代学研究』第90号 1979

註20 高橋徹「廃棄された鏡片」『古文化段叢』6 1979

高橋徹「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』第60号 1986

註21 19に同じ

註22 高倉洋彰「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2 1976

註23 中間発表要旨 総括発表要旨等や各社及びアエラ No.47 1984 10.31 朝日新聞社

註24 山口譲治「野多目前田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告 第85集 1982 中世の溝の中より出土したものである。

註25 行橋市教育委員会編『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書 第17集 1985

付図14に弥生時代後期中頃～古墳時代初頭土器編年図を表示している。これは一応の骨子となるが、その後に、武末純一「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982の中で、豊前の編年表を表示している。これの第Ⅰ期は筑前的高三瀨・第Ⅱ期は下大隈、第Ⅲ期は西新の並行となる。複合口縁を中心にしての考察である。豊後については羽田野光洋の研究がある。本遺跡の資料は編年図の欠を埋めるものである。柳田康雄の研究(『三、四世紀の土器と鏡の中』)でも豊前のことは若干触れられている。

註26 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性—九州—」『日本の考古学Ⅲ』1966

註27 柳田康雄『三雲遺跡Ⅰ～Ⅳおよび南小路地区』福岡県教育委員会 1980～1985柳田康雄『三、四世紀の土器と鏡の中—伊都の土器からみた北部九州—』・『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982 柳田康雄「高三瀨と西新式土器」『弥生文化の研究』四、雄山閣 1987 等の論述以外にも、出現期古墳の研究もなされている。その一環このような研究である。

註28 井上裕弘「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『児島隆人先生喜寿記念 古文化叢集』1990

これ以前に柳沢一男が第26回埋蔵文化財研究会での発表で、編年図案を提出している。これを叩台にして作られているものであるが豊前系統のものの、資料は不足していることは言える。

(3) 総括

今回の発掘調査の成果を箇条書にして述べる。

1. 津留遺跡は標高 9 m 前後の低地の遺跡で、この時期の生活遺構ではより河口に近い、水辺の集落である。
2. 当該遺跡は弥生後期末から古墳時代初頭にかけての住居跡を伴う生活遺構と溝で代表される。
3. II 区の溝 5 から方格規矩鏡の鏡片が出土している。
4. 当該遺跡の出土遺物で、溝内より出土した遺物群は、すなわち古式土師器群は基本資料となる。
5. 土器群と鏡片とで代表される遺跡で、暦年代では 3 世紀前半が中心で、俗に言う邪馬台国の時代である。

以上が、津留遺跡のまとめである。発掘調査・整理報告作業に協力された方々に感謝しつつ、筆を置く。(H3. 2)

行橋 B・P 津留遺跡で、野帳より二句

^{コスモス}
秋櫻の

背後に見えし

^{アキ}
中秋の月

(久仁)

^{ヒマワリ}
向日葵の

比してくらべし

^{アキ}
中秋の月

(久仁)

圖 版



津留遺跡全景（北から）手前Ⅰ区 奥Ⅱ区



(1) 津留遺跡俯瞰（北から）



(2) 津留遺跡Ⅰ区全景（上から）



津留遺跡Ⅰ区近景（南から）



津留遺跡Ⅰ区土塙状態 (左) 上から、(右) 俯瞰 ※ 番号は土塙番号



津留遺跡Ⅰ区溝Ⅰ全景（東から）



津留遺跡Ⅰ区溝2近景（南から）



(1) 津留遺跡溝 2 遺物出土状態



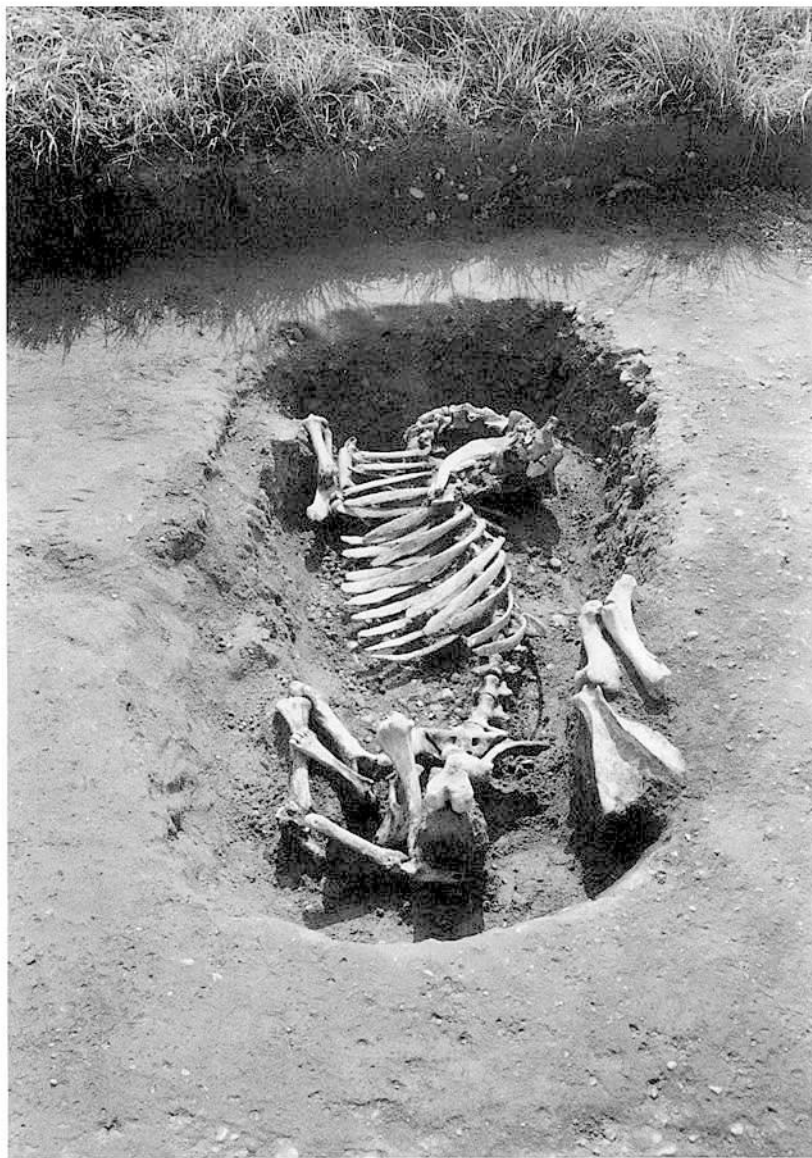
(2) 津留遺跡溝 2 遺物出土状態 (上) 南から、(下) 壺出土状態



(1) 津留遺跡I区3号土壇



(2) 津留遺跡I区(上) 2号土壇 (下) 5号土壇



◀(1) 津留遺跡 I 区 6 号土坑

(2) 津留遺跡 I 区 9 号土坑





津留遺跡Ⅱ区調査区全景俯瞰



津留遺跡Ⅱ区調査区全景（上から）



(2) 津留遺跡Ⅱ区南側全景 (東から)



(1) 津留遺跡Ⅱ区北側全景 (東から)



(1) 津留遺跡Ⅱ区10区全景 (西から)



(2) 津留遺跡Ⅱ区10区近景 (西から)



津留遺跡Ⅱ区住居跡付近近景



津留遺跡Ⅱ区住居跡全景（東から）



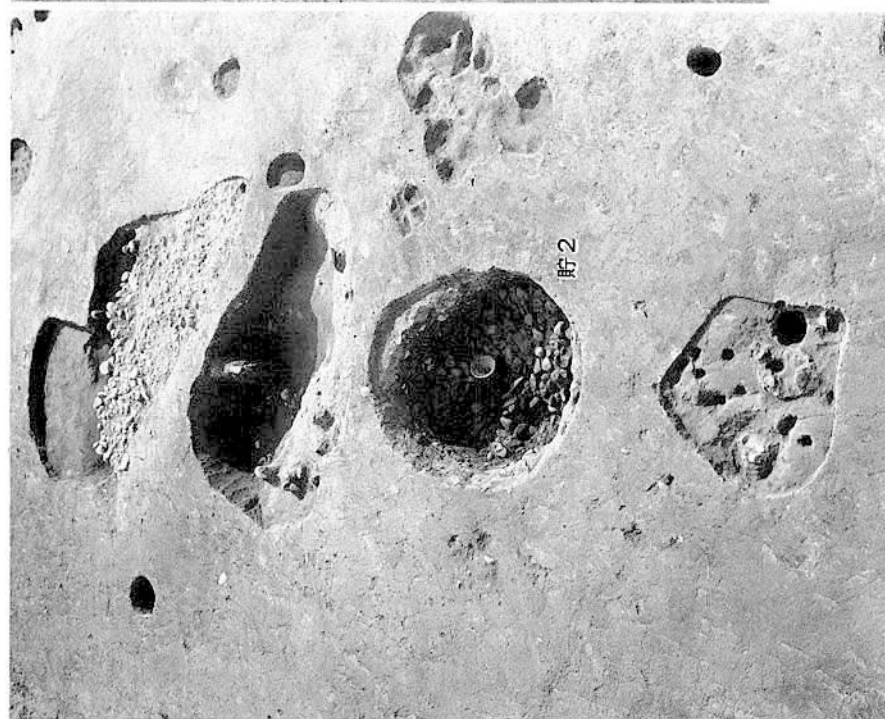
(1) 津留遺跡Ⅱ区住居跡遺物出土状態



(2) 津留遺跡Ⅱ区住居跡遺物取上げ後



(1) 津留遺跡Ⅱ区1号貯蔵穴全景（北から）



(2) 津留遺跡Ⅱ区2号貯蔵穴付近全景（北から）



(2) 津留遺跡Ⅱ区溝近景 (東から)



(1) 津留遺跡Ⅱ区溝全景 (東から)



津留遺跡Ⅱ区溝4全景（遺物出土状態）（南から）



(1) 津留遺跡Ⅱ区溝全景（南から）



(2) 津留遺跡Ⅱ区溝近景（南から）



(1) 津留遺跡Ⅱ区10区溝



(2) 津留遺跡Ⅱ区10区溝 4 遺物出土状態



(1) (上) 溝 4 遺物出土状態 (2) (下) 溝 5 鏡片出土状態



1



2



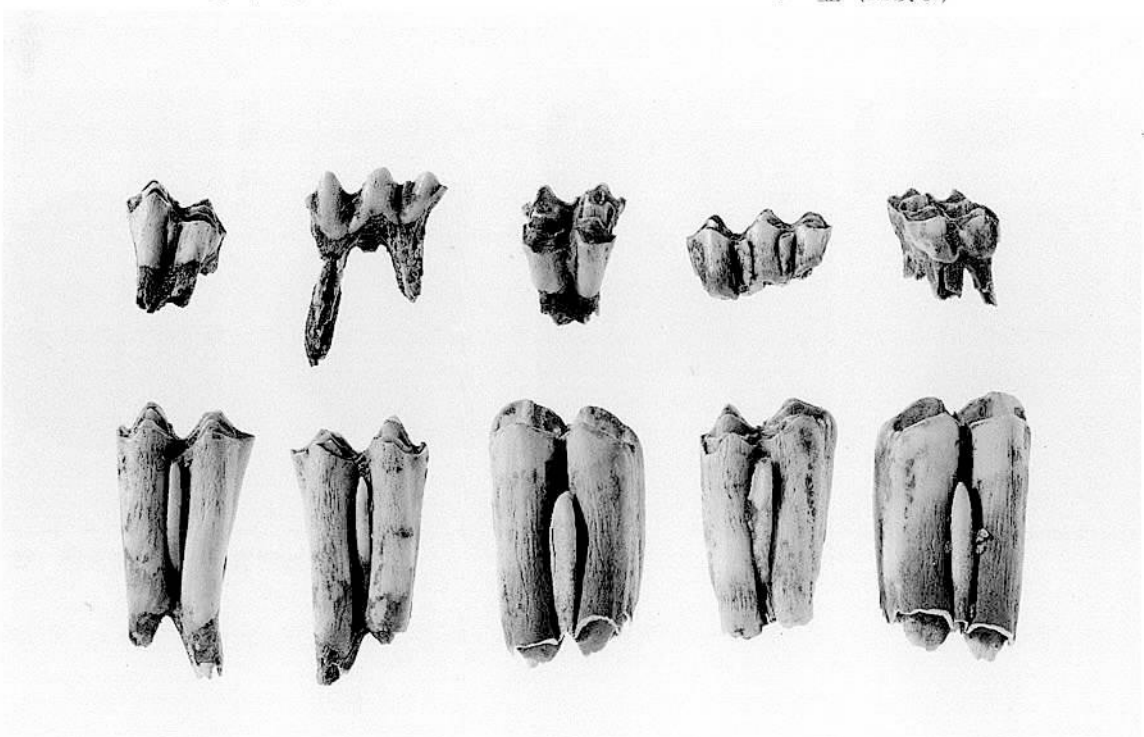
3



4

1 高台付碗 (中世溝)
3 甕 (土壇 4)

2 甕 (土壇 2)
4 壺 (土壇 5)



5

津留遺跡 I 区出土遺物①

5 牛の歯 (土壇 3)



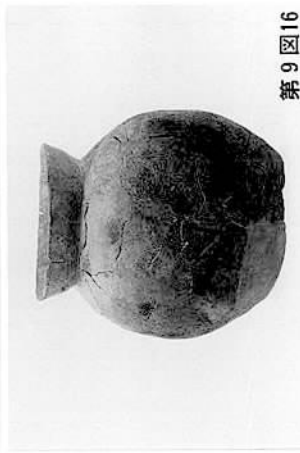
第8图3



第8图10



第8图9



第9图16



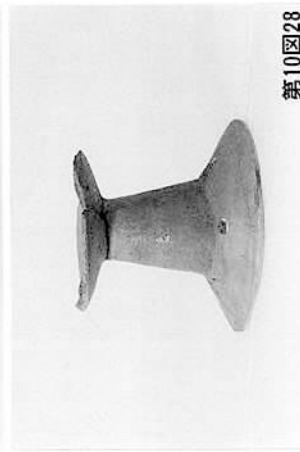
第9图18



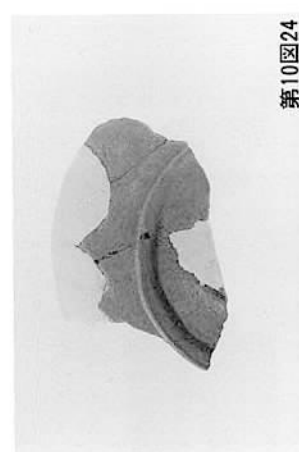
第9图12



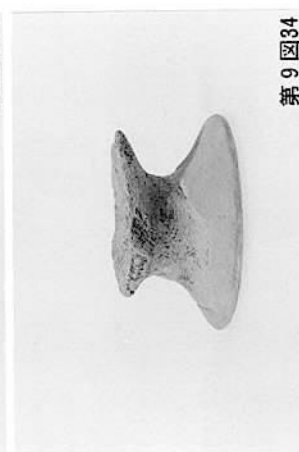
第9图15



第10图28



第10图24



第9图34

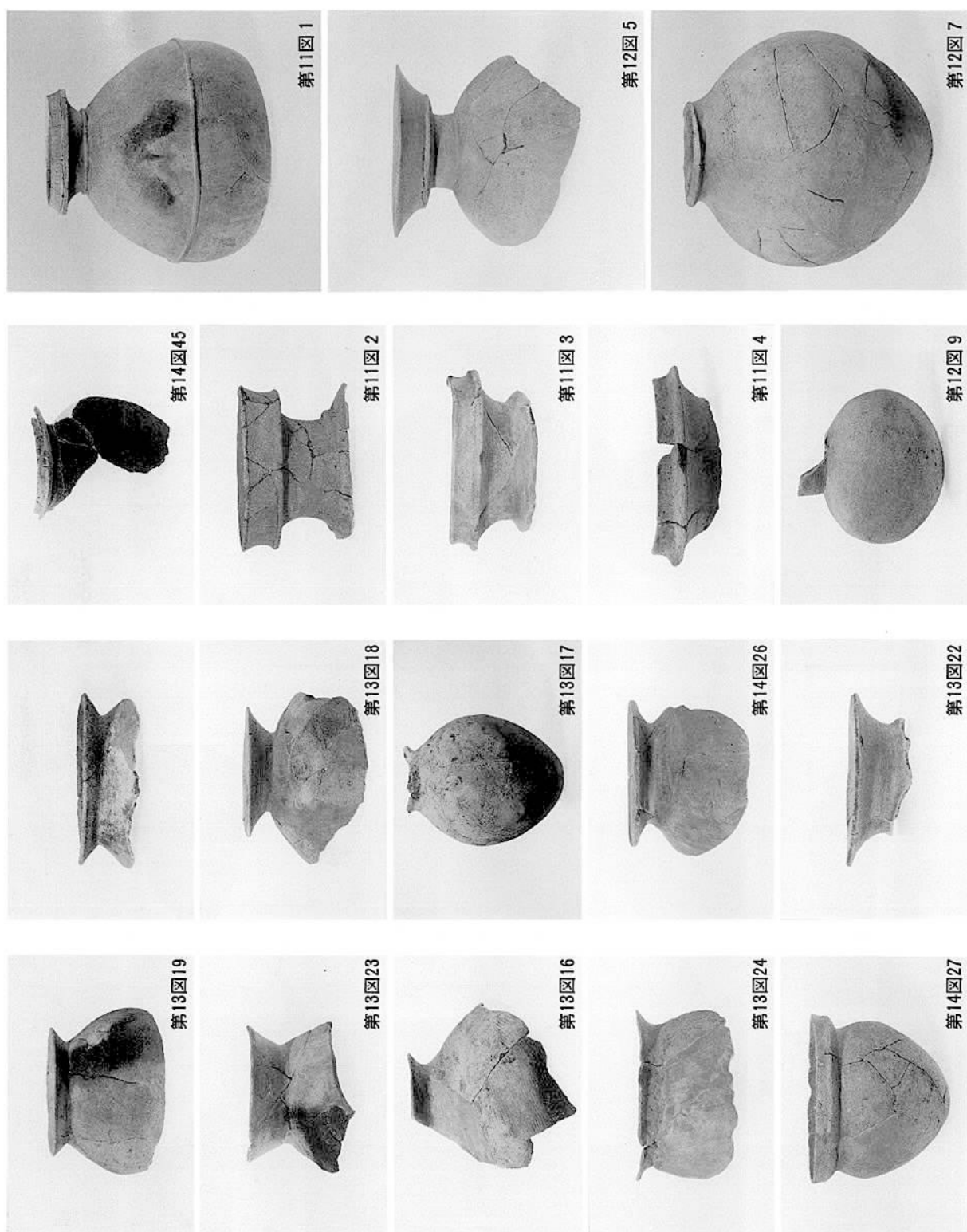


第10图38



第9图37

津留遺跡Ⅰ区出土遺物②（溝2上層）



津留遺跡Ⅰ区出土遺物③ (溝2下層)



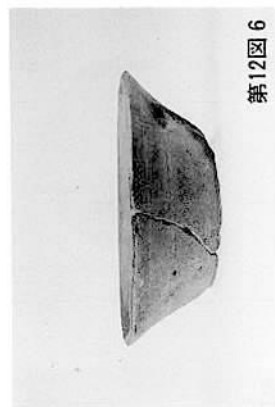
第9图19



第9图14



第8图1



第12图6



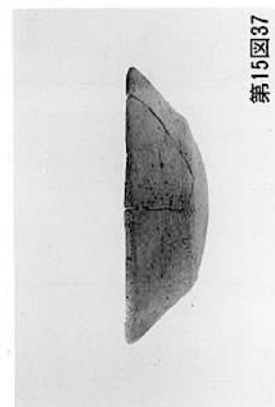
第8图6



第8图2



第10图36



第15图37



第10图27



第10图25



第9图20



第8图11



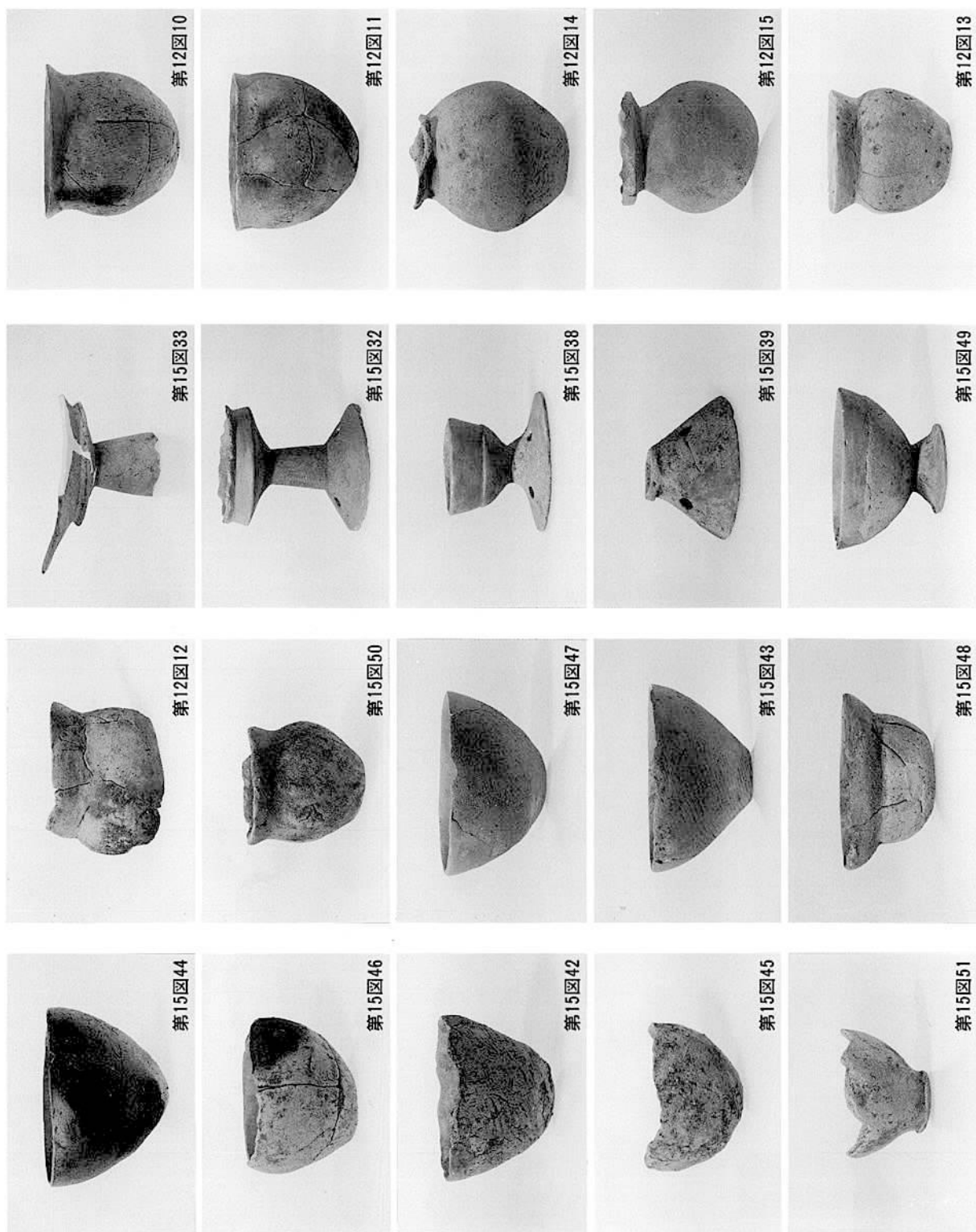
第10图40



第8图8



第10图39



津留遺跡Ⅰ区溝2出土遺物⑥



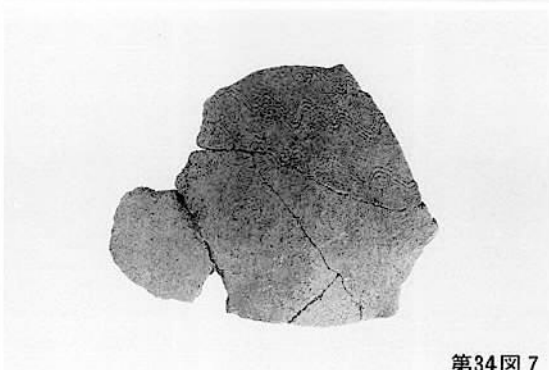
第34図 4



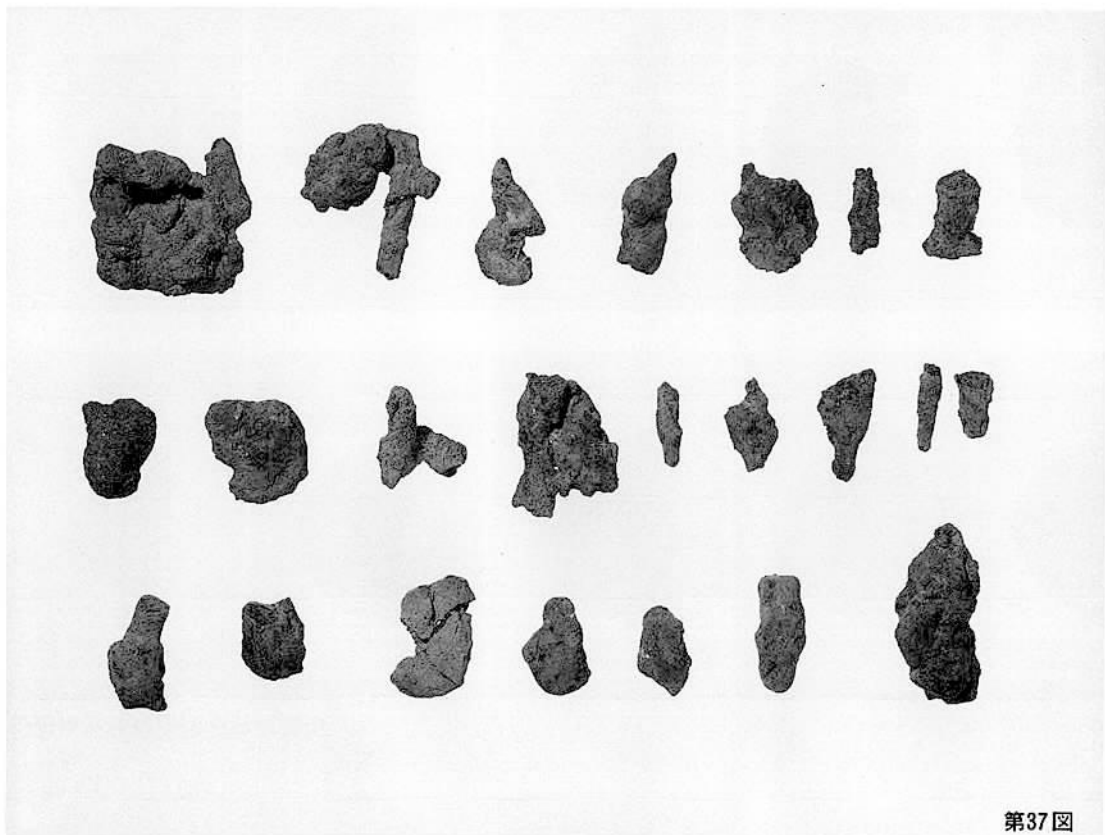
第35図 4



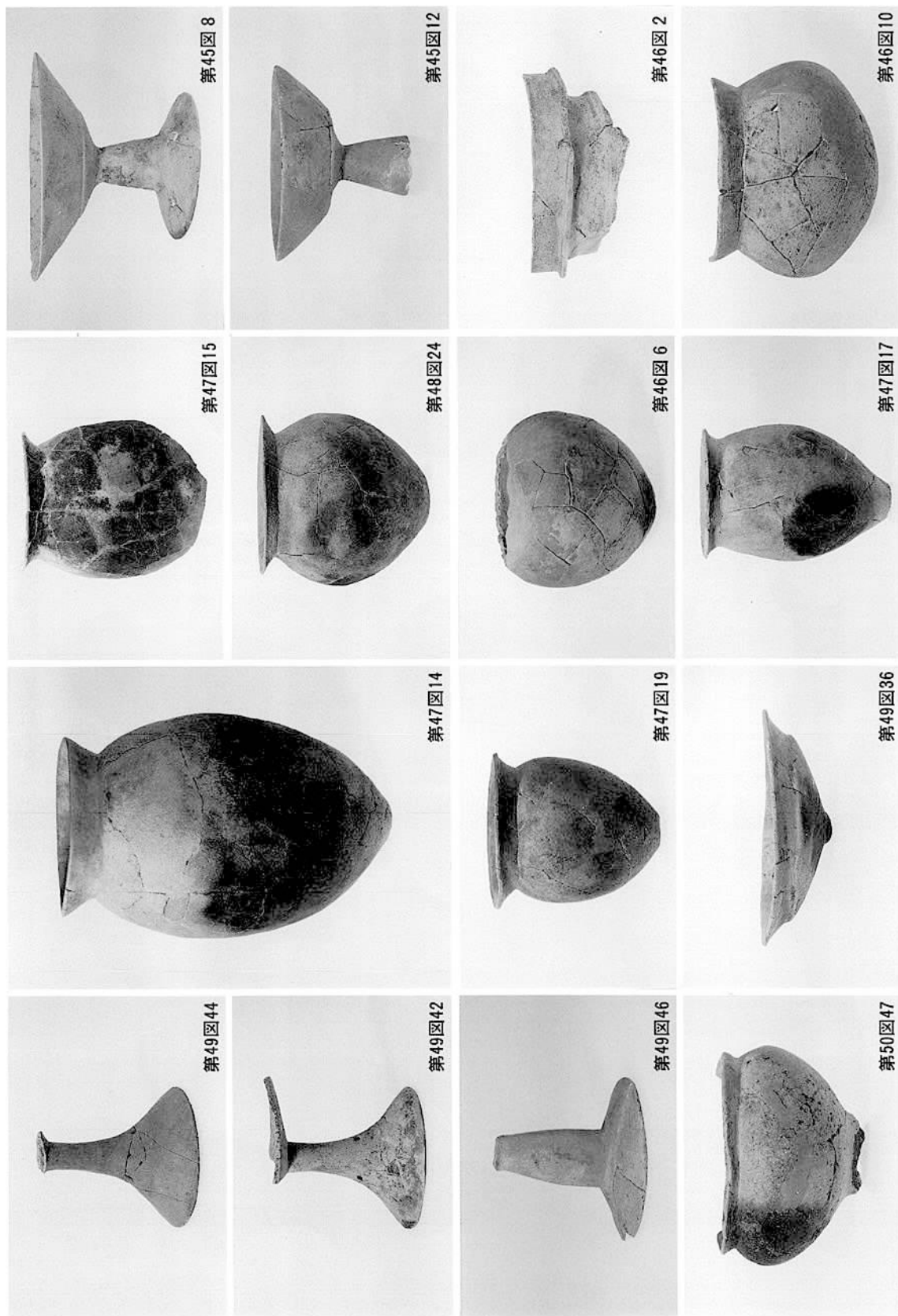
第39図 2

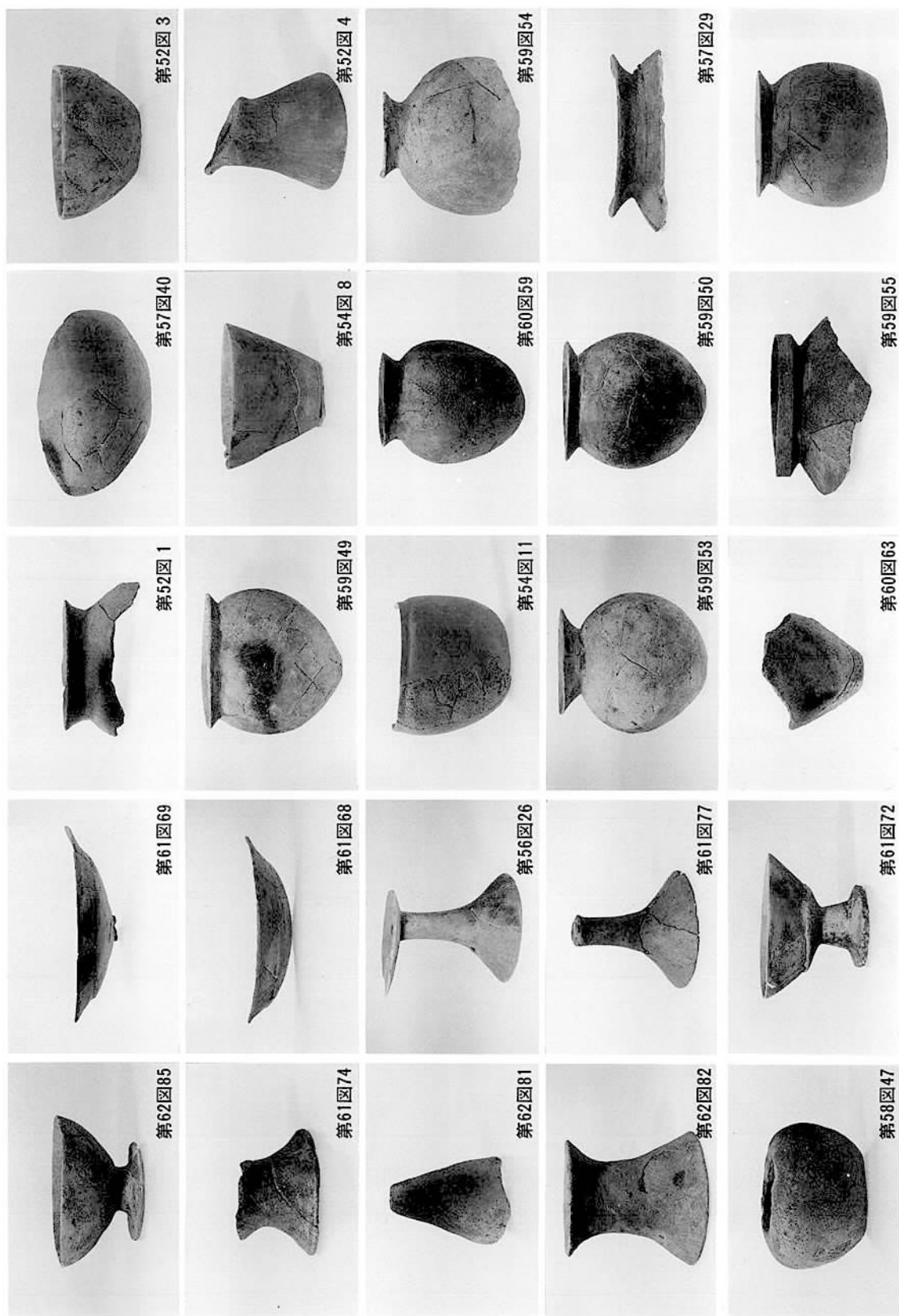


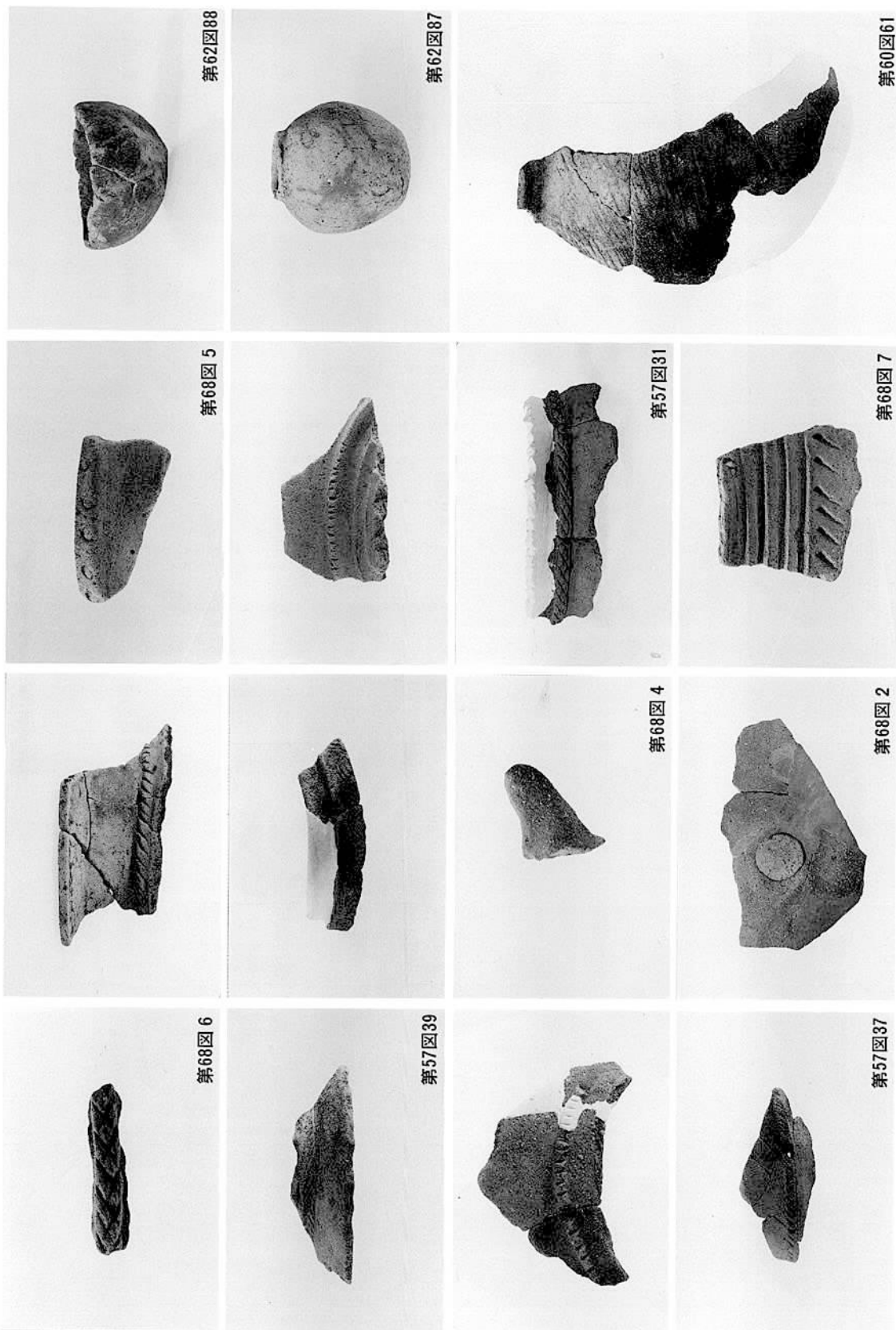
第34図 7

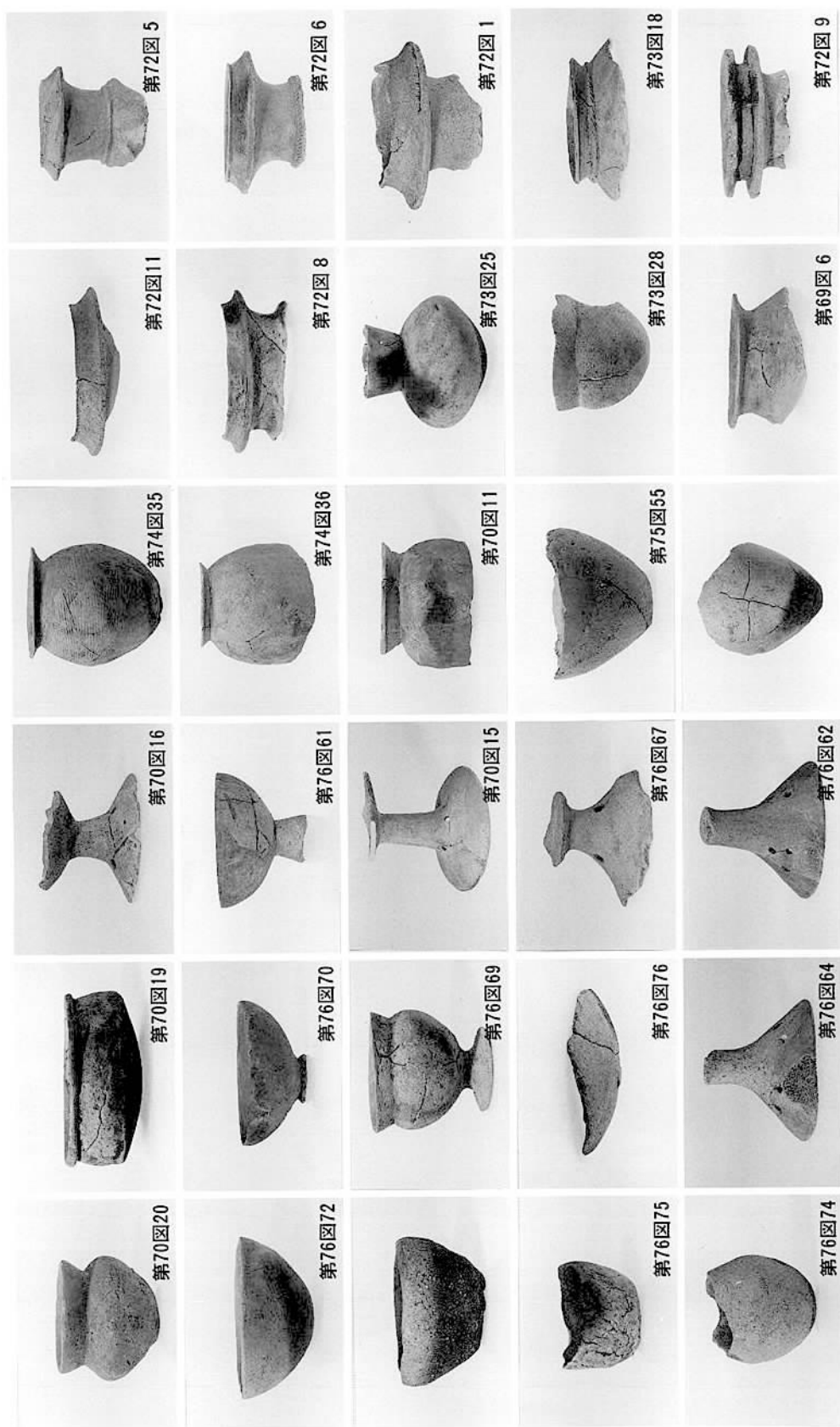


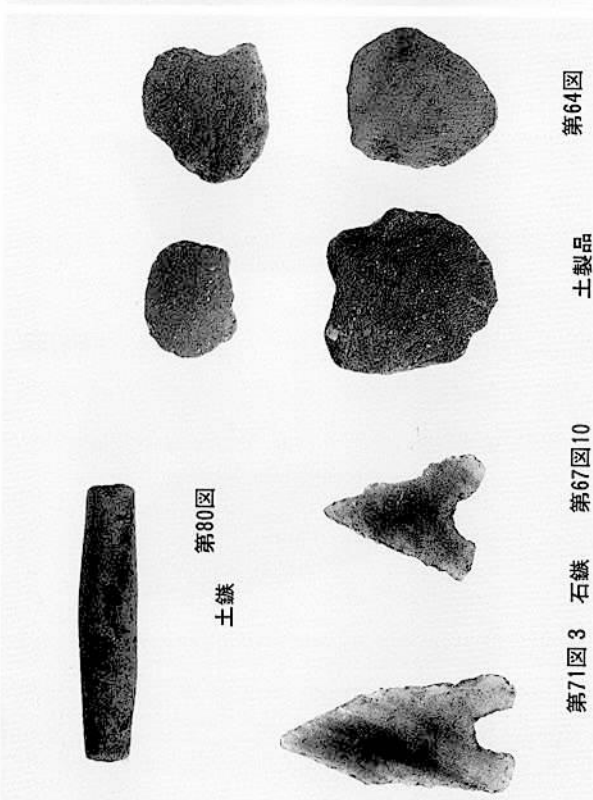
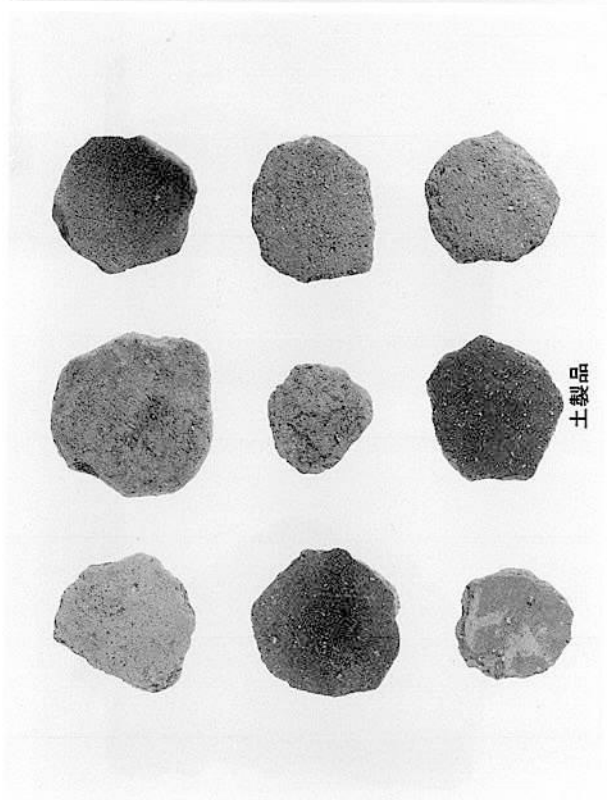
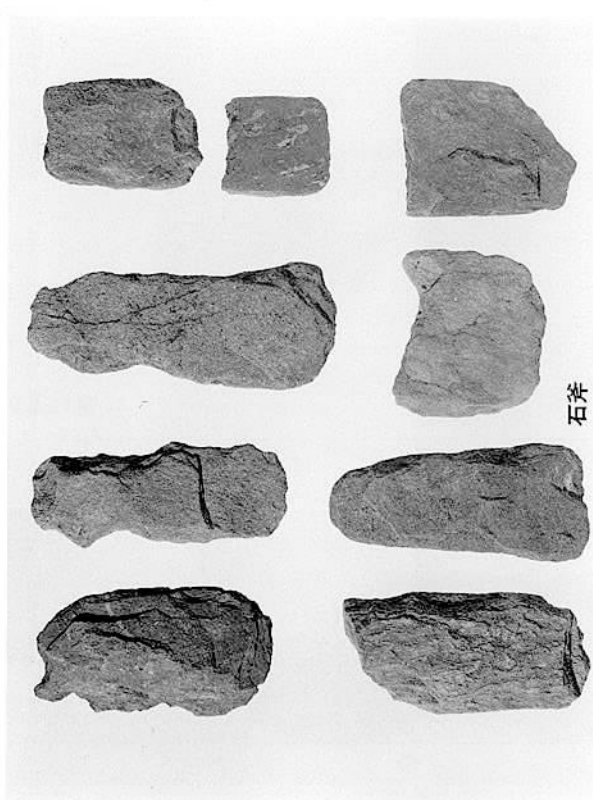
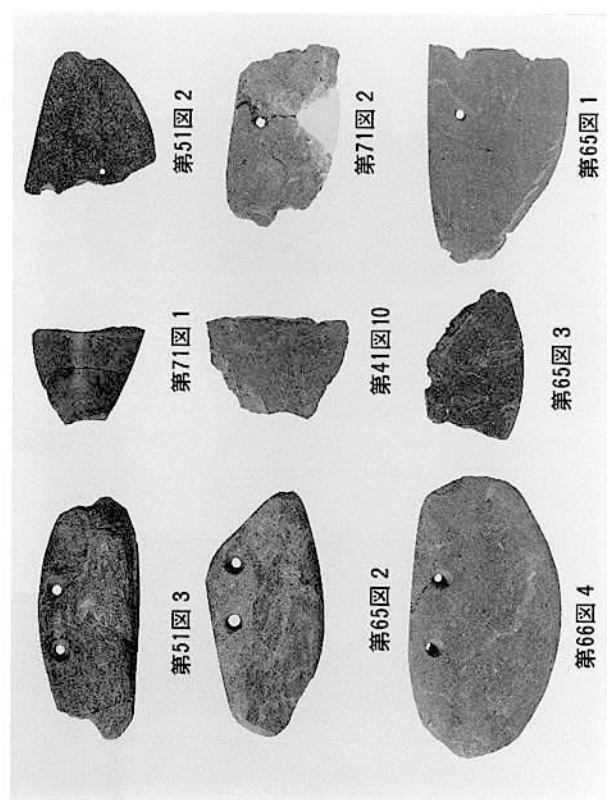
第37図



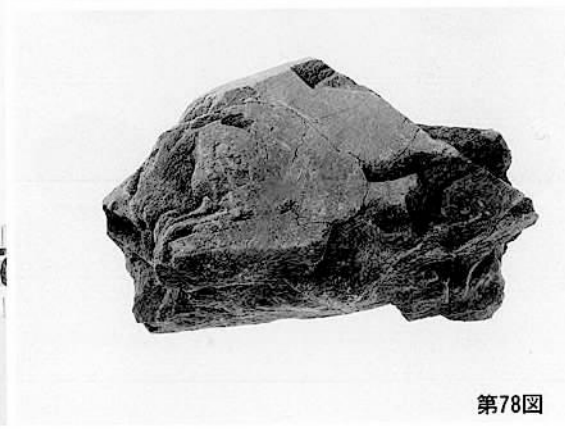
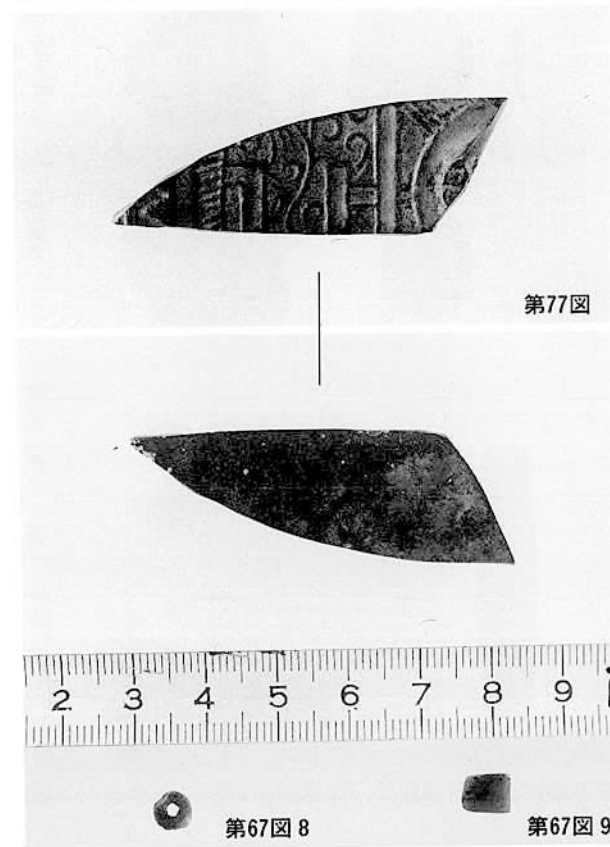
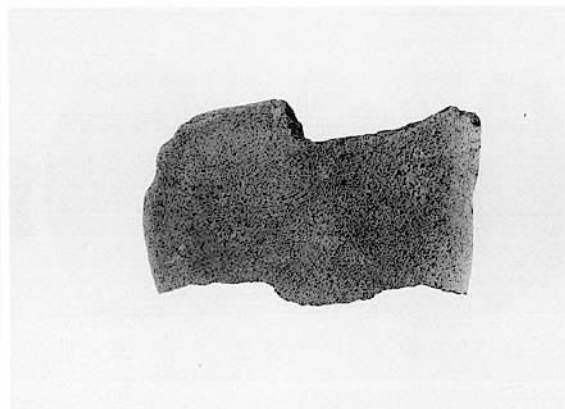
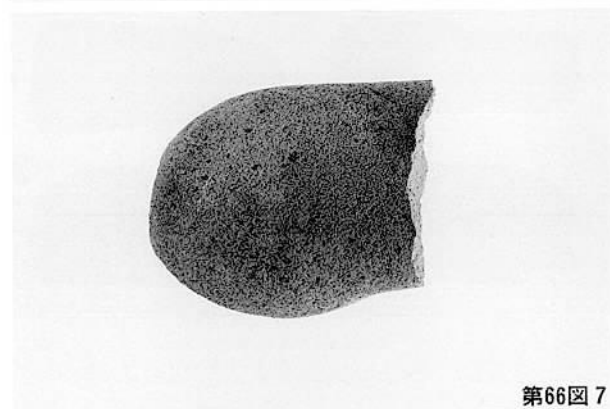
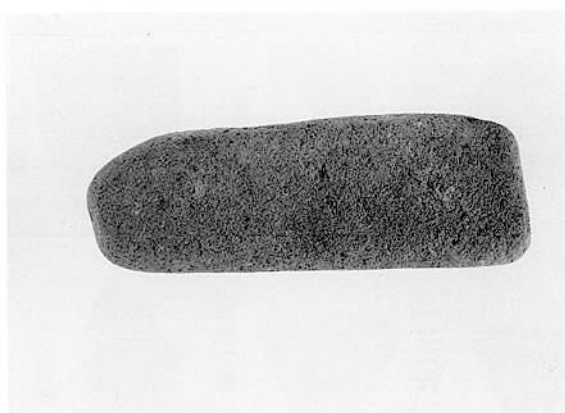








津留遺跡Ⅱ区出土遺跡① (石庖丁・石斧・土製品・石铤)



行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集

津 留 遺 跡

1991年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会
福岡市博多区東公園7番7号

印 刷 株 式 会 社 川 島 弘 文 社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号
電話 (092) 641-2665

福 岡 県 行 政 資 料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 2	登録番号 7

一般国道
10号線 行橋バイパス関係埋蔵文化財調査 第1集

津留遺跡

福岡県行橋市大字津留所在遺跡の調査

付 図

付図1 津留遺跡発掘区地形測量図($\frac{1}{300}$)

付図2 津留遺跡Ⅰ区2号溝実測図($\frac{1}{30}, \frac{1}{60}$)



付図1 津留遺跡発掘区地形測量図(1/300) アミメは罅



付図2 津留遺跡Ⅰ区2号溝実測図(1/500)(1/500)